

張籍詩訳注(20)

——「隴頭行」「廢宅行」「秋夜長」——

畑村 学
橘 英範
佐藤 大志

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (20)

Manabu HATAMURA
Hidenori TACHIBANA
Takashi SATO

要旨 本稿は、中唐の詩人・張籍の詩の訳注(20)である。本篇には、「隴頭行」・「廢宅行」・「秋夜長」(ともに中華書局『張籍詩集』巻七に載録)の訳注を掲載する。前稿「張籍詩訳注(19)」で巻一 所載の樂府詩を中心とする四十一首を訳し終えた。本稿より巻七に載録されている詩(樂府三十三首、古風二十七首)の訳注作成を順番に行っていくことにする。

訳注

414 隴頭行

【題解】

隴山のうた。

「隴頭」は隴山、または隴山の山頂。隴坻・隴坂・隴首などと言い、現在の陝西省と甘粛省の境界をなす山であった。交通の要所であると同時に、漢民族と西北の異民族とを隔てる国境であり、古来多くの詩に詠じられてきた。山頂までは九つの坂がつつら折りに連なり、上る者は七日かけてやっと到達

できるほど険しい。山頂からは四方に川が流れ落ち、これが所謂「隴頭水」であるという(以上、『樂府詩集』巻二に引く辛氏『三秦記』を参照)。中国古典詩に詠われる「隴頭」のイメージ及び樂府「隴頭」「隴頭水」の特徴については、松浦友久編『漢詩の事典』(大修館書店、一九九九年)の「名詩のふるさと(詩跡)」(植木久行氏執筆)の「隴山・隴水」の条を参照。

二〇一一年一月二二日(受理)

畑村 学 宇部工業高等専門学校一般科准教授
橘 英範 岡山大学文学部言語文科学科准教授
佐藤 大志 広島大学大学院教育学研究科准教授

この詩は、『楽府詩集』卷二「横吹曲辞一」及び『全唐詩』卷一八では「隴頭」と題して「行」が無い形で掲載されている。『楽府詩集』では、張籍より前に陳の後主の作があるが、同書卷二五「横吹曲辞五」には、作者不明の「隴頭歌辞」三首が掲載される。

『楽府詩集』卷二一の『楽府解題』には次のようにある。

漢横吹曲、二十八解、李延年造。魏・晋已来、唯伝十曲。一曰「黄鵠」、二曰「隴頭」、三曰「出関」、四曰「入関」、五曰「出塞」、六曰「入塞」、七曰「折楊柳」、八曰「黄覃子」、九曰「赤之揚」、十曰「望行人」。後又有「関山月」「洛陽道」「長安道」「梅花落」「紫驢馬」「雨雪」「劉生」八曲、合十八曲。

漢の横吹曲、二十八解は、李延年造る。魏・晋已来、唯だ十曲を伝うるのみ。一は「黄鵠」と曰い、二は「隴頭」と曰い、三は「出関」と曰い、四は「入関」と曰い、五は「出塞」と曰い、六は「入塞」と曰い、七は「折楊柳」と曰い、八は「黄覃子」と曰い、九は「赤之揚」と曰い、十は「望行人」と曰い。後又「関山月」「洛陽道」「長安道」「梅花落」「紫驢馬」「驄馬」「雨雪」「劉生」八曲有りて、合わせて十八曲なり。

これによれば、「隴頭」の古歌はもと漢の李延年が作った横吹曲二十八解の一つであり、その後魏晋に伝わった十曲に含まれるという。

楽府題について、『全唐詩』卷一八所載の詩の校語には「一曰隴頭水」(一に隴頭水と曰う)とある。「隴頭水」も楽府題の一つで、同じく『楽府詩集』卷二に「隴頭」「隴頭吟」(王维・翁綬の作)「隴頭水」(梁の元帝以下、四名の詩が掲載)の順番で掲載されている。また、関連する楽府題として、『楽府詩集』卷二五「横吹曲辞五」に「隴頭流水歌辞」が採録される。これは、内容的にも征夫(多くが出征兵士)の望郷の念を主要なテーマとしている点で同題楽府として扱うのが妥当である。なお、「語釈」等で「隴頭」を始めとする同題楽府を扱う場合は、いずれも『楽府詩集』に拠ることにした。また「隴頭水」を含めた同題楽府と張籍「隴頭行」との比較については、「補」で詳しく触れることにしたい。

「隴頭」という言葉は、これまで27「関山月」(卷一)に「隴頭風急雁不下、沙場苦戦多流星」(隴頭 風急にして 雁下らず、沙場の苦戦 流星多し)、30「將軍行」(卷一)に「隴頭戦勝夜亦行、分兵処処收旧城」(隴頭 戦勝して 夜も亦た行き、兵を分かち 処処 旧城を収む)と見え、吐蕃との戦場として詠われている。詩における用例についてはその「語釈」を参照。そこでも指摘したが、杜甫には用例がなく、張籍には五首の詩の中で、い

れも戦争や辺塞のイメージを伴って詠じられている。なお李冬生注は、この語の用例として虞羲「詠霍將軍北伐」(『文選』卷二一)に「胡笳関下思、羌笛隴頭鳴」(胡笳 関下に思い、羌笛 隴頭に鳴る)とあるのを引く。霍將軍(去病)率いる漢軍の勢いに匈奴が怖じ気づく様子を詠うなかに見え、隴頭は匈奴が吹く笛が鳴る場所である。

【本文・書き下し文】

- | | |
|------------|-------------------|
| 1 隴頭路断人不行 | 隴頭 路断えて 人行かず |
| 2 胡騎已入涼州城 | 胡騎 已に涼州城に入る |
| 3 漢兵處處格鬪死 | 漢兵 処処 格鬪して死し |
| 4 一朝盡没隴西地 | 一朝尽く没す 隴西の地 |
| 5 驅我邊人胡中去 | 我が邊人を驅りて胡中に去らしめ |
| 6 恣放牛羊食禾黍 | 恣に牛羊を放ちて禾黍を食らわしむ |
| 7 去年中國養子孫 | 去年 中国にて子孫を養い |
| 8 今着氈裘學胡語 | 今 氈裘を着て胡語を学ぶ |
| 9 誰能還使李輕車 | 誰か能く還た李輕車をして |
| 10 重取涼州屬漢家 | 重ねて涼州を取りて漢家に属さしめん |

【押韻】

行―下平声一二庚、城―下平声一四清(同用)
 死―上声五旨、地―去声六至(古詩通押)
 去・黍・語―上声八語
 車・家―下平声九麻

【口語訳】

- 1 隴山では道が途絶えて 人が行くこともなく
- 2 胡の騎兵は もうとつくに涼州の城に侵入した
- 3 漢軍の兵士は あちこちで格鬪しては死んでいき
- 4 ある日 隴山の西で全滅したのだ
- 5 我らが辺境の人々を驅りたてて 胡の地に連行し
- 6 胡どもは好き勝手に牛や羊を放つて 稲やキビを食べさせる
- 7 去年は 中国で子や孫を養い育てていたのに
- 8 今では毛織物や皮衣を身につけて 胡の言葉を学んでいる

9 誰が再び李輕車のような優れた將軍に命令し
10 再び涼州を取り戻して 漢のものにしてくれることができるだろう

【語釈】

1・2 隴頭路断人行、胡騎已入涼州城

【隴頭】隴山。または隴山の山頂。意味や用例については【題解】を参照。

【路断】道が断絶すること。「人行」は、ここでは胡との戦争（具体的には吐蕃との戦争）によって隴山の山頂に続く、また隴山を越えて隴西へ向かう道が途絶えたことを言う。

『後漢書』馮異伝に「道路断隔、委輸不至、軍士悉以果实為糧」（道路断隔して、委輸至らず、軍士悉く果实を以て糧と為す）とあるのは、戦乱によって道路が破壊されたことで、食糧等の補給ができなくなったことを言う。「路断」は史書には多く見られるが、唐以前の詩文には用例が見えない。

唐詩には「路断」の語が多く見られるようになるが、張籍と同様の状況を詠じた例はほとんどない。そのなかで、盛唐の袁瓘「鴻門行」(『全唐詩』卷一二〇)に「戰酣烽火滅、路断救兵稀」(戰酣にして烽火滅し、路断たれて救兵稀なり)とあるのは、激しい戦争によって道が寸断し、救援部隊が進めなくなった状態を詠う。杜甫にある一例も張籍と同様、吐蕃との戦争に関連して詠じられており、「喜聞盜賊蕃寇総退口号五首」其三(『詳注』卷二二)に「逆気数年吹路断、蕃人聞道漸星奔」(逆気数年 路を吹きて断えしめ、蕃人聞くならず 漸く星奔すと)とあるのは、吐蕃の反逆(逆気)によって交通路が断絶したことを詠ずる。

吐蕃との戦争の敗戦により隴西への道が閉ざされたことについては、この詩とも関係の深い王建「涼州行」(『王建詩集』卷一)にも「涼州四辺沙皓皓、漢家無人開旧道」(涼州の四辺 沙皓皓、漢家 人の旧道を開く無し)とある。

なお、『全唐詩』卷一八・『樂府詩集』・蜀刻本は「已断」(已に断ち)に作り(『全唐詩』卷三八二は「一作已」と言う)、「もうとつくに断絶している」の意味になるが、断絶しているのはやはり隴山の山頂を経て涼州へと向かう道であろう。

【胡騎】胡人の騎兵、または軍隊を言う。胡人はここでは吐蕃を指す。

張籍にもう一例、2「西州」(卷一)に「胡騎來無時、居人常震驚」(胡騎

來たるに時無く、居人 常に震驚す)と見えた。この詩と同じく吐蕃によって占領された土地をテーマに詠われた詩である。史書や杜甫の詩で使われた例については、「西州」の【語釈】を参照。杜甫には八例あって唐詩では最も多い。陳注は、杜甫「吹笛」(『詳注』卷一七)に「胡騎中宵堪北走、武陵一曲想南征」(胡騎中宵に北走するに堪えたり、武陵一曲 南征を想う)とあるのを引く。上句は、西晋の劉琨が并州刺史の時、胡騎に囲まれた際に夜、笛を吹いて胡人に望郷の念を起させ、困みを解いて去らせた故事を踏まえる。

以下、「西州」の【語釈】で指摘したこと以外でこの詩との関係深い例を挙げる。唐までの詩では、梁代になって用例が増えるようだ。一例として、同題樂府である梁・劉孝威「隴頭水」に「時觀胡騎飲、常為漢国羞」(時に胡騎の飲を觀れば、常に漢国の為に羞ず)とあり、「胡」と「漢」が対比されており、この詩と類似する。唐詩では初唐から用例が見え、辺塞詩や辺塞を詠じた樂府詩などに多く見える。陳子昂「還至張掖古城聞東軍告捷贈韋五虛己」(『全唐詩』卷八四)に「漢軍追北地、胡騎走南庭」(漢軍 北地に追ひ、胡騎 南庭に走る)とあるのも、「漢」の軍隊と「胡」の騎兵が対比された例である。

「已入涼州城」胡騎はとつくに涼州の城市に入っている。涼州(現在の甘肅省武威市)は隴山の西北西(隴西地方)に位置し、前漢以来、西域と関中を結ぶ交通の要所であった。西域統治の拠点であり、またそのために吐蕃を中心とした異民族に侵略されることにもなった。唐の支配下にあった盛唐頃までは東西交流の中継地点として栄えたが、代宗の広徳二年(七六四)、吐蕃によって陥落し、吐蕃の支配下に入る。『元和郡県図志』隴右道に、広徳二年(七六四)に、吐蕃により涼州が陥落したとある。

涼州の陥落については、白居易「新樂府・西涼伎」0149に「涼州陥來四十年、河隴侵將七千里」(涼州 陥りてより 來 四十年、河隴侵將せらるること七千里)とある。涼(涼州)州が吐蕃の手に落ちてから四十年も経つのに、失地を回復する意志のない辺境守備の將兵を批判して詠っている。

「已入」について、『全唐詩』卷一八・三八二、『樂府詩集』、四庫本は「夜入」に作る。文字通り夜に涼州の城市に入ってきたとなる。蜀刻本は1・2句の三字目をともに「已」に作るが、その場合、「とつくに道が断絶している」ので、とつくに涼州の城市に入ってきている」となり、張籍が繰り返しの効果を狙っていることになる。ただ、ここは対句の構造になっていないので、元の形がそのようであったとは限らない。

以上この二句は、隴西にある涼州がとつくに吐蕃の手に落ち、すでに占領状態にある現状を詠う。隴山の頂上は古来辺境防衛の守備兵が駐屯する場所であり、そこに登る道が途絶えて通る者がいないということは、隴山より西北に位置する涼州は、とつくに吐蕃によって陥落していることになる。もはや救出するための兵すら送り込まれることのない、絶望的な状況にある涼州を詠っている。

3・4 漢兵処格闘死、一朝尽没隴西地

〔漢兵〕漢軍の兵士、軍隊。ここでは唐朝の兵卒や軍隊の喩えとして用いている。

史書では『史記』『漢書』に、当たり前だが多く用いられている。一例として、漢軍が胡（匈奴）と戦って敗戦した例を挙げれば、『史記』李將軍伝に「（李）広為圍陳外嚮。胡急擊之、矢下如雨。漢兵死者過半」（李）広圍を為りて外に陳ねて嚮かう。胡急に之を撃ち、矢の下ること雨の如し。漢兵死者半ばを過ぐ」とある。

唐以前の詩では、項羽の詩に和した虞美人の作として伝わる詩（『史記』項羽本紀の正義所引『楚漢春秋』に「漢兵已略地、四方楚歌声」（漢兵已に地を略し、四方 楚歌の声）とあり、この場合、文字通り劉邦率いる漢の兵隊。作者が確かなものとしてはずつと下って陳代に一例あるのみで、張正見「賦得韓信詩」（『藝文類聚』卷五五）に「淮陰総漢兵、燕齊擅遠声」（淮陰漢兵を総べ、燕齊 遠声を擅にす）とあるのは、韓信が劉邦の將軍として漢軍を率いて戦ったことを言う。

唐詩では初唐から用例が見え、崔融「関山月」（『全唐詩』卷六八）に「漢兵開郡国、胡馬窺亭障」（漢兵 郡国を開き、胡馬 亭障を窺う）とあるのは、漢軍が戦争によって領土を広げていったことを言う。「関山月」が樂府題であるため、漢代のことを詠じたのか、それとも漢代に重ねて唐代のことを詠じたのかはわからない。また、高適「薊門行五首」其五（同卷二一一）に「胡騎雖憑陵、漢兵不顧身」（胡騎 陵に憑ると雖も、漢兵 身を顧みず）とあるのは「胡騎」と対比した例であり、孫欽善校注『高適集校注』（上海古籍出版社、一九八四年）に拠れば、五首は漢代に重ねて唐代の辺境防衛について詠じたものとされている。三五〇―三六頁参照。

杜甫には、『全唐詩』所載の「送韋十六評事充同谷郡防禦判官」（卷二一七）に「羌父豪豬靴、羌兒青兕裘」（羌父 豪豬の靴、羌兒 青兕の裘）とあり、下句の校語に一作として「漢兵黑貂裘」（漢兵 黑貂の裘）とあるのみ。韋某が赴任する土地の風俗を記すなかに見え、一作の方であれば、羌族と、彼

らを統治する唐朝の兵を対比していることになる。

張籍の用例はこのみ。

なお、四庫本、『樂府詩集』、『全唐詩』卷一八、蜀刻本は「漢家」に作る。「漢家」は漢の国家。後の10句にも見え、用例はその【語釈】を参照。

〔処処〕あちこち。漢の兵士があちこち至る所で戦って死んだことを表現する。四庫本等の「漢家処処」であれば、漢の国家（国土）のあちこちで戦争が行われたという意味になるであろう。

この詩と同じく涼州での戦争を詠じた張籍30「將軍行」（前出）に「隴頭戰勝夜亦行、分兵処処收旧城」（隴頭 戦勝して 夜も亦た行き、兵を分かち 処処 旧城を収む）とあり、兵隊を分散させて戦う様子を詠じている。用例はその【語釈】を参照。

〔格闘死〕戦って死ぬ。戦死する。「格闘」は戦争すること。

三字の並びで『漢書』武五子伝（戾太子據）に「主人公遂格闘死、皇孫二人皆并遇害」（主人公 遂に格闘して死し、皇孫の二人は皆並びに害に遇う）と見える他、『東方朔伝』（『藝文類聚』卷九七）に「撃之柏柏、死者穰穰。格闘而死、主人被創」（之を撃つこと柏柏、死する者穰穰たり。格闘して死し、主人創を被る）とあるのは、人の血を吸う蚊について述べたもの。

唐以前の詩に一例、この詩と同じく戦争の悲劇を詠じた樂府である陳琳「飲馬長城窟行」（『玉臺新詠』卷一）に「男兒寧當格闘死、何能佛鬱築長城」（男兒は寧ろ當に格闘して死すべし、何ぞ能く佛鬱として長城を築かん）とあり、長城の工事に従事する兵卒が不満を述べた言葉のなかに見える。唐詩では張籍以外に一例あり、李白「戰城南」（王琦注本卷三）に「野戰格闘死、敗馬号鳴向天悲」（野戰 格闘して死し、敗馬号鳴して天に向かい悲しむ）とある。以上の二例はいずれも樂府詩であり、戦争を詠じた詩であるという点で共通している。

「格闘」二字の用例自体も、唐より前の詩には、先の陳琳の詩以外にはない。唐代は盛唐頃から用例が見え始め、李希仲「薊北行二首」其二（『全唐詩』一五八）に「前軍飛鳥斷、格闘塵沙昏」（前軍 飛鳥断え、格闘して塵沙昏し）とあるのは、薊北（今の北京市西南の地）での匈奴との戦いを詠ずる。李希仲は安史の乱に遭遇しており、其一に出てくる「胡騎」や其二の「善于」は、安祿山の軍隊や安祿山を指しているのかもしれない。

杜甫に六例（うち一例は一作として）と最も多く、陳注はその内の「関山歌」（『詳注』卷一三）に「中原格闘且未帰、応結茅齋著青壁」（中原格闘して 且つ未だ帰らず、応に茅齋を結びて青壁に著くべし）とあるのを引く。

故郷のある中原が戦争状態にあるため帰れないことを詠う。杜甫以降は、李益と張籍に一例ずつあるだけで、晩唐には使われなくなった詩語のようだ。

「一朝尽没」ある日全滅した。「一朝」はわずかの時間を意味することばでもあるが、3句で漢軍の兵士が隴西の各地で戦い死んでいることが詠われているから、ここでは全滅した日のことを詠っていると解釈した。

「一朝」は、古くから詩文に常見の語。『周易』坤卦の文言伝に「臣弑其君、子弑其父、非一朝一夕之故」(臣 其の君を弑し、子 其の父を弑するは、一朝一夕の故に非ず)とあるなど、経書を始めとして古くから様々な詩文に見られる。

張籍にこの他一例、453「献從兄」(巻七)に「一朝遇讒邪、流竄八九春」(一朝 讒邪に遇い、流竄 八九春)とあるのは、この詩を送る從兄が、讒言によって突然左遷されたことを詠う。

「尽没」は全滅する。この詩と関係の深く、9句の【語釈】で再び指摘する『史記』李將軍伝(李広)、その孫の李陵の伝を記す箇所にも、「遂降匈奴。其兵尽没、餘亡散得歸漢者四百餘人」(遂に匈奴に降る。其の兵尽く没し、餘の亡散して漢に歸るを得る者四百餘人なり)とあり、異民族との戦争で漢軍が死滅したことを言う点で張籍のこの詩と共通する。唐以前の史書には多く見られるが、文学的な作品には用いられず、詩にも用例がない。唐詩の用例もほとんどなく、張籍のこゝ以外では、同時代も含めて白居易「春雪」(2029)に「上林草尽没、曲江氷復結」(上林 草尽く没し、曲江 氷復た結ぶ)とあるのみ。季節外れの雪によって、天子の御苑の春草がみな雪に隠れたことを言う。

同様の状況を詠じた詩としては、張籍161「没蕃故人」(巻二)に「前年伐月支、城上没全師」(前年 月支を伐たんとして、城上 全師没す)とあり、吐蕃(月支は吐蕃の古称の一つ)を征伐しようとしたが、ある城市での戦いで全軍が玉碎したと詠う。この詩はその遠征に参加し、音信不通となつてしまった友人の安否を気遣つて詠われたものである。また、張籍7「征婦怨」(巻一)にも「九月匈奴殺辺將、漢軍全没遼水上」(九月 匈奴 辺將を殺し、漢軍 遼水の上に全没す)とあり、匈奴によって漢軍が全滅したことを詠う。匈奴はこの当時すでに存在しておらず、ここでは匈奴に重ねて当時国境地帯で行われていた異民族との戦争が詠われていると考えられる。あるいは吐蕃であろうか。

「隴西地」隴山の西の地。「隴西」は秦の始皇帝が設置した郡名であり、漢代も継承された。今の甘肅省東南に当たる。

陳注も引く『漢書』地理志下に「隴西郡、秦置」(隴西郡、秦置く)とあり、同じく陳注に引くその顔師古注に「隴坻謂隴阪。即今之隴山也。此郡在隴之西。故曰隴西」(隴坻は隴阪を謂う。即ち今の隴山なり。此の郡 隴の西に在り。故に隴西と曰う)と言う。

「隴西」の古い用例として、漢代の作とされる古楽府「隴西行」(『玉臺新詠』巻一。一作「歩出夏門行」)があるが、内容は婦人が客人をもてなすさまを詠じたものであり、直接この詩の「隴西」とは関係がないようである。しかし、擬古楽府である梁の簡文帝(三首)や庾肩吾の作は、主として征戦の苦勞を詠じており、その場合、隴西はこの詩と同じく異民族との戦地の意味となる。唐代に作られた「隴西行」(王維・耿漳・長孫佐輔・陳陶の作がある)も簡文帝以来のテーマを引き継いでいる。

「隴西」が詩のなかで使われた例としては、魏の左延年「從軍行」(『樂府詩集』巻三二の郭茂倩『解題』に引く劉宋・沈建『樂府広題』)に「三子到燉煌、二子詣隴西」(三子 燉煌に到り、二子 隴西に詣る)とあるのが古く、隴西が戦地として詠われている。その後は時代が下つて、先に挙げた「隴西行」の詩題以外では、梁の劉孝威「驄馬駆」(『文苑英華』巻二〇九)に「風傷易水涓、日入隴西樹」(風は易水の涓を傷つけ、日は隴西の樹に入る)とある。あし毛の馬の活躍を詠じ、下句は戦場として隴西が詠われているのであろう。

唐も初唐から用例が見える。劉希夷「江南曲八首」其三(『全唐詩』巻八二)に「君為隴西客、妾遇江南春」(君は隴西の客と為り、妾は江南の春に遇う)とあり、陳子昂「還至張掖古城聞東軍告捷贈韋五虛己」(同巻八四)に「寧知玉門道、翻作隴西行」(寧ぞ知らん 玉門の道の、翻つて隴西の行を作さんことを)とある。前者は女性の元から隴西の地に旅立つ男性を詠っているが、旅の目的はわからない。後者は戦地として隴西が詠われている。杜甫には「兵車行」(『詳注』巻二)に「且如今年冬、未休閔西卒」(且つ今年の冬の如き、未だ閔西の卒を休せず)とある下句を「未休隴西卒」(未だ隴西の卒を休せず)にテキストがあることが『詳注』に指摘されている。その場合、政府が冬なつても隴西の地に出兵している兵士を休息させないことを言う。杜甫にはこの一例のみである。張籍にはこの他に一例、445「董公詩」(巻七)に「誰主東諸侯、元臣隴西公」(誰か東の諸侯に主たる、元臣隴西公)とあるのは、宣武軍節度使董晋の爵位が隴西郡開国公であったことを言う。

以上この二句では、隴西の各地で吐蕃との戦闘が行われ、ある日ついに漢軍(すなわち唐軍)が玉碎したことを詠う。1・2句とは時間的には倒置の

関係にあり、1・2句のような状況が、3・4句で詠われる全軍玉砕が原因であることを言う。

ここまでがひとまとまりで、次句から詠われる涼州の漢人の悲劇を言うための前置きであり、悲劇に到る理由が詠われている。

5・6 驅我辺人胡中去、恣放牛羊食禾黍

「辺人」辺境に住む人々。「我」というのは、彼らが「自分たちと同じ漢の国家の住人」であることを強調するためにこのように言うのである。張籍30「將軍行」(前出)に「辺人親戚皆戰没、今逐官軍收旧骨」(辺人の親戚皆て戰没し、今官軍を逐いて旧骨を収む)とあるのも、この詩と同じく隴山付近に住む人々を指す。用例はその【語釈】を参照。

〔胡中〕胡の領地。ここでは吐蕃を指す。

『史記』盧縮伝に「(盧)縮為蛮夷所侵奪、常思復歸。居歲餘、死胡中」(盧)縮 蛮夷の侵奪する所と為り、常に復歸せんことを思う。居ること歳餘、胡中に死す)とあり、高祖劉邦の將軍であつた盧縮が匈奴の地で死んだことを記す。

唐以前の詩に用例がなく、後漢の蔡琰作として伝わる「胡笳十八拍」第一八拍(『古詩紀』卷一四)に胡笳の由来を詠って「胡笳本自出胡中、縁琴翻出音律同」(胡笳本自胡中に出ず、琴に縁りて翻つて音律の同じきを出だす)とあるのみである。唐詩でも、初唐から見えるが、用例はそれほど多くはない。李嶠「琵琶」(『全唐詩』卷五九)に「本是胡中樂、希君馬上彈」(本是れ胡中の樂、君が馬上に弾かんことを希う)とあるのは、琵琶が西方の異国からもたらされたことを言う。また、李白「于闐採花」(王琦注本卷四)に「明妃一朝西入胡、胡中美女多羞死」(明妃一朝 西のかた胡に入れば、胡中の美女 多く羞死す)とある。王昭君が匈奴に嫁いで于闐国に入れば、匈奴の多くの美女たちが自分の顔を恥じて死んだと言う。

杜甫には用例がない。張籍もこの一例のみ。

なお、テキストの校語に、四庫本が「胡中」を「蕭關」に作るとするが、四庫本は「胡中」に作る。「蕭關」は長安の西北三百キロにあつた関所の名。隴山を含めた六盤山にあり、辺境防衛の重要な拠点であつた。詳しくは、前掲『漢詩の事典』の「蕭關」の条を参照。

「恣放牛羊食禾黍」涼州の住民であつた漢人が吐蕃の地に連行され、吐蕃人の飼つていた家畜が、住民によつて収獲されずにそのまま残つていた稲やキ

ビを食べている様子を言う。

「恣放」は野放しにする。『毛詩』大雅「桑柔」に「捋采其劉、瘼此下民」(捋り采りて其れ劉たり、此の下民を瘼ましむ)とあり、その鄭箋に「喻民当被王之恩惠、群臣恣放、損王之德」(民 当に王之恩惠を被るべきに、群臣恣放して、王之德を損す)とある。王之臣下の勝手な振る舞いによつて人民が苦しみ、結果王之德を損なうことになっている、そのことを詠じた詩句であると説明する。古く鄭箋に見えた言葉であるが、これ以降詩文に用例がなく、唐詩の用例もこのみ。

四庫本、『全唐詩』卷一八・三八二、『樂府詩集』、蜀刻本はみな「散放」に作る(『全唐詩』卷三八二に「一作恣」)。その場合も意味はほとんど同じであろう。『三國志』魏書「衛覬伝」に「夫塩、国之大宝也。自乱来散放」(夫れ塩や、国之大宝なり。乱より来散放す)とあり、国家の宝である塩の管理が、兵乱以降、放置されたままになっている状態を言う。唐以前の用例は、管見ではこれのみであり、唐詩の用例も張籍のこの一例のみ。

「牛羊」は、牛と羊。家畜を言う。前掲張籍30「將軍行」(前出)に「胡兒殺尽陰磧暮、擾擾唯有牛羊声」(胡兒 殺され尽くして 陰磧暮れ、擾擾として 唯だ 牛羊の声有るのみ)とあり、胡の飼つている牛と羊が詠われている。用例についてはその【語釈】を参照。

「禾黍」は稲(またはアワ)とキビ。後には広く穀物を指す言葉となる。これも以前に見た張籍15「牧童詞」(卷一)に「遠牧牛、遶村四面禾黍稠」(遠く牛を牧す、村を遶つて四面 禾黍稠し)とあり、收穫期を迎えたのどかな農村の風景として詠われている。用例はその【語釈】を参照。陳注は『漢書』溝洫志(陳注は「礼楽志」に誤る)に「且溉且糞、長我禾黍」(且つ溉ぎ且つ糞いて、我が禾黍を長ぜしむ)とある。新たに掘つた渠が農作業に役立つことを称えた歌のなかに見える。

以上この二句は、涼州の漢人は捕虜として吐蕃の地に連行された後、彼らが田畑で大切に育て、收穫前で穂が成熟した状態の稲やキビが、吐蕃人の家畜である牛や羊の飼料になる不条理を詠う。

7・8 去年中国養子孫、今着氍毹学胡語

〔中国〕漢民族が自国を指して言う呼び名。中華の民が黄河流域一帯に建国し、周囲を四方と言うのに対して天下の中心にいると考えた。よつて、ここがそうであるように、周辺の地(地方や夷狄)に對置される所という意識のもとに使われる。

『礼記』王制に「中国、夷、蛮、戎、狄、皆有安居、和味、宜服、利用、備器」(中国、夷、蛮、戎、狄は、皆安居、和味、宜服、利用、備器有り)とある。中国と夷狄の国々は、みなそれぞれに適した生活をしていることを記す。李冬生注は、同じ『礼記』の中庸に「是以声名洋溢乎中国、施及蛮貊」(是を以て声名中国に洋溢し、施いて蛮貊に及ぶ)とあるを引く。聖人の名声が中国だけでなく蛮夷の国々にまで及ぶと記す。また、『毛詩』小雅「六月」の序に「小雅尽廢、則四夷交侵、中国微矣」(小雅尽く廢すれば、則ち四夷交ごも侵し、中国微なり)とあるのも、中国が周囲の夷狄と対比して用いられている例である。陳注は、『孟子』公孫丑下に「我欲中国而授孟子室、養弟子以万鐘、使諸大夫国人皆有所矜式」(我は中国にして孟子に室を授け、弟子を養うに万鐘を以てし、諸大夫・国人をして皆矜び式する所有らしめんと欲す)とあるを引く。孟子を自国に引き留めたい齊王が、孟子に「都の真ん中」に屋敷を授けようと提案する言葉の中に見える。ただし、ここでは「胡」と対比して上記のような意味で用いられており、『孟子』の用例はここには適さないように思う。

唐以前の詩に用例はあまり多くない。王粲「七哀詩二首」其一(『文選』卷二三)に「復棄中国去、遠身適荆蛮」(復た中国を棄てて去り、身を遠ざけて荆蛮に適く)とあるのは、中原の地を棄てて荊州に行くことを詠う。ここでも「荆蛮」と対比されている。

唐詩では初唐から用例が見え、一例として陳子昂「度峡口山贈喬補闕知之王二無競」(『全唐詩』卷八三)に「峡口大漠南、横絶界中国」(峡口 大漠の南、横絶して中国を界る)とあるのは、峡谷(今の甘肅省山丹県の東南)が大砂漠の南に連なっており、中国との境界になっていることを言う。

杜甫には用例が無い。張籍にもこの一例のみ。

張籍のこの詩と同じく、吐蕃による占領前後の涼州の変化を詠じ、辺境防衛の将兵の怠慢を批判した元稹「和李校書新題樂府十二首・西涼伎」(『元稹集』卷二四)に「一朝燕賊乱中国、河湟没尽空遺丘」(一朝燕賊 中国を乱し、河湟没し尽くして 遺丘空し)とある。涼州が吐蕃によって陥落することになったその大本は、安祿山(燕賊)の乱による中国の混乱にあると詠う。

「子孫」子や孫。

古く経書にすでに見える。『尚書』洪範に「身其康彊、子孫其逢吉」(身は其れ康彊に、子孫其れ吉に逢わん)とあるのは子孫の意味。また『毛詩』周頌「烈文」に「惠我無疆、子孫保之」(我を恵すること疆り無し、子孫之を保んず)とあり、前王の恩恵が子々孫々と受け継がれていることを言う。

唐以前の詩文では、嵇康「与山巨源絶交書」(『文選』卷四三)に「今但願

守陋巷、教養子孫、時与親旧叙闊、陳說平生」(今 但だ願わくは陋巷を守り、子孫を教養し、時どき親旧と闊を叙し、平生を陳說せんことを)とあり、自己の願いを述べるなかに子孫を教養すること記される。この他唐より前の詩文に頻出し、唐詩の用例も初唐より多く見える。

杜甫にも五例、うち「垂老別」(『詳注』卷七)に「子孫陣亡尽、焉用身独完」(子孫 陣亡し尽く、焉んぞ身の独り完きを用いんや)とあり、子や孫がみな戦死した不幸を詠じている。「養子孫」の三字の並びでは、同時代の孟郊「峽哀十首」其五(『孟郊詩集校注』卷一〇)に「毒波為計校、飲血養子孫」(毒波 計校を為し、血を飲みて子孫を養う)とあり、峡谷に棲む龍の子育てを詠ずる中に見える。張籍にはこの他に三例、うち「古風二十七首」なかの447「沈千運旧居」(卷七)に「乱離子孫尽、地属隣里翁」(乱離子孫尽き、地は隣里の翁に属す)とあるのは、戦乱で廢墟となった沈千運の旧居を詠ずる中に見える。

「氈裘」毛織物と皮衣。「氈裘」は異民族の衣服であり、ここでは吐蕃の衣服を言う。

『戦国策』趙策二に「大王誠能聽臣、燕必致氈裘狗馬之地、齊必致海隅魚塩之地、楚必致橘柚雲夢之地」(大王誠に能く臣に聴かば、燕は必ず氈裘狗馬の地を致し、齊は必ず海隅魚塩の地を致し、楚は必ず橘柚雲夢の地を致さん)とあり、趙王に自分の策を聞き入れたら、各国が自国の重要な土地を差し出すことになるという蘇秦の言葉のなかに見える。

唐以前の詩では一例、後漢の蔡琰作として伝わる「胡笳十八拍」第三拍(前掲)に「氈裘為裳兮骨肉震驚、羯羶為味兮枉遏我情」(氈裘 裳を為して骨肉震驚し、羯羶 味を為して 我が情を枉遏す)とあり、拉致され南匈奴に嫁いだ蔡琰の、異境の地での苦渋の生活を詠ずるなかに見えるのみである。

唐詩の用例も少なく、杜甫を含めて初盛唐の詩に用例がない。中唐前期になって詩に使われ始め、大曆十才子の一人、耿漳「涼州詞」(『全唐詩』卷二六九)に「氈裘牧馬胡雛小、日暮蕃歌三兩声」(氈裘 馬を牧して 胡雛小さく、日暮蕃歌す 三兩声)とあるのは、吐蕃が暮らす涼州の様子を詠じており、「氈裘」は毛皮の衣を着た吐蕃人を指している。張籍と同時代では、白居易、劉禹錫、元稹、王建に一例ずつ見える。そのうち王建「涼州行」(『王建詩集』卷一)に「驅羊亦著錦為衣、為惜氈裘防闘時」(羊を驅りて亦た著るに 錦もて衣を為し、氈裘を惜しむが為に 闘う時に防ぐ)とあるのは、吐蕃が朝廷が送った錦を農作業に使い、自分たちの毛織りの衣や皮衣を大切に戦争用に大事に取っておくことを詠う。

この詩と同じく、涼州の住人であり、涼州が吐蕃によって陥落したことで

数奇な運命をたどることになる漢人を詠じた白居易「新樂府・縛戎人」(二五)に「一落蕃中四十載、遺著皮裘繫毛帶」(一たび蕃中に落ちてより四十載、皮裘を著け 毛帯を繫けしむ)とあり、吐蕃の捕虜となつてからは皮製の上衣と動物の毛でできた帯を着けさせられたと詠われている。

〔胡語〕えびすの言葉。ここでは吐蕃人の話す言葉を指す。

熟語としては唐以前の詩文に用例が見当たらない(「胡語」のみ)。唐詩の用例もほとんどないが、張籍以前では李白と杜甫に一例ずつ、同時代では白居易に二例ある。李白「奔亡道中五首」其四(王琦注本卷二二)に「俗變羌胡語、人多沙塞顔」(俗は羌胡の語に變じ、人は沙塞の顔多し)とあるのは、蛮族の侵略により漢族の言葉が夷狄の言葉に変化することを詠う。また、杜甫「詠懷古跡五首」其三(『詳注』卷一七)に「千載琵琶作胡語、分明怨恨曲中論」(千載の琵琶 胡語を作り、分明たる怨恨 曲中に論ず)とあるのは、王昭君の故郷を訪ねた時のもので、匈奴に嫁いだ王昭君の詩を奏する琵琶が、まるで胡の言葉のようであると詠っている。白居易の例のうち、「江南遇天宝樂叟」(0582)に「飲娛未足燕寇至、弓勁馬肥胡語喧」(飲娛未だ足らざるに燕寇至り、弓勁く馬肥えて 胡語喧し)とある。安祿山の反乱軍が都に押し寄せた様子を詠っている。

8句について、四庫全書のみが「今來異域通言語」(今 異域に來たりて言語を通ず)に作る。

「異域」は文字通り異域のことで、漢の国家から見た別世界。ここでは吐蕃の地を指す。『漢書』李広蘇建傳(蘇武)に「異域之人、壹別長絶」(異域の人、壹別すれば長えに絶えたり)とある。匈奴の地での李陵と蘇武の別れの場面、李陵のセリフの中に見える。同じく李陵の蘇武に答えた書簡「答蘇武書」(『文選』卷四一)にも「生為別世之人、死為異域之鬼、長与足下生死辞矣」(生きては別世の人と為り、死しては異域の鬼と為り、長えに足下と生死辞せん)とあり、蘇武との別れを表現している。唐より前の詩の用例はわずかしかないが、唐詩では初唐から多くの用例がある。張説「送郭大夫元振再使吐蕃」(『全唐詩』卷八六)に「知君万里侯、立功在異域」(知る 君 万里の侯、功を立つること 異域に在り)とあり、この詩と同じく吐蕃を指して異域と詠っている。杜甫にも四例、うち「奉送郭中丞兼太僕卿充隴右節度使三十韻」(『詳注』卷五)に「古來於異域、鎮靜示專征」(古來 異域に於ける、鎮靜にして 專征を示す)とあるのは、節度使として夷狄(ここでは隴右節度使とあるので吐蕃)と対する時の態度を詠っている。張籍にはこの他に用例はない。

「通言語」は、言葉が通じること。前掲『礼記』王制の先に引いた箇所

続いて、「五方之民、言語不通、嗜欲不同」(五方の民、言語通ぜず、嗜欲同じからず)とある。中国と周囲の夷狄の国々とは、言葉が通じず、好みも異なることを言う。本来異なる言葉を話していたにも関わらず、生活のために短い時間で胡の言葉を覚えたのである。それによって、捕虜として連行された後、胡の住人となつてしまったことを表現している。

以上この二句では、涼州で暮らしていた漢人の生活が一変したことを、子や孫の養育、衣服、言語を取り上げて詠っている。「子孫を養う」ということは、彼らにとつて涼州が安定した生活を送ることができると故郷であったことを言うと同時に、涼州の地で漢民族としての伝統的な生活習慣を維持していたことも意味している。すなわち、中国の重要な徳目の一つ「孝」の伝統がこの涼州の地でも確かに行われていたことを言う。また、服装は民族の象徴であると同時に、身につける者の身分をも表すものであり、同様に言葉は、単に会話のためのものではなく、感情を表現し、自己の考えを述べるものである。ここに詠われているのは、いずれも人のアイデンティティと深く関わっているものであり、それらが一変したと詠うことで、張籍は彼ら涼州の人々が置かれている絶望的な現状を表現している。

ここまでがひとまとまりで、吐蕃の捕虜となった涼州の人々の悲劇を具体的に詠じている。

9・10 誰能還使李輕車、重取涼州屬漢家

〔誰能還使李輕車〕誰がまた李輕車に頼んで(命令して)の意。

「李輕車」は漢の輕車將軍李蔡。李蔡は李広の従弟で、武帝の元朔年間に輕車將軍となり、大將軍衛青に従つて匈奴の右賢王を撃ち、功によつて樂安侯に封ぜられた。

『漢書』李広伝に「初、(李)広与従弟李蔡俱為郎、事文帝。景帝時、蔡積功至二千石。武帝元朔中、為輕車將軍、從大將軍擊右賢王、有功中率、封為樂安侯」(初め、(李)広 従弟李蔡と俱に郎と為り、文帝に事う。景帝の時、蔡は功を積みて二千石に至る。武帝の元朔中、輕車將軍と為り、大將軍に従いて右賢王を撃ち、功有りて率に中り、封ぜられて樂安侯と為る)とある。

唐以前の詩では、鮑照「東武吟」(『文選』卷二八)に「後逐李輕車、追虜窮塞垣」(後には李輕車を逐い、虜を追いて塞垣を窮む)とあり、庾信「反命河朔始入武州」(『庾子山集注』卷四)に「輕車初逐李、定遠未隨班」(輕車 初めより李を逐い、定遠 未だ班に隨わず)とある。鮑照の詩は一人の老翁が若い頃に對匈奴の從軍經驗を振り返つて述べるなかに見え、李善注に

は前掲『漢書』李広伝を引く。庾信の詩は、庾信自身が軽車將軍李蔡に重ねられる人物に従ったことを言う。下句の「班」は後漢の軍人班超のこと。

唐詩では李蔡自身や、李蔡に重ねられる節度使等の人物を指す用例として盛唐の頃から用例が見え、王維「送宇文三赴河西充行軍司馬」(趙注本卷八)に「還聞田司馬、更逐李輕車」(還た田司馬を聞き、更に李輕車を逐う)とあり、行軍司馬として河西節度使に従って辺境に越く宇文三の行動を「李輕車を逐う」と表現している。また、岑參「北庭貽宗學士道別」(『岑參集校注』卷二)に「曾逐李輕車、西征出太蒙」(曾て李輕車を逐い、西征して太蒙を出ず)とあり、宗學士が節度使に従って西征したことをこのように表現する。唐代では節度使が管轄する地区の軍事権も掌握していたのでこのように言うのであろう。

杜甫には用例がなく、張籍の用例もこの一例のみ。

「輕車」はもととは戦車のなかで最も軽快に進む車の意であり、ここではすぐにも侵略された土地を奪い返して欲しいという思いも込められているのかもしれない。

なお、9句「還」を、四庫本、『全唐詩』卷一八・卷三八二、蜀刻本、『樂府詩集』は「更」に作る。意味は「還」に同じ。また、「李輕車」を蜀刻本のみが「索輕車」(輕車を索む)に作る。この場合、「戦車を探して乗ってきて」という意味になり、必ずしも李蔡を指すわけでは無くなるであろう。

「重取」再び涼州を胡から取り返す。

「取涼州」という表現については、この詩とも関連のある張籍³⁴⁴「涼州詞」其二(卷六)に「辺將皆承主恩沢、無人解道取涼州」(辺將 皆主の恩沢を承け、人の解く涼州を取ると道うもの無し)とある。辺境防衛の將兵たちが皇帝の恩沢を受けていながら、誰一人涼州を吐蕃から取り返そうと言うものがないことを批判的に詠じている。

なお、「重」を、四庫本、『全唐詩』卷一八・三八二、『樂府詩集』は「収」に作る。この「収」について、前掲白居易「新樂府・西涼伎」0149に「遺民腸断在涼州、將卒相看無意収」(遺民腸断ちて涼州に在り、將卒相看て収むるに意無し)とあるように、「涼州を取り返す」意味で使われており、張籍「涼州詞」と同じく、吐蕃に奪われた涼州を回復しようという気持ちのない辺境防衛の將軍や兵卒を批判して詠じている。辺境防衛に従事する將兵の職務怠慢に対する批判は、中唐期の樂府詩に特徴的であり、これについては【補】で触れることにしたい。

〔漢家〕漢室、漢の国家。ここでは漢の国家に準えられた唐の国家を指す。

『史記』を始めとする史書に頻出する。『史記』孝武本紀に「陛下建漢家封禪、天其報德星云」(陛下 漢家封禪を建て、天其れ徳星を報ずと云う)とあり、孝武帝が漢室安定のために封禪の儀式を行ったことで、天がその報いとして徳星を出現させたことを記す。唐以前の詩では、それほど用例は多くなく、三国魏の孔融「六言詩三首」其一(『古詩紀』卷一三)に「漢家中葉道微、董卓作乱乘衰」(漢家中葉 道微かに、董卓乱を作すは衰うるに乗ず)とあり、石崇「王明君詞」(『文選』卷二七)に「我本漢家子、將適单于庭」(我は本漢家の子なるに、將に单于の庭に適がんとす)とある。前者は董卓が漢室の勢いが衰えたのに乗じて乱を起こしたことを言い、後者は王昭君が漢の人でありながら匈奴に嫁いだことを、王昭君の立場で詠じている。

唐代も初唐から多くの用例がある。戦争や異民族との対立を意識して使われた例としては、喬知之「從軍行」(『全唐詩』卷八一)に「漢家已得地、君去將何事」(漢家 已に地を得たり、君去きて 將に何をか事とせん)とあり、王維「李陵詠」(趙岐注本卷五)に「漢家李將軍、三代將門子」(漢家の李將軍、三代 將門の子)とある。前者は詩題にあるように從軍をテーマにした樂府詩であり、後者は漢の將軍李陵が武人の家柄であることを詠うなかに見える。

杜甫には二例、うち「兵車行」(前掲)に「君不聞漢家山東二百州、千村万落生荆杞」(君聞かずや 漢家山東の二百州、千村万落 荆杞を生ずるを)とあるのは、夷狄の侵略によって山東地区の村落に人がいなくなり、いばらが生えるような事態となったことを詠じている。張籍にはこの他三例、34「妾薄命」(卷一)に「漢家天子平四夷、護羌都尉裹屍歸」(漢家の天子 四夷を平らぐれば、護羌都尉 屍を裹んで歸る)と見えた。その【語釈】も参照。

以上この二句は、吐蕃を涼州から追い出して失地を回復し、捕虜となっている漢人の救済を願うが、それを実現する將軍が不在である現実を詠い、詩を結んでいる。

【補】

一 張籍「隴頭行」の構成

この詩は換韻によって1・2句、3・4句、5・8句、9・10句の四つに分かれるが、内容的には1・4句、5・8句、9・10句の三つに分かれる。

1・4 胡(吐蕃)による涼州の陥落と占領

5・8 涼州の人々の悲劇
9・10 失地回復の願ひ

二 同題楽府との比較

張籍「隴頭行」を同題楽府と比較した場合、他の楽府詩との最も大きな違いは、この詩が吐蕃に占領された涼州の人々に焦点を当て、彼ら漢人の置かれた過酷な運命を詠じている点にある。

楽府「隴頭」「隴頭水」の古歌は、漢魏の頃に作られた作者不明の作であり、それに基づいて梁陳以降、そして唐代に入っても多くの擬古楽府が作られている。これらの多くは征夫（辺境防衛に出征する兵士）を登場させ、彼らの望郷の念や離別の悲哀を詠うことが主要なテーマとなっている。それは隴山が、故郷のある関中の地から、気候も風土も異なる辺境へと向かう際のちようど境界に当たっているからである。山頂から流れる川は、「隴頭歌辞」（前掲）に「隴頭流水、鳴声幽咽」（隴頭の流水、鳴声幽咽す）とあるようにまるむせび泣くように流れ、行人の耐え難い思いを代弁するかのようであるという。以上、増田清秀氏『楽府の歴史的研究』（創文社、一九七五年）第十章「南朝人作の横吹曲辞」の「各論・隴頭水」、及び前掲松浦友久編『漢詩の事典』参照。

また、それとは別に、異民族への兵士の敵愾心、君主への忠心、功名心が詠い込まれた詩もある。梁の劉孝威、陳の顧野王・江総、唐の盧照隣の作などがそれである。この二つの異なる感情は、出征兵士が辺境異民族の住む地との境界に身を置いたことで抱く、いわば表裏一体の感情であると言える。そうしたなか、張籍の詩では出征兵士（漢兵）は他の擬古楽府と同様に登場はするけれども、彼らの心情が詠われることはない。3・4句「漢兵処処格闘死、一朝尽没隴西地」（漢兵 処処 格闘して死し、一朝尽く没す 隴西の地）とあるように、兵士はこの詩が詠われている現在、胡（吐蕃）との戦闘ですでにみな戦死している。

張籍がこの詩で表現しているのは、胡との戦争の敗北により、涼州の人々が捕虜となつて生活していた場所から強制的に移住させられる悲劇、自分たちが厳しい自然環境で苦勞して育てた稲やキビが、胡の家畜の餌となる悲劇、そして去年まで漢（唐）の国家のもとで漢民族として先祖の祭祀を絶やさぬよう子や孫を育てていたのに、今は胡人の地に強制連行され、夷狄の服である動物の毛で作った衣をまとい、言葉も奪われ、胡人に同化しつつある人々の悲劇である。

住んでいた土地とそこで収穫される穀物（食料）、子や孫の養育、身につ

ける服、話す言葉は、その人の日常生活を代表するものであると同時に、民族の文化やアイデンティティとも直接関係している。これらをビックアップして詠うことで、張籍は敗戦による被害が、実際に戦闘に関わった兵士だけではなく、むしろ戦場となった土地に住む一般の人々の方にこそ大きく及ぶことをこの詩で表現しているのである。

そして張籍の筆は、同朋である涼州の人々を上記のような悲惨な状況に置きながら、救済することができない辺境防衛政策に向けられている。末二句は、一見軽車將軍李蔡のような人物の登場を待望していると読める。しかし、9句に使役の「使」が使われていることから、ここでは直接漢の李蔡のような將軍の出現を期待する以上に、そうした人物に命令を下せる人物の存在を願っているのである。李蔡の活躍が記される『漢書』李広伝（前掲）でも、李蔡は大將軍衛青に従って（恐らくは命ぜられて）匈奴の地に出征しそこで功績を上げたのであり、この詩でも使役の「使」を用いて、優れた將軍の出現を期待するとともに、そうした將軍を任命する立場の人物（節度使？）の存在を期待していることになるのではなからうか。しかし、末二句が反語の構文であることから明らかなように、胡人の占領下にある涼州を、隴山を越えて奪回しに行く気概のある將兵は誰もいない。最後は辺境防衛を掌る優れた將兵の不在、さらにはその人事担当者の不在に悲嘆して結ばれており、ここには張籍の諷諭の意図が見て取れる。

三 中唐における辺境防衛批判の楽府詩

張籍「隴頭行」は、伝統的な楽府題を借りながらも、それまでの同題楽府と異なり、辺境防衛を掌る軍人や、政府の辺境防衛政策を批判した諷諭詩として読むことが可能である。中唐期には、張籍「隴頭行」以外にも同様の楽府詩が複数作られており、この時期の特徴であると言える。

例えば、白居易「新樂府・西涼伎」（前出）は、西涼伎という獅子舞に興じて、涼州を含む河隴の地方を吐蕃から奪回しようとする意志のない將兵たちを批判した諷諭詩である。この詩のなかに「遺民腸断在涼州、將卒相看無意取」（遺民腸断ちて涼州に在り、將卒相看て取むるに意無し）とあり、四十年の間、涼州で捕虜となつて暮らす唐朝の遺民の苦勞に思いを馳せている。この他、白居易「新樂府・縛戎人」（前出）では、もともと涼州に住む漢人でありながら、代宗の大暦年間に吐蕃に拉致され、妻子を捨てて命がけで本国に戻ってきたにも関わらず、捕らわれて吐蕃の囚人として南方に流される一人の男を詠じている。詩序に「達窮民之情也」（窮民の情を達するなり）と述べるように、吐蕃占領下で暮らす漢人の救済を皇帝（憲宗）に訴え

る目的で詠われている。

白居易の二作品は、元稹「西涼伎」(前掲)「縛戎人」(『元稹集』卷二四)を先行作品として踏まえている。元稹の二首は、いずれも辺境防衛の將兵たちの無為無策を指摘した諷諭詩であるが、元稹の作もまた李紳の詩を先行作品として踏まえていることから考えて、当時の知識人にとって、吐蕃による隴右道諸州の占領は非常に大きい関心事であり、知識人でもある詩人たちにとつては、時事を取り上げて詠ずる際には格好のテーマになっていたと言えよう。なお、「縛戎人」における白居易と元稹の創作態度の違いについては、静永健氏「白居易『新樂府』の創作態度」(『白居易「諷諭詩」の研究』、勉誠出版、二〇〇〇年。初載は『久留米大学文学部紀要 国際文化学科学編』第一二・一三合併号、一九九八年)を参照。

張籍にも辺境防衛における將兵の怠慢を批判した344「涼州詞三首」其二(前掲)がある。

鳳林関裏水東流

鳳林関裏ほうりんかんり 水は東流し

白草黄榆六十秋

白草 黄榆おうゆ 六十秋

辺将皆承主恩沢

辺将 皆主の恩沢を承くるに

無人解道取涼州

人の解く涼州を取ると道うもの無し

鳳林関は河州鳳林県(今の甘肅省東郷族自治県)西北の黄河沿いにあつた関所であり、中唐の頃はこの地が吐蕃と唐朝との境界となつていた。「六十秋」は六十年。鳳林関が境界として定められた大暦二年(七六七)を起点とするのか、涼州が吐蕃によつて陥落した広徳二年(七六四)を起点とするのか分からないが、どちらにしても非常に長い期間涼州が吐蕃に占領されたままになつてゐることを言う。後半二句では、そうした状態にあるにも関わらず、辺境防衛を掌る將兵には、涼州を取り戻そうと言ふ気概ある者が一人もいないと詠っている。なお張籍には、涼州の吐蕃遠征に参加し音信不通になつた友人を氣遣う徒詩161「没蕃故人」(前掲)がある。涼州の惨状は国家の對外問題というだけでなく、張籍にとつて個人的な、非常に切実な問題でもあつたのである。

さて、樂府詩人として張籍と併称される王建にも、同様の社会問題を別の視点から詠じた樂府詩がある。

王建「涼州行」(『王建詩集』卷一)

涼州四辺沙皓皓

涼州の四辺 沙皓皓さこうこう

漢家無人開旧道

漢家 人の旧道を開く無し

辺頭州県尽胡兵	辺頭の州県 尽く胡兵にして
將軍別築防秋城	將軍 別に防秋城を築く
万里人家皆已没	万里の人家 皆已に没し
年年旌節發西京	年年 旌節 西京を發す
多来中国収婦女	多く中国に來たりて 婦女を収め
一半生男為漢語	一半は男を生みて漢語を為す
蕃人旧日不耕犁	蕃人 旧日 耕犁せざるに
相学如今種禾黍	相学びて 如今 禾黍を種う
驅羊亦著錦為衣	羊を驅りて亦た著るに 錦もて衣を為し
為惜氈裘防關時	氈裘を惜しむが為に 關う時に防ぐ
養蚕繰繭成匹帛	蚕を養い繭を繰りて 匹帛を成す
那堪繞帳作旌旗	那ぞ堪えん 繞帳 旌旗と作るを
城頭山鷄鳴角角	城頭の山鷄 鳴きて角角とし
洛陽家家学胡樂	洛陽の家家 胡樂を学ぶ

涼州への道は封鎖され、州全体はすでに胡人(吐蕃)の兵士に占領されてゐる。辺境防衛を掌る將軍は、胡人の侵入を防ぐ城塞を昔の国境より東側に作らざるをえない。占領地にかつて住んでいた漢人は全員殺され、都からは毎年辺境守備のための軍を率いる將兵が派遣されるが効果はない。頻發する胡人の侵入で漢人の女性たちは拉致され、胡人の支配する地では漢人との混血が進んでその半数が漢語を話すほど。胡への漢の文化の流入は、言葉だけでなく農耕、養蚕の技術、服飾にまで及ぶ。そしてあろうことか、漢の国内に胡の低俗な文化が流入し、なんと古都洛陽の家々では胡の音楽を学んでゐる。王建のこの詩では辺境防衛の將兵に対する批判は冒頭に間接的に詠われるだけで、詩人が本言に言いたいことは別にある。すなわち、すでに胡(吐蕃)と漢(唐朝)の文化が混ざり合い、もはや国家全体が占領された国土を奪回する意志を失つてゐるような国内の緩い雰囲気に対する批判である。王建は過去から現在に到るまでたびたび吐蕃に辛酸を舐めさせられてゐるにも関わらず、対吐蕃に対する警戒心と敵対心を失つた漢人たち(唐朝の人々)全員に対して向けられてゐるのである。

以上のように、中唐期の詩人にとつて、安史の乱以後、長期に渡つて国土の一部を占領し、さらには国内を侵略し続ける吐蕃への憤懣は非常に強く、その憤懣が吐蕃に対してだけでなく、辺境防衛を掌りながら国土を奪回する意志のない將兵たちや、効果的な打開策を講じられない政府に対して向けられ、先に紹介した多くの樂府のスタイルによる諷諭詩を生むことになつたと見える。そうしたなかで張籍は、漢魏以来の伝統的な古樂府である「隴頭

(行)の樂府題を借りながら、古樂府を始めとして先行する同題樂府のほとんどが出征兵士の望郷や胡人に対する敵愾心を詠じていたのとは異なり、兵士ではなく、故郷を異民族に占領されて捕虜となり、胡人として生きることを余儀なくされた一般の人々に注目し、彼らの生活上の苦しみに焦点を当てて具体的に詠ずることで国家に辺境の惨状を訴え、実効性のある対外政策の実施を促している。こうした点が、それまでの同題樂府との大きな違いであり、同じテーマで詠われた中唐期の個性的な樂府詩のなかで、張籍「隴頭行」が異彩を放っている点であろう。

(畑村)

415 廢宅行

【題解】

廢宅のうた。戦乱によって住む人がいなくなり、荒れ果てた廢宅の様子を詠じた作。『樂府詩集』には収めず、張修蓉『中唐樂府詩研究』は新題樂府に分類する。

この詩の冒頭に描かれる戦乱について、徐注・李樹政注は中唐以後の回紇や吐蕃の侵入を描写したものと解釈し、李冬生注は安史の乱を描写したものと解釈している。もちろん想像のみから作られた訳ではなく、制作のきっかけになったり参考にしたりした具体的事件はあったのかもしれないが、詩の表現からは具体的な事件を描写する意図は見受けられないようだ。樂府であるから、あまり具体的な事件にはとられず、普遍化して表現しているのであろう。

「廢宅」は廢宅、廢屋。ほとんど用例の見られない語で、先立つ例としては、『梁書』武帝紀の大同七年の条に引く詔に「凡是田桑・廢宅没入者、公創之外、悉以分給貧民」(凡そ是れ田桑・廢宅の没入する者、公創の外は、悉く分を以て貧民に給す)という句があるのが挙げられるくらいである。官有となつてゐる農地や廢宅を、貧民に分配することを命じたもの。

唐までの詩には見えず、同時期の元稹に一例。「哀病驄、呈致用」(『元稹集』卷一七)に「櫪上病驄啼裏裏、江辺廢宅路迢迢」(櫪上れきじょうの病驄 啼くこと裏裏じょうじょうたり、江辺の廢宅 路迢迢てうてうたり)という。江陵左遷時の作で、左遷先の粗末な家を「廢宅」と表現している。

晩唐以後は用例が増えるが、この点については、【補】の部分で詳しく述べることにしたい。

蜀本と『全唐詩』は詩題を「廢居行」に作る。

「廢居」の語には、商品を蓄えておいて物価の高騰を待つという意味があり、古く『史記』平準書に「而富商大賈、或躡財役貧、輒數百數、廢居居邑」(而るに富商大賈、或いは財を躡え貧を役し、輒數百數、廢居して邑に居く)といい、越王句踐世家に「於是自謂陶朱公、復約要、父子耕畜、廢居、候時、轉物」(是に於いて、自ら陶朱公と謂い、復た約要し、父子耕畜し、廢居し、時を候いて物を轉ず)というのなどは、いずれもこの意味。

この意味の用例は散見するが、廢宅の意味の例は未見。『全唐詩』にもただ一例のみ、やはり元稹の「夜雨」(『元稹集』卷一四)に「水怪潜幽草、江雲擁廢居」(水怪 幽草に潜み、江雲 廢居を擁す)という。「哀病驄、呈致用」と同じく江陵での作であり、左遷先の家をここでは「廢居」と表現したようである。

この詩については、丸山茂氏が「張籍樂府における篇法の妙」(日大人文科学研究所『研究紀要』二三号、一九八〇年)において、その構成を詳しく分析しておられる。細かい表現上の工夫の指摘や、本稿の解釈と異なる部分等もあるが、煩雑になるため一つ一つは記さないため、併せてご参照いただければ幸甚である。

【本文・書き下し文】

- | | |
|------------|--|
| 1 胡馬崩騰滿阡陌 | 胡馬崩騰 <small>まうどう</small> して 阡陌 <small>せんぼく</small> に滿ち |
| 2 都人避亂唯空宅 | 都人 亂を避けて 唯だ空宅のみ |
| 3 宅邊青桑垂宛宛 | 宅邊 <small>たくべ</small> の青桑 垂ること宛宛 <small>えんえん</small> たり |
| 4 野蠶食葉還成繭 | 野蠶 <small>やさ</small> 葉を食らい 還 <small>ま</small> た繭 <small>えん</small> を成す |
| 5 黃雀啣草入燕窠 | 黃雀 <small>わうじやく</small> 草を啣 <small>く</small> んで 燕窠 <small>えんか</small> に入り |
| 6 嘖嘖啾啾白日晚 | 嘖嘖啾啾 <small>さくさくしゅうしゅう</small> として 白日 <small>はくじつ</small> 晚 <small>く</small> |
| 7 去時禾黍埋地中 | 去る時 禾黍 地中に埋 <small>うず</small> め |
| 8 饑兵掘土翻重重 | 饑兵 土を掘りて 翻 <small>ひるがえ</small> すこと重重 <small>ちやうちやう</small> たり |
| 9 鷓鴣養子庭樹上 | 鷓鴣 <small>ていこ</small> 子を養 <small>やし</small> う 庭樹の上 |
| 10 曲牆空屋多旋風 | 曲牆 空屋 旋風多し |
| 11 亂定幾人還本土 | 亂定まりて 幾人か 本土 <small>かへ</small> に還 <small>かえ</small> らん |
| 12 唯有官家重作主 | 唯だ 官家の重 <small>おも</small> ねて主と作る有り |

【押韻】

陌・宅―入声二〇陌

宛・晚—上声二〇阮、繭—上声二七銑(古詩通押)
 中・風—上平声一東、重—上平声三鍾(古詩通押)
 土—上声一〇姥、主—上声九麌(同用)

【口語訳】

- 1 えびすの軍隊が 駆け回って 道にあふれ
- 2 都の人々は 乱を避けて 空き家ばかりになった
- 3 空き家のそばの青い桑が 葉をゆらゆらと垂れ
- 4 野生のカイコがその葉を食べて 繭を作っている
- 5 黄雀が草を口にくわえて 燕の巣に入り
- 6 チュンチュンチーチーと 日が暮れるまで鳴いている
- 7 立ち去るとき 地中に埋めておいた穀物は
- 8 腹を空かせた兵士たちが 何度も掘り起こしてしまった
- 9 鷓鴣の鳥が 庭木の上で ヒナを育てて
- 10 曲がった垣根や人けのない建物では つむじ風がよく起こる
- 11 反乱が平定されても 元の土地に帰れる者が何人いるだろう
- 12 ただ お上が新しい持ち主になるだけなのだ

【語釈】

1・2 胡馬崩騰満阡陌、都人避乱唯空宅
 「胡馬」えびすの馬、騎馬民族が乗る優れた馬。引伸して異民族の軍隊をいう。

常見の語で、詩においても、「古詩十九首」其一(『文選』卷二九)に「胡馬依北風、越鳥巢南枝」(胡馬 北風に依り、越鳥 南枝に巢くう)といい、陸機の「從軍行」(『文選』卷二八)に「胡馬如雲屯、越旗亦星羅」(胡馬雲の如く屯まり、越旗も亦た星のごとく羅なる)というなど、古くから多くの用例がある。前者は北方出身の馬が故郷を思うことを詠じた例、後者はこのこと同じく、馬によって異民族の軍隊を表現した例。

唐に入ってから多くの用例があるうち、崔融の「閔山月」(『全唐詩』卷六八)に「漢兵開郡国、胡馬窺亭障」(漢兵 郡国を開き、胡馬 亭障を窺う)といい、陳注も引く王昌齡の「出塞二首」其一(『全唐詩』卷一四三)に「但使竜城飛将在、不教胡馬度陰山」(但だ竜城の飛将をして在らしめば、胡馬をして陰山を度らしめじ)というなどの例は、辺塞詩系の楽府の中で異民族の軍隊を表現した例。後者は『唐詩選』にも選ばれて特に有名である。

杜甫には詩題に二例、詩中に九例あるうち、「洛陽」(『詳註』卷一七)に「洛陽昔陷没、胡馬犯潼関」(洛陽 昔 陷没し、胡馬 潼関を犯す)というのは、安祿山の軍隊を「胡馬」の語で表現している。
 張籍の用例はこれのみ。

「崩騰」とも『広韻』で下平一七登に属する暈韻のことばで、入り乱れる様子や、駆けめぐる様子などを形容するようである。

古い書物には例がなく、西晋の李頤の「雷賦」(『藝文類聚』卷二)に「潰淪隠鱗、崩騰磊落。来る無轍迹、去無阡陌」(潰淪 隠鱗、崩騰 磊落たり。来たるに轍迹無く、去るに阡陌無し)と見える辺りが古い例のようだ。ここと同じく「阡陌」の語も用いられているが、雷を形容したもの。

唐までの詩においては、李冬生注も引く謝靈運の「述祖德詩」二首其二(『文選』卷一九)に「崩騰永嘉末、逼迫太元始」(崩騰す 永嘉の末、逼迫す 太元の始め)というのが古い例のようであり、また、西晋末の永嘉の乱における混乱を表現していて、張籍のこの句を含め、後の詩に大きな影響を与えているようだ。

陳注は何遜の「渡連圻二首」其一(『何遜集校注(修訂本)』卷二)に「湫流自洄糾、激瀨視奔騰」(湫流 自ら洄糾し、激瀨 奔騰するを視る)という句の「奔騰」を「崩騰」として引くが、管見の及んだ限りでは「崩騰」に作るテキストは見当たらない。

唐に入ってからあまり例は多くないが、王維の「老将行」(趙注本卷六)に「漢兵奮迅如霹靂、虜騎崩騰畏蒺藜」(漢兵 奮迅すること 霹靂の如く、虜騎 崩騰して 蒺藜を畏る)といい、李建崑注も引く李白の「贈張相鎬二首」其二(王琦注本卷一一)に「想像晋末時、崩騰胡塵起」(想像す 晋末の時、崩騰して 胡塵の起こるを)というなどの用例が見える。ともに兵乱に関する表現であり、前者はことと同じく異民族の騎兵について用いた例で、漢軍の攻撃に狼狽する様子を形容したものの、後者はことと同じく「胡」字とともに用いた例で、謝靈運の例と同じく永嘉の乱における混乱ぶりを形容したものの。

杜甫に一例、「送顧八分文学適洪吉州」(『詳註』卷二二)に「崩騰戎馬際、往往殺長吏」(崩騰す 戎馬の際、往往にして 長吏を殺す)の句がある。反乱が起こって混乱した場合、地方の長官を殺すこともあると、旅立つ顧戒奢の前途を心配する表現の中に用いられている。

張籍にはこれのみ。

「満阡陌」道にあふれている。

「阡陌」はもと畑のあぜ道で、南北を阡、東西を陌という（一説に南北が陌、東西が阡とも）。ここでは広く道の意味に用いている。

『墨子』雜守の、要塞を築くべき場所を論ずる中に、「諸距阜・山林・溝瀆・丘陵・阡陌・郭門若闔術、可要塞」（諸もろの距阜・山林・溝瀆・丘陵・阡陌・郭門若しくは闔術には、要塞すべし）というなど、古くから常見の語。

唐までの詩においても、阮籍の「詠懷詩十七首」其九（『文選』卷二三）に「連畛距阡陌、子母相拘帶」（畛に連なりて 阡陌に距り、子母 相拘帶す）といい、陳注も引く陶淵明の「還旧居」（四部叢刊本卷三）に「阡陌不移旧、邑屋或時非」（阡陌 旧を移さざるに、邑屋 或いは時に非なり）というなど多くの用例がある。前者は邵平の植えた瓜の豊作ぶりを表現するのに用いられた例、後者は「廢宅」ならぬ「旧居」を描いた作に用いられた例である。【補】参照。

また、ことと同じ「満阡陌」の形でも一例、江淹の「雜体詩三十首」其二二「陶徵君潜・田居」に「種苗在東阜、苗生満阡陌」（苗を種えて 東阜に在り、苗生じて 阡陌に満つ）の句が見える。作物が育つてあぜ道にまで伸びていることをいう例。

唐詩においては、張九齡の「南陽道中作」（『全唐詩』卷四七）に「驅馬歷闐闐、荆榛翳阡陌」（馬を駆つて 闐闐を歴れば、荆榛 阡陌を翳う）といい、李白の「古風」五十九首其二四（王琦注本卷二）に「大車揚飛塵、亭午暗阡陌」（大車 飛塵を揚げ、亭午 阡陌暗し）というなどの例がある。前者は植物が都市の道を覆うことによって荒廃を表現した例、後者は天子に寵愛される佞臣の車がほこりを立てながら道を進むことを述べた例。

また、「満阡陌」という形でも先立つ例が二例ある。王維の「雪中憶李楫」（趙注本卷六）に「積雪満阡陌、故人不可期」（積雪 阡陌に満ち、故人 期すべからず）という例は、道を雪が覆つて友人が訪ねてこられないことを表現しており、李益の「華陰東泉、同張処士詣藏律師、兼簡県内同官、因寄齊中書」（『全唐詩』卷二八二）に「旧国不得帰、風塵満阡陌」（旧国 帰るを得ず、風塵 阡陌に満つ）という例は、故郷に帰れぬまま歩む旅路の苦勞を風塵に喩えている。

杜甫に四例あるうち、「八哀詩」八首其一「贈司空王公思礼」（『詳註』卷一六）に「翠華卷飛雪、熊虎亘阡陌」（翠華 飛雪を巻き、熊虎 阡陌に亘る）という例は、安祿山軍を迎え撃つ官軍に関するものではあるが、軍隊の様子を表現するのに用いた例で、官軍の熊や虎の模様の軍旗が道に連なることを述べている。

張籍にはこれのみ。

〔都人〕都の人々。

『毛詩』小雅「都人士」に「彼都人士、狐裘黃黃」（彼の都人士、狐裘黃黄たり）と都の立派な人物を表現しており、これを踏まえて班固の「西都賦」（『文選』卷一）に漢の長安の都の人々を「娛樂無疆、都人士女、殊異乎五方」（娛樂すること疆り無く、都人士女は、五方に殊異なれり）と表現するなど、古くから用例がある。

詩における用例はあまり多くないが、唐までの詩においても、陸機の「擬古詩十二首」其八「擬青陵上柏」（『文選』卷三〇）に「俠客控絶景、都人驂玉軒」（俠客 絶景を控き、都人 玉軒を驂す）と、立派な車に乗る都の人を詠じ、陸雲の「為顧彦先贈婦」二首其一（『文選』卷二五）に「京師多妖冶、粲粲都人子」（京師 妖冶多く、粲粲たる都人子あり）と、「都人子」の形できらびやかな都の人（女性ではあるが）を詠ずるなどの例が見える。

唐に入つてやや例が増え、陳子昂の「三月三日宴王明府山亭」（『全唐詩』卷八四）に、上巳の修禊でにぎわう都の様子を「奕奕車騎、粲粲都人」（奕奕たる車騎、粲粲たる都人）と詠じ、岑参の「晦日陪侍御泛北池」（『岑参集校注』卷五）に、都の人々にも注目される宴席を「日暮舟中散、都人來道看」（日暮 舟中散じ、都人 道を夾みて看る）と詠じている。

杜甫の詩の本文に三例、そのうち、先に「胡馬」の例として引いた「洛陽」（前出）の引用部分のすぐ後に、「天子初愁思、都人惨別顔」（天子 初めて愁思し、都人 別顔惨し）の句がある。都の人々が、安祿山軍の侵入により蜀に落ちのびる玄宗と悲しい気持ちで別れたことをいう。

張籍の例はこれのみ。

〔避乱唯空宅〕乱を避けて逃げたため、空き家ばかりが残っている

「避乱」は乱を避ける。何気ないことばで、例えば『論語』微子に記す楚狂接輿の歌の「來者猶可追」（來者は猶お追うべし）の句に付された孔安国の注に「自今已來、可追自止、避乱隱居」（今より已來は、追いて自ら止め、乱を避けて隠居すべし）といい、『三国志』魏書「国淵伝」に「淵 後与郗原・管寧等避乱遼東」（後 郗原・管寧等と乱を遼東に避く）というなど、散文には例があり、特に歴史書には用例が非常に多いが、詩の例は極めて少なく、張籍に先立つものは、杜甫に「避乱〇」の形の例が一例見えるのみ。「破船」（『詳註』卷一三）に「蒼皇避乱兵、緬邈懷旧丘」（蒼皇として 乱兵を避け、緬邈として 旧丘を懷う）の句がある。成都で徐知道の乱があったため、しばらく浣花草堂を離れていたことを表現したもの。

張籍の用例はこれのみ。

「空宅」も何でもないことばのようだが、古い書物には見えず、また、唐までの詩にも見当たらないようで、六朝以降の歴史書や小説などに例が散見するのみ。ただ、その中で『世説新語』任誕の次の逸話は有名である。「王子猷嘗暫寄人空宅住、便令種竹。或問、暫住何煩爾。王嘯詠良久、直指竹曰、何可一日無此君」(王子猷嘗て暫く人の空宅に寄りて住むに、便ち竹を種えしむ。或るひと問う、暫く住むに何ぞ爾を煩わさんと。王嘯詠すること良や久しくして、直ちに竹を指して曰く、何ぞ一日として此の君無かるべけんや、と)。

唐詩にも例は少なく、『全唐詩』の本文には、この他にわずかに三例。張籍に先立つ例はなく、同時代の元稹の「寄胡靈之」(『元稹集』卷一四)に「今宵正風雨、空宅楚江辺」(今宵 正に風雨、空宅 楚江の辺)の例が見え、風雨のため義兄である胡靈之が尋ねてくれない自分の家を「空宅」と表現している。残る二例はいずれも晩唐の例。

冒頭の二句。詩題にいう「廢宅」が出現するに至った経緯が述べられる。異民族の侵入により都の人々が家を捨てて逃れたために、空き家ができたのである。以下、八句を費やして、その中の一軒が描写されてゆく。

なお、丸山氏前掲論文は、冒頭に「胡馬」が登場することについて、「あたかも異民族の来襲が如何に唐突、迅速であったことを告げんばかり」であることを指摘する。

3・4 宅辺青桑垂宛宛、野蚕食葉還成繭

「宅辺」家のまわり。よくあることばのようでありながらやはり古い用例は少なく、陳注も引く陶淵明の「五柳先生伝」(四部叢刊本卷五)に「宅辺有五柳樹、因以為号焉」(宅辺に五柳樹有り、因りて以て号と為す)という例あたりが最も古い例のようである。やや後の沈約の『宋書』の例も陶淵明に關わる例で、「嘗九月九日無酒、出宅辺菊叢中坐久、值弘送酒至、即便就酌、醉而後歸」(嘗て九月九日に酒無く、宅辺に出でて菊叢の中に坐すること久しくして、弘の酒を送りて至るに値い、即便ち就きて酌み、酔いて後に歸る)という有名な逸話の例。

唐までの詩になく、『全唐詩』中に他にわずかに五例。張籍以前の例はなく、いずれも晩唐の例である。

〔青桑〕青青とした桑。

桑は蚕の餌として古くから栽培が盛んな植物で、『毛詩』鄘風「桑中」や古楽府「陌上桑」の例を挙げるまでもなく、詩の中にも非常によく詠じられる題材であるが、「青桑」の語は極めて珍しいことばで、張籍以前の用例が見当たらない。『全唐詩』には他にやはり五例、全て晩唐の例。

ただし、桑を「青」と表現した例はしばしば見られ、唐詩においても、劉希夷の「孤松篇」(『全唐詩』卷八二)に「蚕月桑葉青、鶯時柳花白」(蚕月桑葉青く、鶯時 柳花白し)といい、李頎の「古塞下曲」(『全唐詩』卷一三二)に「裊裊漢宮柳、青青胡地桑」(裊裊たり 漢宮の柳、青青たり 胡地の桑)というなどの例がある。

杜甫には桑について「青」の文字を用いた例はないようで、張籍にもこれのみのようである。

蜀本は「青葉」に作る。このことばも例は少なく、『山海經』大荒北經の洞野山の条に、「上有赤樹、青葉赤華、名曰若木」(上に赤樹有り、青葉にして赤華、名づけて若木と曰う)という例は、古い例ではあるが、想像上の植物といふべきものの表現であり、かなり特殊な例といえるだろう。

唐までの詩には例がなく、『全唐詩』本文中にわずかに二例。ただしこちらは一例が張籍に先立つ例で、一例は同時期の例。盛唐の王泠然の「汴堤柳」(『全唐詩』卷一一五)に「青葉交垂連幔色、白花飛度染衣香」(青葉 交わり垂れて 幔色に連なり、白花 飛び度りて 衣香に染まる)といい、王建の「飯僧」(『王建詩集』卷五)に「蒲鮓除青葉、芹蘆帶紫芽」(蒲鮓 青葉を除き、芹蘆 紫芽を帶ぶ)という。前者は柳の葉について用いた例、後者はなれずしをつつむがまの葉について用いた例。

〔垂宛宛〕ゆらゆらと垂れ下がっている。

「宛宛」、辞書にはのびちぢみするさま・やわらかなさまなどと説明される、さまざまなものを形容することばで、「婉婉」とも表記されるようだ。徐注・李樹政注は葉が垂れる形容とし、李冬生注・李建崑注は「回旋屈曲」する形容とする。

李建崑注は例として司馬相如「封禪文」(『文選』卷四八)に「宛宛黃龍、興德而升」(宛宛たる黃龍、徳に興りて升る)というのを引く。天子の徳に應じて瑞祥が現れたことを述べた部分。『史記』司馬相如伝の「索隱」に引く胡広の注には「屈伸也」(屈伸するなり)といい、『文選』の李善注では、「楚辭」離騷に「駕八竜之婉婉兮、載雲旗之委蛇」(八竜の婉婉たるを駕し、雲旗の委蛇たるを載す)とあるのを「宛宛」として引いている。王逸はこの部分の注に「婉婉、竜貌」(婉婉は、竜の貌)という。

唐までの詩においては、潘岳の「為賈謐作贈陸機」(『文選』卷二四)の第

四章に「婉婉長離、凌江而翔」（婉婉たる長離は、江を凌りて翔る）といい、謝靈運の「緩歌行」（『藝文類聚』卷四二）に「宛宛連螭、裔裔振竜旒」（宛宛として螭を連ね、裔裔として竜旒を振るう）といい、謝瞻の「張子房詩」（『文選』卷二二）に「婉婉幙中画、輝輝天業昌」（婉婉たり幙中の画、輝輝たり天業の昌え）というなどの例がある。潘岳の例、李善は「封禪文」と同じく「楚辞」離騷を引く。陸機を霊鳥である長離に喩えた部分で、竜ではなく鳥を形容したものであるが、細長くうねうねしたというような、共通のイメージがあるのであろう。謝靈運の例は、みずちの引く車を形容した例。やはり同じようなイメージであろうか。謝瞻の例、李善注には「婉婉、和順貌也」（婉婉は、和順の貌なり）といい、張良の計略を形容した例で、誰もが従わざるを得ないようなりつばなものであったことの表現とされ、やや異なる例といえよう。

唐までの詩の中には、ことと同じく植物に用いた例もある。庾信の「遊山詩」（『庾子山集注』卷三）に「婉婉藤倒垂、亭亭松直豎」（婉婉として藤倒に垂れ、亭亭として松直く豎つ）の句がある。藤の花を形容したもので、やはり細長くゆらゆらとしたイメージで用いられたものと思われる。

唐に入って用例も増え、表現されるものもさらに幅広くなる。陳注も引く張九齡の「登襄陽岷山」（『全唐詩』卷四九）には「宛宛たり樊城の岸、悠悠たり漢水の波」（宛宛樊城岸、悠悠漢水波）という。うねうねと長くのびる岸辺を表現したものである。岑参の「竜女祠」（『岑参集校注』卷四）に「祠堂青林下、宛宛如相語」（祠堂 青林の下、宛宛として 相語るが如し）という例は、色々な解釈があるようだが、侯忠義・陳鉄民説によれば、祠に描かれた竜女の姿が身をくねらせていることを形容した例。

唐詩にも植物に用いられた例があり、同時期の陳羽の「小苑春望宮池柳色」（『全唐詩』卷三四八）に「宛宛如糸柳、含黄一望新」（宛宛たり 糸の如き柳、黄を含んで 一望新たななり）という。しだれ柳の長く柔らかな枝を表現している。

以上の例からすると、細長くてしなやかさ・柔らかさを感じさせるものの形容に用いられるようで、この句でも、葉が茂った細くて柔らかな枝を表現したものと思われる。

張籍にもう一例。480「賦花」（巻八）に「宛宛清風起、茸茸麗日斜」（宛宛として 清風起り、茸茸として 麗日斜めなり）の句がある。花を題材にした詠物詩の例で、やはり細い茎の先で、吹き始めた風にゆれる花といったイメージで用いられているのであろう。

〔野蚕〕現在一般には家蚕の対として用いられることばで、野生の蚕のこと

（唐詩においては「家蚕」の例は見えないが、「蚕」と対比されて用いられていると思われる）。ヤママユガなどの類をいい、繭から糸を作ることはできるが、糸を吐く能力は家蚕より低いとされる。なお、李樹政注は、もともと飼われていた蚕が、飼う人がいなくなってしまうため野生化したとするが、蚕（カイコガ）は完全に家畜化された昆虫であり、人間の保護下でなければたちまち死に絶えてしまうという。張籍を含め、かつての詩人たちにも養蚕は身近だったであろうから、そのことは知られていたと思われる。

『後漢書』光武帝紀の建武二年の条に、「野蚕成繭、被於山阜、人取其利焉」（野蚕 繭を成して、山阜を被い、人 其の利を収む）といい、『三国志』呉書「孫権伝」の黄龍三年の条に「夏、有野蚕成繭、大如卵」（夏、野蚕の繭を成す有り、大きき卵の如し）と、いずれもことと同じく「成繭」とともに用いるなど、歴史書には少し例が見えるが、詩文の例はほとんどなく、唐までの詩の用例は未見。唐に入っても、「野蚕」でまとまる例は『全唐詩』の詩の本文中に五例、詩題に一例のみ。初盛唐の詩には例がなく、同時期の王建に至って一例が見える。

すなわち「田家行」（『王建詩集』卷二）に「野蚕作繭人不取、葉間撲撲秋蛾生」（野蚕繭を作るも人取らず、葉間 撲撲として 秋蛾生ず）という。農家の苦しみを逆説的に描いた詩で、野生の蚕が繭を作っても、自分たちの処理能力を超えているために、繭を取らないことを述べているようである。

他はいずれも晩唐の例、そのうち、許渾の「凌歊臺送韋秀才」（『全唐詩』卷五三三）に「野蚕成繭桑柘尽、溪鳥引雛蒲稗深」（野蚕 繭を成して 桑柘尽き、溪鳥 雛を引きて 蒲稗深し）という例は、ことと同じく「成繭」の語とともに用いる、陳注が挙げる于濬の例は、詩題も「野蚕」（『全唐詩』卷五九九）であり、その冒頭の二句に「野蚕食青桑、吐糸亦成繭」（野蚕 青桑を食らい、糸を吐きて 亦た繭を成す）と、「成繭」だけでなく「青桑」の語とともに用いる。先に挙げた『後漢書』・『三国志』ばかりでなく、張籍のこの表現も影響を与えているかもしれない。

〔食葉還成繭〕葉を食べ、繭を作る。

「食葉」の語の用例は、古く『爾雅』積虫に「食葉、蟻」（葉を食らうは、蟻なり）と見えるが、その後、ほとんど用例がなく、『太平御覽』卷八二五に引く郭璞『玄中記』に「化民、食葉三七年化、能以自裹如蚕績。九年生翼、十年而死。去琅邪四万里」（化民、葉を食らうこと三七年にして化し、能く以て自ら裹むこと蚕績の如し。九年にして翼を生じ、十年にして死す。琅邪を去ること四万里）といい、『藝文類聚』卷八八に引く『典術』（『隋書』経籍志によれば、宋の建平王撰の医学書）に、「桑木者、箕星之精神。木虫食

葉為文章、人食之、老翁為小童」（桑木なる者は、箕星の精神なり。木虫葉を食らえば文章を為し、人 之を食らえば、老翁 小童と為る）という例が見えるくらいである。例は少ないが、ともに養蚕や桑に関わる例であり、やはり蚕が桑の葉を食べるといふことは、古代中国の人々にとって身近なことだったのであろう。

唐までの詩に見えず、『全唐詩』にもこれのみのようだ。「成繭」も例は少なく、先に「野蚕」の例として引いた『後漢書』・『三国志』に見えたものが古い例のようである。

唐までの詩に一例のみ、陳の「西曲歌」の「作蚕糸」（『樂府詩集』卷四九）に、「績蚕初成繭、相思条女密」（績蚕 初めて繭を成し、相思いて 条女密なり）という。『漢魏六朝詩鑑賞辞典』（上海辞書出版社、一九九二年。「作蚕糸」は劉学鍇氏担当）によれば、「条女」は桑を摘み蚕を育てる娘のことで、その娘の恋と蚕の繭の完成が糸と思の掛詞によって詠じられたもの。

唐詩には、張籍以前の例はなく、同時代でも先に「野蚕」の例として引いた王建の「田家行」（前出）に「作繭」の形の例があるのみ（なお、王建にもう一例「作繭」の例がある）。他は全て晩唐以降の例で、そのうちの二つはやはり「野蚕」の例として引いた許渾と于漬の句に用いられていたものであるから、そちらに譲ることとしたい。

先に述べたように、中間部で前半四句・後半四句の八句にわたって一軒の廢宅が描写されるうちの、冒頭の四句。換韻はなされたが、先の第二句を承けて、いわゆる蟬聯体によつて「宅」の文字から歌い起こされている。

その家のそばの桑の木は、青青とした葉を垂らしており、それを、飼育された家蚕ではなく、野生のカイコが食べて、繭を作る。家の主人がいなくなり、家畜のカイコは全て死に絶え、桑の木を食むのは、野生のカイコばかりだということであろう。

中間八句の廢宅描写は、最初は穏やかな感じであったものが、次第に荒涼としたものになってゆくの、最初は人が住んでいた時のままきれいだつた廢宅が、だんだんと荒れ果ててゆく様子を表現しているのではないかと思われる。その最初の部分であるこの二句にはあまり荒涼とした雰囲気はない。桑の葉による春々夏の季節感に、「宛宛」という語のもつ柔らかな感じ、青とした葉とカイコや繭の白との色彩の対比などに加わって、のんびりとした風情さえ感じられる。ただし、そのカイコが野生のものである。家畜のカイコは死に絶えているという点、まるで真っ白い紙に落ちた一滴の黒いインクのように、荒廢の第一歩を暗示しているかのようである。

なお、丸山氏前掲論文は、桑の葉を食い荒らす蚕によって異民族の侵略を

象徴させている可能性を指摘するが、【補】の部分で後述するように、違った見方も可能であると思う。

5・6 黄雀啣草入燕窠、嘖嘖啾啾白日晚

〔黄雀啣草入燕窠〕黄雀が草をくわえて燕の巢に入る。

「黄雀」、徐注・李樹政注によれば黄鸝鳥のことであるという。黄鸝（鳥）であれば、例えば韓学宏氏の『唐詩鳥類図鑑』（貓頭鷹出版、二〇〇三年）にも記されるように、*Oriolus chinensis* すなわちコウライウグイスということになる。ただし、以下にも挙げる「黄雀」関係の古書の記述のうちで『藝文類聚』の鳥部に引かれるものは、黄鸝の別名である「倉庚」の条ではなく、全て「雀」の条に載せられており、少なくとも『藝文類聚』は別の鳥と認識しているようである。現代の鳥類の分類と当時の分類との違いの問題や、当時の詩人にどれだけ鳥類の分類に関する知識があつたかという問題などもあり、具体的にどのような鳥を指しているのかはよく分からないが、「黄雀」という名称からすれば、アオジ・マヒワなど、体が黄色くスズメに似た鳥がおり、これらは中国にも棲息しているとのことなので、そういった鳥を指しているのかもしれない。または、ニュウナイスズメなど色の薄いスズメのことを指しているか、あるいは単に「黄」の文字の指す色の範囲が日本語より広く、最も一般的なスズメやイエスズメの羽の色を「黄」と表現しているとも考えられよう。

いずれにせよ、詩の解釈の上では、鳥の具体的な種類よりも重要なのは、詩におけるイメージという点であろう。その点についても、徐注・李樹政注に興味深い指摘があり、人を恐れて人家に入らない鳥であると述べられている。李樹政注はさらに、廢宅に人が住まなくなつて久しく、燕の巢も黄雀のすみかとなるしかなかったのだと説明する。

管見の及ぶ限りでは、小さな鳥・つまらぬ鳥というイメージから人に襲われるような弱い鳥というようなイメージに発展し、さらに人を避けて棲むというイメージとなつたようである。そしてもう一点重要なのは、元和期までには、燕と巢を争う鳥というイメージも生まれていたと思われることである。以下、主な資料を挙げよう。

「黄雀」に言及される最も著名な資料の一つとして、『韓詩外伝』に記される、晋に出兵しようとする楚の莊王を諫めた孫叔敖が用いた寓話が挙げられよう。すなわち、楡の木にセミがいるが、そのセミは自分を狙っているカマキリが後ろにいるのに気付かず、そのカマキリは「不知黄雀在後、举其頸、欲啄而食之也」（黄雀の後ろに在りて、其の頸を挙げて、啄みて之を食らわ

んと欲するを知らざるなり)。そしてさらに「黄雀方欲食螳螂、不知童挟弹丸在下、迎而欲弹之」(黄雀方に螳螂を食らわんと欲するに、童の弾丸を挟みて下に在り、迎えて之を弾たんと欲するを知らず)、そしてその子供も、足下に穴があつて落ちそうになつてゐるのに気付いていない、という話である。この話は、『説苑』正諫では、荊を伐とうとした呉王に対して少孺子が話したものと記されている。

また、同じような寓話は『戦国策』楚策に記される、莊辛が楚の襄王に語つたことばの中にも見え、子供に狙われているのに気付かないトンボについて述べた後、「蜻蛉其小者也。黄雀因是以」(蜻蛉は其の小なる者なり。黄雀も是れに因る以)と、気ままに暮らしている黄雀が、弾を持つ貴公子たちに狙われていることに気付いてないことが述べられている。以下、狩人に狙われているのに気付かない黄鵠、楚王の命令によって自分を捕まえようと狙つている人物に気付かなかつた蔡の聖侯が挙げられている。

これら二つの話では、ともに人間から狙われているのに気付いていない鳥として描かれているが、『戦国策』が次に挙げる「黄鵠」がプロの狩人に狙われているのと異なり、遊び半分の貴族や子供に狙われている点や、セミやカマキリといった身近な昆虫とともに登場する点からすると、やはりスズメのような身近な鳥であることや、恐らくは特に狩猟技術が必要としない小さな鳥であることがうかがえよう。また、そのような身近な小鳥であつたとすれば、これらの話の黄雀は、自分に迫る危機に気付かない愚かさだけでなく、哀れさをも感じさせる存在であつたと想像される。

文学作品における例も、おおよそこのイメージに従つて用いられているようである。張衡の「西京賦」(『文選』巻二)に、甘泉宮にある通天台の高さを、「翔鶴仰而不逮、況青鳥与黄雀」(翔鶴仰げども逮はず、況んや青鳥と黄雀とをや)と表現する。薛綜の注に「青鳥・黄雀、皆小鳥」(青鳥・黄雀は、皆な小鳥なり)というように、取るに足りない小さな鳥として用いられている。また、曹植の「蟬賦」(『藝文類聚』巻九七)に「苦黄雀之作害、患螳螂之勁斧」(黄雀の害を作すに苦しみ、螳螂の勁き斧を患う)というのは、『韓詩外伝』の寓話に基づいていよう。

詩における多くの用例でも同様のイメージがあるようだ。漢の鏡歌の「艾如張」(『宋書』樂志四)に「山出黄雀亦有羅、雀以高飛奈雀何」(山は黄雀を出だして亦た羅有り、雀は以て高く飛び雀を奈何せん)という古い例があるが、網によって雀を捕まえようというこの表現は、敵軍を一網打尽にしようという思ひの比喩となつてゐる。また、劉楨の「贈従弟詩三首」其三(『文選』巻三三)に、鳳凰を詠じて「豈不常勤苦、羞与黄雀群」(豈に常に勤苦せざらんや、黄雀と群るるを羞ずればなり)というのは、李善注に「喻

俗士也」(俗士を喩うるなり)というように、取るに足りない鳥によって小人を比喩した例。

以上のようなイメージを踏まえて生まれたのが、相和歌辞・瑟調曲に分類される、曹植の「野田黄雀行」二首其二(『樂府詩集』巻三九)であろう。網にかかつた黄雀の姿を見て「少年」がかわいそうに思い、「抜劍捎羅網、黄雀得飛飛」(劍を抜き、羅網を捎えば、黄雀飛び飛ぶを得たり)。そして少年に感謝しつつ飛び去ることが詠じられている。有名な作品で、悲劇の天才・曹植の人生と重ね合わせて様々な寓意が読み取られているようであるが、黄雀の描かれ方については寓意を穿鑿する必要はないだろう。後の時代にはこの曹植の「野田黄雀行」第二首の影響が大きかつたようで、同題樂府は多くこれを踏まえている(なお、曹植のもう一首の「野田黄雀行」は宴飲の楽しみなどを詠じたもので、黄雀は登場しない)。

また、『樂府詩集』巻一六によれば、漢の鏡歌に「黄鵠(＝雀)」があつたとい(古辞は伝わらない)、それと関係があるかどうか分らないが、晋の鼓吹曲辞の「伯益」の条(巻一九)の題解に、「古黄鵠行也」(古の黄鵠行なり)という。この「伯益」の内容は古代の聖天子の政治を称えたもので、堯舜禹に仕えた伯益に高德があつたため「黄雀応清化、翔集何翩翩」(黄雀清化に応じ、翔り集うこと何ぞ翩翩たる)とい、また、それに続けて夏の桀王が山河の至る所に網を張りめぐらせたが、殷の湯王がそれを取り去つたので心配はないというようなことが述べられている。やはり身近で人間に狙われやすい鳥というイメージがうかがえる。

さらに、阮籍の「詠懷詩十七首」其一七(『文選』巻二三)に「一為黄雀哀、涕下誰能禁」(一たび黄雀の為に哀しみ、涕下りて誰か能く禁せん)という例は、李善注に指摘するように、『戦国策』の寓話を踏まえたものであるが、黄雀を哀れむ気持ちがあつたりと詠じられている。

以上は「黄雀」と表現される資料に限定してきたが、先に述べたように、これらの資料のうち『藝文類聚』に引かれるものが、全て「雀」の条に収められているように、詩の中で「雀」との明確な区別はあまりなされていないように思われる。その意味で重要なのは「空城雀」の樂府題であろう。

『樂府詩集』では雜曲歌辞に分類される「空城雀」(『樂府詩集』巻六八)は、鮑照の作を嚆矢とするようだが、これは、荒れ果てて住む人のない城で、高く飛ばば猛禽がおり、低く飛ばば網にかかることを恐れながら、粗末な餌に甘んじて暮らす雀を描いた作である。鮑照は、『越絶書』等に見える、秦の始皇帝の時、呉宮の見張り番が燕を照らそうとして火事を起こし、宮殿を焼いたという故事を踏まえ、「猶勝呉宮燕、無罪得焚窠」(猶お勝る呉宮の燕の、罪無くして窠を焚くを得るに)と詠じて、その雀の境遇はこの燕に

は勝っていると述べている。

この同じ故事を李白は「野田黄雀行」(王琦注本卷三)において、「遊莫逐炎洲翠、棲莫近吳宮燕。吳宮火起焚巢窟、炎洲逐翠遭網羅」(遊びては炎洲の翠を逐う莫かれ、棲みては 吳宮の燕に近づく莫かれ。吳宮 火起こりて 巢窟を焚き、炎洲 翠を逐えば 網羅に遭う)と踏まえており、黄雀と雀とが区別なく用いられていることがうかがえる。儲光羲の「野田黄雀行」(『全唐詩』卷一三六)に「嘖嘖野田雀、不知軀體微」(嘖嘖たり 野田の雀、軀體の微なるを知らず)という例も、題には「野田黄雀行」を用いながら詩中では単に「雀」と表現しており、黄雀と雀とを区別していないようである。この儲光羲の例では、分を知らない愚かな小鳥として描かれている。

劉長卿の「登吳古城歌」(『全唐詩』卷一五一)に荒れ果てた古城を詠じて、「白楊蕭蕭悲故柯、黄雀啾啾争晚禾」(白楊蕭蕭として 故柯を悲しみ、黄雀啾啾として 晚禾を争う)というのも、空城に棲む鳥というイメージで用いられている。なお、ここと同じく黄雀の鳴き声を「啾啾」の語で表現している。

このような流れを承けて、王建の「空城雀」(『王建詩集』卷一)には「空城雀、何不飛來人家住」(空城の雀、何ぞ飛びて人家に來たりて住まざる)という。徐注・李樹政注のいうように、中唐期には、人を避けて棲むというイメージに発展しているといえるだろう。

もう一つ、燕の巢を奪うというイメージについても考える必要がある。有名な「燕雀安知鴻鵠之志哉」(燕雀安ぞ鴻鵠の志を知らんや)ということば(『史記』陳涉世家)を引くまでもなく、身近な小鳥としてよく併称される燕と雀であるが、唐詩においては、燕と雀が争うという、六朝までの詩には見られなかった状況が描かれるようになる。

管見の及んだ限りでは、その最も早い例は、杜甫のようである。杜甫の「題鄭興亭子」(『詳註』卷六)に「巢辺野雀群欺燕、花底山蜂遠趁人」(巢辺の野雀 群れて燕を欺り、花底の山蜂 遠く人を趁う)の句がある。対になる山蜂の句とともに、特に故事を踏まえた表現ではなく、細かな観察から生まれたようであるが、燕と雀の争いが描かれているといえよう。ただし「雀」は「鶻」に作るテキストもある。

その後、大曆期の馮著の「燕銜泥」(『全唐詩』卷二一五)に「去年為爾逐黄雀、雨多屋漏泥土落」(去年 爾が為に 黄雀を逐うも、雨多く 屋漏れて 泥土落つ)と、燕のために雀を追いつつたというの、燕と雀が争うためかと思われる。また錢起の「賦得巢燕送客」(『全唐詩』卷二二九)に「能棲杏梁際、不与黄雀群」(能く 杏梁の際に棲み、黄雀と群れず)というの、争いとまではいえないにしても、少なくとも燕と雀を併称する伝

統に異を唱えた表現であるといえよう。

燕と雀の争いがさらにはつきりと詠じられているのは、白居易の「禽虫十二章」其一〇 3670 に「豆苗鹿嚼解烏毒、艾葉雀銜奪燕巢」(豆苗 鹿嚼んで 烏毒を解き、艾葉 雀銜んで 燕巢を奪う)という例であろう。本草を讀んだこともないはずなのに、動物が薬効をよく知ることを詠じた詩であるが、自注に「燕惡艾。雀欲奪其巢、先銜一艾致其巢、輒避去。因而有之」(燕は艾を惡む。雀 其の巢を奪わんと欲せば、先ず一艾を銜みて其の巢に致せば、輒ち避け去る。因りて之を有す)とあり、雀が艾(ヨモギ)によって燕の巢を奪う様子が描かれた部分である。この詩は白居易最晩年の会昌年間の作とされるもので、張籍没後の例ではあるが、この句とよく似た状況を描いていると思われる。

同じく後の例では、李頗の「黄雀行」(『全唐詩』卷五八七)に「朱宮晚樹侵鶯語、画閣香簾奪燕窠」(朱宮 晚樹 鶯語を侵し、画閣 香簾 燕窠を奪う)と、燕の巢を奪う黄雀の姿が描かれている。さらに、賈島の「義雀行、和朱評事」(『全唐詩』卷五七一)の詩で、親がいなくなった燕の子を育ててやる雀を描くのは、このようなイメージの裏返しであるとも考えられよう。杜甫の「黄雀」の用例は四例、そのうち陳注も引く「枯櫻」(『詳註』卷一〇)に「啾啾黄雀啄、側見寒蓬走」(啾啾として 黄雀啄み、側に見る寒蓬の走るを)という例は、ここと同じく「啾啾」とともに用いている。張籍の例はこれのみ。

「啣」は「銜」の異体字、含む、口にくわえる。「啣(銜)草」で、草を口にくわえる。

「銜草」(以下、管見の及んだ例は全て「銜」の字体を用いているので、こちらに統一する)の語は古書には見えず、曹植の「贈白馬王彪」(『文選』卷二四)に「孤獸走索群、銜草不遑食」(孤獸 走りて群れを索め、草を銜むも 食らうに遑あらず)といい、曹丕の「短歌行」(『宋書』樂志三)に「啣啣游鹿、銜草鳴驚」(啣啣たる游鹿、草を銜む鳴驚)というあたりが、最も早い用例のようだ。前者は種類は明らかではないが野生の獸、草を口に含むというのであるから草食獸であろう。後者は麋すなわち子鹿が草を含むすなわち食べることをいう例。

唐までの詩には他にもう一例のみ、張正見の「度関山」(『樂府詩集』卷二七)に「馬倦時銜草、人疲屢看城」(馬は倦みて 時に草を銜み、人は疲れて 屢しば城を看る)という例で、戦いに倦み疲れた馬が、時折り草を食べる様子を描写している。

唐詩においても用例は少なく、重複を除けば『全唐詩』に他に三例、さらに「銜草根」の例を除けば二例のみ。錢起の作で有名な天宝十載(七五一)

進士試験の際の魏瓘の「湘靈鼓瑟」に「良馬悲銜草、遊魚思繞萍」(良馬悲みて草を銜み、遊魚 思いて萍を繞る)といい、張籍の友・劉禹錫の「謝宣州崔相公賜馬」(箋証)外集卷八)に「銜草如懷恋、嘶風尚意頻」(草を銜んで 懐い恋うるが如く、風に嘶きて 尚お意は頻りなり)という。ともに馬が草をはむ描写に用いられており、以上をまとめると、詩の中には鳥が「草を銜む」例はないようである。

「黄雀」が何かを「銜」む例は、唐までの詩には見えないが、唐に入つて張籍に先立つ例が二例、崔顥の「孟門行」(『全唐詩』卷一三〇)に「黄雀銜黄花、翩翾傍簷隙」(黄雀 黄花を銜み、翩翾として 簷隙に傍う)の句があり、岑参の「春興戲題、贈李侯」(『岑参集校注』卷五)に「黄雀始欲銜花来、君家種桃花未開」(黄雀 始めて花を銜んで来たらんと欲するも、君が家 桃を種えて 花未だ開かず)の句がある。いずれも花をくわえるという例で、特に後者からは春らしい風景を表現するために用いられていることがうかがえる。

この詩の場合、草というが、恐らく具体的には先の白居易の「禽虫」に見えたように、艾草(ヨモギ)であり、巢を捨てた燕が戻つてこないようにするため、艾をくわえているのではないだろうか。

なお、管見の及ぶ限りでは、白居易以前の文献で燕が艾を嫌うことについて触れたものは未見である。後の唐詩においては、許渾の「秋晚懷茅山石涵村舍」(『全唐詩』卷五三六。卷五二六では杜牧の作とする)にも「簾前白艾驚春燕、籬上青桑待晚蚕」(簾前の白艾 春燕を驚かし、籬上の青桑 晩蚕を待つ)という句が見えている。

「燕窠」は燕の巢。燕は人間に依存して暮らす鳥であり、人間の家に巢を作ることによって、天敵から身を守るといふ。廃宅になってしまつて身を守れないため、巢を捨ててしまったということであろう。そこにつけ込んで黄雀が入り込み、さらに燕の嫌う艾を持ち込んで、戻つてこないようにしているということではないだろうか。

「窠」は巢、ねぐら。『説文解字』穴部に「在樹曰巢、在穴曰窠」(樹に在りては巢と曰い、穴に在りては窠と曰う)と両字の区別を説明しているが、燕の巢に関していえば、用例を見る限りでは、区別して用いられているという訳ではなく、古くは「燕巢」を用いるのが一般的であつたのが、後になつて「燕窠」の表現も現れたという状況のようである。

「巢」を動詞として使つた例が古く『春秋』襄公二十九年の『左伝』にあり、呉の季札が他国を歴訪して、孫文子の戚の地を過ぎた際、孫文子の家から聞こえる音楽を耳にして「夫子之在此也、猶燕之巢於幕上」(夫子の此に在るや、猶お燕の幕上に巢くうがごとし)といったという。杜預の注に「言

至危」(至つて危うきを言う)という通り、危険な状態を比喩したもの。同じ故事は『史記』呉太伯世家や『孔子家語』正論などにも見えており、梁の丘遲の「与陳伯之書」(『文選』卷四三)に「而將軍魚游於沸鼎之中、燕巢於飛幕之上、不亦惑乎」(而して將軍は魚の沸鼎の中に遊び、燕の飛幕の上に巢くうなり、亦た惑わずや)というなど、後に広く踏まえられる故事となつた。

この故事ほど有名ではないが、後には「巢」を名詞として用いた例も見えるようになり、『搜神記』卷六に「魏黄初元年、未央宮中有鷹、生燕巢中」(魏の黄初元年、未央宮中に鷹有り、燕巢の中に生ず)という記録が見え、『抱朴子』積滞に、無駄な努力をすることを喩えて、「是探燕巢而求鳳卵、搜井底而捕鱗魚」(是れ燕巢を探りて鳳卵を求め、井底を搜りて鱗魚を捕えんとするなり)と表現する例が見えている。

唐までの詩に一例ある例は、晋の「子夜四時歌七十五首」中の「春歌二十首」其一二(『樂府詩集』卷四四)に、「昔別雁集渚、今還燕巢梁」(昔別れしとき 雁 渚に集まり、今還るとき 燕 梁に巢くう)というもので、やはり「巢」を動詞として用いたもので、渡り鳥によって季節を表現した句である。

唐に入つてもあまり例は多くない中で、宋之問の詩題に「燕巢軍幕」(『全唐詩』卷五三)といい、李端の「雜歌」(『全唐詩』卷二八四)に「蘭生当門燕巢幕、蘭芽未吐燕泥落」(蘭は生じて門に当たり 燕は幕に巢くう、蘭芽未だ吐かずして 燕泥落つ)という例は、ともに季札の故事を踏まえて「巢」を動詞として用いた例であろう。

この故事を踏まえない例としては、杜審言の「和韋承慶過義陽公主山池五首」其一二(『全唐詩』卷六二)に「海燕巢書閣、山鷄舞画楼」(海燕 書閣に巢くう、山鷄 画楼に舞う)といい、薛業の「洪州客舍寄柳博士芳」(『全唐詩』卷一一七)に「去年燕巢主人屋、今年花發路傍枝」(去年 燕は巢くう 主人の屋、今年 花は発く 路傍の枝)という例などがある。ともに「巢」は動詞として用いられている。

そのような状況の中で、先に引いた白居易の「禽虫」(前出)に「豆苗鹿嚼んで 鳥毒を解き、艾葉 雀銜んで 燕巢を奪う」という例は、名詞として用いられていた。

以上のように、動詞の例が主ではあるが「燕巢」の用例は散見するのに対し、「燕窠」は張籍以前の用例が見当たらないようである。『全唐詩』にも他にわずかに四例、先立つ例はなく、同時期の白居易に一例、陳注も引く「感興二首」其一二356に「樽前誘得猩猩血、幕上偷安燕窠」(樽前 誘い得たり 猩猩の血、幕上 偷かに安んず 燕燕の窠)という句が見える。大和八

九年(八三四)八三五)、張籍の死後の作、季札の故事を用いた例。
 残る三例の晩唐以後の例のうち、先に引いた李頻の「黄雀行」(前出)では、「朱宮 晩樹 鶯語を侵し、画閣 香簾 燕窠を奪う」と、こと同じく黄雀が奪う対象として「燕窠」の表現を用いていた。

「嘖嘖啾啾」とも擬音語。ここではともに黄雀の鳴き声を表現している。
 『爾雅』積鳥で「鴈」という鳥の種類を記した部分に「宵鴈嘖嘖」(宵鴈は嘖嘖)という。郭璞の注に「諸鴈皆因其毛色音声以為名」(諸鴈は皆な其の毛色・音声に因りて以て名と為す)というように、鴈は羽の色や鳴き声を名前にしており、「宵鴈」の場合は鳴き声の「嘖嘖」が名前となっている。陳注は『春秋』昭公十七年の『左伝』の、百官と鳥の名の関連を述べた部分に「九鴈為九農正」(九鴈を九農正と為す)という句に付された杜預の注に、「鴈有九種」(鴈に九種有り)と述べて、以下この『爾雅』の記述を挙げているのを引く(『左伝』および注は「鴈」を全て「鴈」に作る)。
 字書によれば、「鴈」は「ふなしうずら」という鳥ということだが、後の用例の数は少ないものの、それらを見る限り、「鴈」に限らずに用いられている。

『爾雅』以降の例は極めて少なく、井戸の中から聞こえる落とされた女性の声(『捜神記』卷三)や、嫁入り前の娘の腹に宿った鬼の声(『太平廣記』卷三一六所引『録異伝』)など、微かみや高い音の形容であろうとは想像されるものの、非常に特殊な音の形容の例が見えるくらいであり(『洛陽伽藍記』の例は後掲)、唐までの詩にも用例はない。

唐に入って、張籍以前の詩に二例、先に「黄雀」の例として引いた儲光羲の「野田黄雀行」(前出)に「嘖嘖たり 野田の雀、軀体の微なるを知らず」の句があった。ことと同じく黄雀の声を表現している。もう一例も「黄雀」の語釈に引いた馮著の「燕銜泥」(前出)の例、先の引用と別の部分に「爾不見東家黄鸝鳴嘖嘖、蛇盤瓦溝鼠穿壁」(爾見ずや 東家の黄鸝 鳴きて嘖嘖たるに、蛇は瓦溝に 盤り 鼠は壁を穿つを)という。燕のヒナの鳴き声を表現した例。同時代になるとやや用例が増え、例えば「観稼」0253に「累累繞場稼、嘖嘖群飛雀」(累累たり 場を繞る稼、嘖嘖たり 群れ飛ぶ雀)というように雀の例も多く見えるほか、鵲などの他の鳥の例も見え、また、李賀の「南山田中行」(王琦注本卷二)では「秋野明、秋風白、塘水溲溲虫嘖嘖」(秋野明るく、秋風白し、塘水は溲溲 虫は嘖嘖たり)と、虫の音の表現にも用いられている。

一方、文字の異同のある六朝期の例として、『洛陽伽藍記』卷四「城西」の部分に、もと豪華を誇った河間王の舊宅であった河間寺の壮麗さを目にし

た人々が、「咸皆啾啾、雖梁王兔苑想之不如也」(咸皆啾啾として、梁王の兔苑も之を想えば如かざるなり)とあるのが、テキストによつては「嘖嘖」に作るという。

『広韻』によれば、「嘖」は入声二〇陌に「側伯切」(意味の説明なし)、また入声二一麦に「土革切」(嘖は、叫ぶなり)・「側革切」(犬の呼ぶ声なり)と三箇所に収めるもののいずれも日本漢字音が「サク」であるのに対し、「啾」は入声五質に「資悉切」(啾啾は、声なり)で「シツ」、二四職に「子力切」(啾啾は、声なり)で「シキ・ソク」となっており、現代中国音でも「嘖」は *ne*、「啾」は *ju* と、音はかなり異なっているのだが、後述するよう同じ「嘖嘖」と「啾啾」の異同が張籍のもう一例にも見えており、両者は通じて用いられていた可能性がある。

「啾啾」であれば、唐までの詩にも例があり、施榮泰の「王昭君」(『玉臺新詠』卷一〇)に「啾啾撫心歎、蛾眉誤殺人」(啾啾として 心を撫して歎く、蛾眉 人を誤殺す)と、女性の嘆く声を形容する。また、多くの異同のある例だが、有名な「木蘭詩」(『樂府詩集』卷二五)の冒頭に「啾啾復啾啾、木蘭当戸織」(啾啾 復た啾啾、木蘭 戸に当たりて織る)の句があり、これに従えば、機織りの音の形容。一方同じ句を『古文苑』卷四は「促織何啾啾」(促織 何ぞ啾啾たる)に作り、これに従えば、促織(コオロギ)の音の形容となる。

唐詩には鳥の鳴き声の例があり、王維の「青雀歌」(趙注本卷六)に「猶勝黄雀争上下、啾啾空倉復若何」(猶お勝る 黄雀の上下を争うに、空倉に啾啾たるも 復た若何せん)と、空っぽの倉で上下を争って騒がしく鳴く黄雀の声を形容し、同時代の劉禹錫の「鶻賦吟」(『箋証』卷二七)に「如何上春日、啾啾滿庭飛」(如何ぞ 上春の日、啾啾として 庭に満ちて飛ぶ)と、鶻(モズともカツコウともいう)の声を形容する。

「啾啾」であれば杜甫にも用例が一例、「狂歌行、贈四兄」(『詳註』卷一四)に「日斜枕肘寢已熟、啾啾啾啾為何人」(日斜めにして 肘を枕として 寢は已に熟す、啾啾 啾啾たるは 何れの人の為ぞ)という。ことと同じく「啾啾」と組み合わせられている。

張籍には「嘖嘖」がもう一例、次の416「秋夜長」(卷七)に「愁人不寐畏枕席、暗虫嘖嘖遠我傍」(愁人は寐ねずして 枕席を畏れ、暗虫は嘖嘖 我が傍を遠る)の句がある。虫の声を表現した例。この「嘖嘖」を『樂府詩集』等では「啾啾」に作っている。

「啾啾」の方は古くから用例が多く、『楚辞』にも「離騷」に「揚雲霓之晦藹兮、鳴玉鸞之啾啾」(雲霓の晦藹たるを揚げ、玉鸞の啾啾たるを鳴らす)といい、九歌「山鬼」に「雷填填兮雨冥冥、猿啾啾兮又夜鳴」(雷は填填と

して雨は冥冥たり、猿は啾啾として又は夜に鳴く」といい、「招隠士」に「歳暮兮不自聊、蟋蟀鳴兮啾啾」（歳暮れて自ら聊んぜず、蟋蟀鳴きて啾啾たり）といい、三例が見えている。「離騷」の例は鸞鳥の声をまねたという鈴の音の形容、「山鬼」の例は猿の鳴き声の形容、「招隠士」の例は「蟋蟀」（ニイゼミのことという）の鳴き声の形容。

唐までの詩にも多くの用例があるうち、古く後漢の秦嘉の「贈婦詩」（『玉臺新詠』巻九）に「啾啾鶏雀、群飛赴楹」（啾啾たる鶏雀、群飛して 楹に赴く）という例は、ニワトリとともにではあるが、雀の鳴き声を形容した例となつてゐる。他に、何遜の「野夕、答孫郎擢」（『何遜集校注（修訂本）』巻一）に「杳杳星出雲、啾啾雀隱樹」（杳杳星出雲、啾啾雀隱樹）といい、北魏の高孝緯の「空城雀」（『樂府詩集』巻六八）に「啾啾雀噪城、鬱鬱無歡賞」（啾啾として 雀 城に噪ぐも、鬱鬱として 歡賞する無し）という例は、雀の声の形容に用いている。唐までの詩では、他に、鳳凰・ニワトリなどの声や胡騎のたてる音、樂器の音などの形容に用いられている。

唐に入り、雁・青雀（イカル）などの他の鳥や、セミやコオロギ・カエルの鳴き声など、さらに様々なものの形容として用いられるようになる中で、雀の声を形容した例としては、すでに「黄雀」の例として挙げた劉長卿の「登吳古城歌」（前出）に「白楊蕭蕭として 故柯を悲しみ、黄雀啾啾として 晚禾を争う」といい、やはり「黄雀」の例として挙げた杜甫の「枯樓」（前出）に「啾啾として 黄雀啄み、側に見る 寒蓬の走るを」という例などがある。

杜甫にはこの他に三例あるうち（一例はすでに引いた「狂歌行、贈四兄」（前出）に「啾啾啾」の形で見える例、最も名高いのは、「兵車行」（『詳註』巻二）に「新鬼煩冤旧鬼哭、天陰雨湿声啾啾」（新鬼は煩冤し 旧鬼は哭し、天陰り 雨湿すとき 声啾啾たるを）という例であろう。張籍の例はこれのみ。

〔白日晩〕 日が暮れる。

白日が1「野居」・13「猛虎行」・17「求仙行」・25「吳宮怨」（いずれも巻一）に見えたほか、32「羈旅行」（巻一）には「長安陌上相識稀、遙望天門白日晩」（長安の陌上 相識稀に、遙かに望む 天門 白日の晩るを）と、「白日晩」の並びで見えていた。それぞれの【語釈】参照。

廃宅描写前半部分の後半二句。続いては、草をくわえて燕の巢に入り込み、ひねもす鳴き続ける黄雀を詠ずる。黄雀の黄、草の緑、そのもの自体は登場しないが、ことばが用いられたことによりイメージとして鮮やかに残る燕の

黒、そして白日の白と、やはり色彩豊かな表現であり、後の句は聴覚も用いられていて、後半部分ほど陰惨な風景とはなっていない。ただし、はつきりとは書かれていないが、黄雀がくわえた葉は燕のいやがるヨモギであると思われ、そのような邪心を持つ黄雀が人のいない廃宅で我が物顔で泣き続ける点からは、邪悪さといったものが感じ取られ、黒いインクのしみが少し広がったかのような印象となつてゐる。

7・8 去時禾黍埋地中、饑兵掘土翻重重

〔去時〕 去つた時。住民がこの家を捨てて立ち去つた時。

古書には見えないようだが、詩文の中で、「去る（去りし）時」あるいは「去く（去きし）時」の意で、現在や来る時・帰る時と対にして（あるいは対にしていなくてもそれらを意識して）用いられることが多い。

蔡琰の作とされる「胡笳十八拍」第十七拍（『古詩紀』巻四）に「去時懷土兮心無緒、來時別兒兮思漫漫」（去りし時 土を懷いて 心に緒無く、來たる時 兒と別れて 思い漫漫たり）といい（『樂府詩集』巻五九では大きな文字の異同があり、去時と來時の対比は見られない）、漢を去つて匈奴へ赴いた時を表現する。

唐までの詩においては、他に、梁の武陵王蕭紀の「和湘東王夜夢忠令」（『玉臺新詠』巻七）に「懸知君意薄、不著去時衣」（懸かに知る 君が意薄く、去りし時の衣を著げざるを）といい、王筠の「行路難」（同巻九）に「猶憶去時腰大小、不知今日身短長」（猶お去りし時の腰の大小を憶ゆるも、今日の身の短長を知らず）というなどの例がある。ともに夫を待つ女性を詠じた閨怨詩の例で、前者は、夢に見た夫が、家を出た時の服装ではなかったと詠じた例、後者は、辺境の夫に衣を送るに当たって、家を出た時の腰回りは覚えてゐるが、今はどうか分らないと詠じた例である。

唐に入り、張九齡の「使還都湘東作」（『全唐詩』巻四七）に「倉庚昨歸候、陽鳥今去時」（倉庚 昨歸りし候、陽鳥 今去る時）といい、王昌齡の「代扶風主人答」（同巻一四〇）に「去時三十萬、獨自還長安」（去りし時 三十萬、獨自り 長安に還る）というなどの例がある。前者は、帰つた時から出発する現在までの時間の流れを、ウグイスから雁という鳥の変化によって表現した例、後者は、出征時に三十萬の大軍だったのが帰還の時には一人になったと述べて、戦闘の激しさを表現した例。

杜甫に一例、「啾啾」の語釈にも引いた「兵車行」（前出）に「去時里正与裏頭、歸來頭白還戍邊」（去りし時 里正 与に頭を裏み、歸り來たれば 頭白くして 還た辺を戍る）という。若くして戦争にかり出された時と、年

老いて帰った後、再び徴兵される現在を対比して表現している。

張籍にもう一例あり、³²⁴「隣婦哭征夫」(巻六)に「今日軍回身独歿、去時鞍馬別人騎」(今日軍回るも 身独り歿し、去りし時の鞍馬 別人騎る)の句がある。出征した時には夫が乗っていた馬に、夫が戦死したため帰還の時には別人が乗っていることを詠じたもの。

「禾黍埋地中」穀物は地中に埋めた。荷物になるため持つては行けないが、ただ置いておいたのでは胡軍にくれてやるようなものであるし、また、李樹政注・李建崑注もいうように、いつか帰ってきた時、すぐに食べられるようにということもあつて、地中に埋めておくのであろう。

「禾黍」、本来、「禾」はイネ、「黍」はキビ(モチキビ)のことという。後に広く穀物を指して用いられる。すでに15「牧童詞」(巻一)に「遠牧牛、遶村四面禾黍稠」(遠く牛を牧す、村を遶って四面 禾黍稠し)の句があつた。詳細はその【語釈】参照。また、本稿に訳出している414「隴頭行」にも「驅我迎人胡中去、恣放牛羊食禾黍」(我が迎人を驅りて胡中に去らしめ、恣に牛羊を放ちて禾黍を食らわしむ)と見える。

ここではこの詩の解釈に関連すると思われる例を再掲・補足しておく。このことばは古く『毛詩』王風「黍離」の小序に「周大夫行役、至于宗周、過故宗廟宮室、尽為禾黍。閔周室之顛覆、彷徨不忍去而作是詩也」(周の大夫 役に行きて、宗周に至り、故の宗廟宮室を過ぐるに、尽く禾黍と為る。周室の顛覆を閔れみ、彷徨して去るに忍びずして是の詩を作るなり)と見える。「黍離」の本文では、「彼黍離離、彼稷之苗」(彼の黍は離離たり、彼の稷の苗)と、黍のみが稷(稷もキビの仲間、和名はウルチキビ・タカキビ等とされる)とともに用いられているが、次のよく似た逸話では詩中でも「禾黍」の形で用いられる。すなわち、殷の紂王の親戚であつた箕子が、「過故殷虚、感宮室毀壞、生禾黍」(故の殷虚を過ぎて、宮室毀壞して、禾黍を生ずるに感じ)て「麦秀の歌」を作り、「麦秀漸漸兮、禾黍油油」(麦秀でて漸漸たり、禾黍油油たり)と詠じたという有名な逸話である(『史記』宋微子世家)。

これらの例からすると、宮殿が廢墟となつた時に生える(植えられる)というイメージがある植物と思われる。

唐までの詩には用例が少ないが、唐詩には多く用いられる語。単に特に廢墟に関わるというイメージを持たない例も多いが、陸敬の「遊隋故都」(『全唐詩』卷三三)に「粉榆何冷落、禾黍鬱芊綿」(粉榆 何ぞ冷落たる、禾黍鬱として芊綿たり)といい、李白の「登金陵冶城西北謝安墩」(王琦注本卷二一)に「地古雲物在、臺傾禾黍繁」(地古くして 雲物在り、臺傾きて禾黍繁し)という例などは、廢墟に関わる例といえよう。

この詩の場合、廢宅に生えている訳ではなく、すでに収穫されたものが地中に埋められると表現されているので、そこまで考える必要はないのかもしれないが、他のことばではなくこの「禾黍」が選ばれたのには、廢墟と関わるイメージがあることも関係していたのではないかと思わせる。

「地中」、大地の中央という意味で用いることもあるようだが(『周禮』大司徒など)、ここでは地面の中の意。古く『周易』復の大象に「雷在地中、復」(雷の地中に在るは、復なり)といい、『孟子』滕文公下に「禹掘地而注之海、驅蛇竜而放之菹、水由地中行」(禹 地を掘りて乘を海に注ぎ、蛇竜を驅つて之を菹に放てば、水 地中に由りて行く)というなどの用例がある。前者は、復の卦が、上が坤(地)・下が震(雷)であることから、まだ陽が地中にあつて微弱であることの象であると説明するもの、後者は禹が川の治水を行い蛇や竜を沼沢地帯に追いやったことにより、水が地中に掘り下げられた水路を流れたと表現した例。

「埋地中」の三字の並びでも先立つ例が一例あり、『太平經』丁部「六罪十治訣」に、物欲にとりつかれ財物を惜しむ人物を描写して、「固固不肯施予、反深埋地中、使人不睹」(固固として肯て施予せず、反って深く地中に埋め、人をして睹ざらしむ)という。

その他、文章には用例がしばしば見えるが、詩における用例は少なく、「○地の中」というような例を除けば、唐までの詩においては、二例が見えるのみ。齊の張融の「簫史曲」(『樂府詩集』卷五一)に「引響猶天外、吟声似地中」(引響は猶お天外のごとく、吟声は地中に似たり)といい、庾信の「同盧記室從軍」(『庾子山集注』卷三)に「地中鳴鼓角、天上下將軍」(地中鼓角を鳴らし、天上 將軍を下す)という。前者はこの世のものとは思えない音楽を表現した例、後者は大地を揺るがす大きな音を形容した例。

唐に入り、王昌齡の「小敷谷竜潭祠作」(『全唐詩』卷一四一)に「崖谷噴疾流、地中有雷集」(崖谷 疾流を噴き、地中 雷の集まる有り)といい、韋応物の「信州録事參軍常曾古鼎歌」(『全唐詩』卷一九五)に「雕螭刻篆相錯盤、地中歲久青苔寒」(螭を彫り 篆を刻して 相錯盤し、地中 歳久しくして 青苔寒し)というなどの例がある。前者は『周易』を踏まえつつ水音の大きさを表現する中に用いられており、後者は長い年月地中に埋もれていた鼎を表現する中に用いられている。

杜甫には用例がなく、張籍に他に二例。445「董公詩」(巻七)に「感応我淳化、生瑞我地中」(我が淳化に感応し、瑞を我が地中に生ず)といい、202「哭丘長史」(巻四)に「詩句偏伝天下口、朝衣偏送地中身」(詩句 偏く伝う 天下の口、朝衣 偏に送る 地中の身)という。前者は董晋の徳化に応じて瑞兆が現れたことを表現したもので、この場合の「地中」はこの大地

に・地上にという意味で用いられているようだ。後者は死後地中の世界にいる丘儒の肉体を表現したもので、こと同じく地中・地下の意味で用いられている。

なお、徐注は「埋地中」を「望地中」に作り、見渡す限り地に満ちていることをいうとするが、管見の及んだ限りでは「望地中」に作るテキストはなく、この異同があることを指摘する校注もないようだ。ただ、李樹政注の一本「望地中」に作るとするが、李樹政注は徐注を踏まえることが常であり、実際には見ていない可能性も考えられる。「望地中」に作るテキストを未見である現在の段階では、この異同は存在しないとしておくべきであろう。

〔饑兵〕「飢兵」に同じ。飢えた兵士。腹を空かせた兵隊。

何でもないことばのようだが、この二字でまとまる例は非常に少なく、「年飢えて兵興こる」といった形であれば他にも例がある）、管見に及んだ先立つ用例は、『晋書』天文志中の「妖星」の部分に「出則其国内乱、其下相讒、為飢兵」（出ずれば則ち其の国内は乱れ、其の下は相讒し、飢兵と為る）といい、『隋書』天文志中の「敗日」の星の部分に「他星守之、飢兵起」（他星之を守れば、飢兵起こる）という二例のみ。

『全唐詩』にもこの一例しか見当たらない。

〔掘土〕土を掘る。

これも用例は非常に少なく、『論衡』調時に「宅掘土而立木、田鑿溝而起堤」（宅には土を掘りて木を立て、田には溝を鑿ちて堤を起こす）といい、『述異記』の石玄度の話（『太平御覧』巻九〇五）に「移入後園大桑樹下、掘土埋之」（移して後園の大桑樹の下に入れ、土を掘りて之を埋む）というなどの例が見えるのみ。前者は家を建てる時に土を掘ることをいう例（『論衡』にはもう一例、「解除」にも家を建てる時の表現で「掘土」の語が見える）。後者は人間に食べられてしまった子犬の骨を母犬が拾って埋める話（同じ話は『太平広記』巻四三七にも見えるが、中華書局点校本は明鈔本によって「掘」を「爬」に改める）。

『全唐詩』中にも用例は他に一例のみ、寒山の「詩三百三首」其七〇（『全唐詩』巻八百六）に「猪死抛水内、人死掘土藏」（猪死すれば 水内に抛ち、人死すれば 土を掘りて蔵す）という例がある。

〔翻重重〕何度も掘り返す。

「重重」、12「築城詞」（巻一）に「重重土堅試行錐、軍吏執鞭催作遲」（重重として土は堅く 試みに錐を行うも、軍吏 鞭を執り 催して遅しと作す）

の句があり、37「楚宮行」（同前）に「霓旌鳳蓋到双闕、臺上重重歌吹發」（霓旌 鳳蓋 双闕に到り、臺上 重重として 歌吹発す）の句があった。その「語釈」参照。それらでも述べたように、空間的な重なりを表現する場合と動作の重なりを表現する場合があるようだが、ここでは動作の重なりと考えられる。ただ、もちろん同じ場所を掘るのではなく、色々なところを何度も掘り起こして探すということであろうから、掘り返した跡は空間的にも広がっているよう。

次の二句とまとめて廃宅描写の後半部分となる。その前半のこの二句では、前半部分四句では暗示的であった荒廢が、はっきりと描かれるようになる。また、前半部分四句が自然による荒廢であったのに対し、この二句では人為的な荒廢が加えられる。家の持ち主が立ち去る時に埋めた穀物を、お腹をすかせた兵士たちが掘り起こしたというのである。もちろん行儀よく埋め戻したりはしないであろうから、そこから中掘り返された跡だらけになったろう。そして、もう食糧がないと分かれば、この空き家はお役ご免である。

穴だらけになった廢宅から、飢えた兵士さえ立ち去った後には、荒廢の度を増した風景が広がっていると思われる。色彩を感じさせることばもほとんど用いられなくなり、荒れ果てた様子が感じられる二句である。

9・10 鷓鴣養子庭樹上、曲牆空屋多旋風

〔鷓鴣養子〕鷓鴣の鳥が子を育てる。

のこととも、ミソサザイのことともいい、あるいは鷓（トビ・フクロウ・ミソサザイ）と梟（フクロウ）の二つの鳥であるともいう。

猛禽のフクロウやトビと小さなミソサザイとは大きく異なるが、種類もさることながら、やはり重要なのは文学的なイメージであろう。その点に関して徐注・李樹政注は、「鷓鴣」を猛禽の名とし、普段は山林の中にいる鳥で、それが庭の木にいるということにより、町中が無人の廢宅になっていることを表現していると指摘する。また、李冬生注は、鷓は猛禽の名、梟には母を食べるという伝説があつて、両者とも悪鳥であり、邪悪な人物の比喻であるとし、「一説に「鷓鴣」でフクロウのことという。

この詩で踏まえられているのは、恐らく子を愛する鳥であるというイメージと、それにも関わらず子が母鳥を食う凶悪な鳥であるというイメージであろう。

「鷓鴣」は古く『毛詩』豳風「鷓鴣」に「鷓鴣鷓鴣、既取我子、無毀我室」

(鷓鴣 鷓鴣、既に我が子を取る、我が室を毀る無かれ) という。周公が親鳥の心情に託して思いを表現した作で、ひな鳥を奪った悪鳥である鷓鴣への呼びかけと解釈されており、すでに鷓鴣 || 悪鳥 というマイナスイメージを持っている。

一方、『毛詩』には「鷓」と「巢」を詠ずる例もあり、大雅「瞻卬」に「懿厥哲婦、為巢為鷓」(懿 厥の哲婦、巢と為り鷓と為る) という。周の幽王をそしめた作で、「哲婦」は愛姫の褒姒を皮肉った表現であるとされる。鄭箋には「鷓、悪声之鳥、喻褒姒之言無善」(鷓は、悪声の鳥なり、褒姒の言の善無きに喩う) という(阮元本には「悪」字を脱するが、校勘記に基づいて補った)。鄭玄はまとめ「鷓巢」と表現しており、本文の方が一つの鳥の名を二つに分けていると解すべきか、鄭玄が似た二種の鳥をまとめて注したと解すべきかは分からないが、こちらも悪い声の鳥というマイナスイメージを持って、悪女とされる褒姒の比喩に用いられたことだけは確かかなようである。

以後、単に悪鳥というイメージのみで用いられた例も、『荀子』『管子』等の先秦諸子の書から唐詩に至るまで、数多くの文献に見えているが、ここでは先に述べた、子を愛する鳥であるというイメージと、その子が後に母鳥を食うというイメージの例を見ておこう。

先の幽風「鷓鴣」のマイナスイメージの根底に、すでに子を愛する鳥というイメージもあったようである。陳琳「檄吳將校部曲文」(『文選』巻四四)の「鷓鴣之鳥巢於葦苕、若折子破、下愚之惑也」(鷓鴣の鳥 葦苕に巢く、若折れ子破るは、下愚の惑いなり) という句の李善注に引く『韓詩』に、幽風「鷓鴣」を引いた後、「鷓鴣、鷓鴣、鳥名也。鷓鴣所以愛憐養其子者、適所以病之。愛憐養其子者、謂堅固其窠巢。病之者、謂不知託於大樹茂枝、反敷之葦苕。風至、若折巢覆、有子則死、有卵則破、是其病也」(鷓鴣は、鷓鴣、鳥の名なり。鷓鴣の愛憐して其の子を養う所以の者は、適に之を病む所以なり。愛憐して其の子を養うとは、其の窠巢を堅固にするを謂う。之を病むとは、大樹の茂枝せるに託するを知らず、反つて之を葦苕に敷くを謂う。風至れば、若折れて巢覆り、子有れば則ち死し、卵有れば則ち破る、是れ其の病なり) という(異体字を統一した部分および『文選集注』本により文字を補った部分がある)。すなわち、鷓鴣は子を愛するがゆえにしつかりした巢を作るのだが、それを弱い葦の茎に作るため、巢が落ちてしまうことをいっている。「愛憐養其子者、謂堅固其窠巢」以下は李善による説明の可能性もあるが、「適所以病之」までは『韓詩』の文と思われ、どうやら『韓詩』は、幽風「鷓鴣」で鷓鴣がひな鳥を奪った理由を、自分のひな鳥を失った悲しみのためか、あるいは小さなひな鳥をかわいく思うためと解釈しているよ

うである。

このように、古くから子を愛する鳥というイメージがあったと思われるが、このイメージのみを引き継いだ例としては、晋の張俊の「為吳令謝詢求為諸孫置守家人表」(『文選』巻三八)に「臣聞春雨潤木、自葉流根、鷓鴣恤功、愛子及室」(臣聞く、春雨の木を潤すは、葉よりして根に流れ、鷓鴣の功を恤れむは、子を愛して室に及ぶ) という句がある。幽風「鷓鴣」の表現を用いながら、子に恩愛を注ぐ鳥として用いられている。

一方、子を愛する鳥であるというこのイメージに、それにも関わらず子が母を食うというイメージが付されたもの、かなり古い時代からのようである。『呂氏春秋』似順論「分職」に、白公勝が楚を敗った後、その財宝を人々の分け与えないでいたため後に殺されたことについて、「譬白公之齧、若巢之愛其子也」(白公の齧を譬うれば、巢の其の子を愛するが若きなり) とある。その高誘注に「巢愛養其子、子長而食其母也」(巢は其の子を愛養するに、子は長じて其の母を食らうなり) とあって、それをはっきりと説明している。同じ逸話は『淮南子』道応訓にも見え、これらでは「巢」とのみ表現しているが、『後漢書』朱浮伝に引く朱浮が彭寵に与えた手紙に「棄休令之嘉名、造巢鷓之逆謀」(休令の嘉名を棄てて、巢鷓の逆謀を造す) といひ、注に「巢鷓、即鷓巢也。其子適大、還食其母。説文云、不孝鳥也」(巢鷓は、即ち鷓巢なり。其の子適に大なれば、還つて其の母を食う。説文に云う、不孝の鳥なり) とあるように、「巢鷓」(|| 「鷓巢」) とも表現されている。

以上を踏まえて「鷓鴣」「鷓巢」「巢鷓」といった語の詩における用例を見てみると、唐までの詩においては、「銜草」の用例として引いた曹植「贈白馬王彪詩」(前出)に「鷓巢鳴銜扼、豺狼当路衢」(鷓巢 銜扼に鳴き、豺狼 路衢に当たる) といひ、梁の范縝の「擬招隱士」(『文苑英華』巻三五八)に「寒風厲兮鷓巢吟、鳥悲鳴兮離其群」(寒風厲しくして 鷓巢吟じ、鳥悲鳴して 其の群を離る) というなどの例がある。前者は猛獣である豺狼と対にして車の銜扼(軛) || びきの上で鳴く姿を詠じており、マイナスイメージを踏襲して邪悪な人間を比喻した例。後者は隠者を招くのに自然の厳しさを詠じた部分で、激しい寒風の中で鳴き騒ぐ姿は、やはり邪悪なイメージに基づくものであろう。

唐に入り、王績の「過漢故城」(『全唐詩』巻三七)に「狐兔驚麕、鷓鴣嚇獠狂」(狐兔 麕を驚かし、鷓鴣 獠狂を嚇す) といひ、李華の「雜詩六首」其一(同巻一五三)に「嘈嘈鷓巢動、好鳥徒綿蠻」(嘈嘈として 鷓巢動き、好鳥 徒らに綿蠻たり) というなどの例がある。ともにマイナスイメージで用いられており、前者は漢の長安城の荒廢ぶりを詠ずるのに、狐・麕・獠・獠狂(悪鬼)とともに用いられて荒涼とした雰圍気を作り出している

『全唐詩』卷九四は吳少微の作とし、「鷓鴣」を「鷓鴣」に作る。後者は典雅な音楽が淫靡な音楽によつて衰えることを詠ずる比喩として用いられ、鷓鴣のさばつて好鳥が無駄に美しい模様をしていると述べている。

杜甫には文字の異なる例を含めて三例、陳注はその文字の異なるが野鼠 乱穴に拱す」とある句を「鷓鴣」に作るテキストに従つて引く。鄭州の妻子の疎開先に帰る途上に目睹した風景の描写で、荒涼とした雰囲気を感じたものようである。

しかし、この句の先例としてよりふさわしいのは、「病柏」（同卷一〇）に「鷓鴣志意滿、養子穿穴内」（鷓鴣 志意滿ち、子を養う 穿穴の内）という例であろう。悪鳥というイメージにプラスして、子を養うという面が詠じられたもので、詩においては張籍に先立つ唯一の例である。

張籍と同時代では、母を食うという面がはつきりと詠じられた作もあり、韓愈の「孟東野失子」（『繫年集積』卷六）に「鷓鴣啄母腦、母死子始翻」（鷓鴣 母の腦を啄み、母死して 子始めて 翻る）の句がある。同時代にはまた、「鼻」の表現ではあるが、空き家の不気味さと結びつけた例があり、白居易の「凶宅」004に「鼻鳴松桂枝、狐藏蘭菊叢」（鼻は鳴く 松桂の枝、狐は藏る 蘭菊の叢）という句がある。代々の主人に次々と不幸が起り、ついに空き家となった不気味な家の描写に用いられている。

張籍には「鷓鴣（鼻鳴）」、「鷓鴣」の熟語の例は他になく、「鷓」一字の例もないが、「鼻」はもう一例、440「洛陽行」（卷七）に「翠華西去幾時返、鼻巢乳鳥藏蟄燕」（翠華 西に去りて 幾時か返る、鼻巢 鳥を乳い 蟄燕を藏す）とある。皇帝の行幸がなく、さびれてしまった洛陽の宮殿に鼻が巢を作ることをいう。

「養子」は13「猛虎行」（卷一）に「年年養子在空谷、雌雄上山不相逐」（年年 子を養いて 空谷に在り、雌雄 山に上りて 相逐わず）の句があった。その【語釈】参照。

〔庭樹上〕庭の木の上。

「庭樹」は39「烏啼引」（卷一）に「借汝庭樹作高窠、年年不令傷爾雛」（汝に庭樹を借す 高窠を作れ、年年 爾が雛を傷つけしめず）の句があった。その【語釈】参照。

『全唐詩』には「庭樹上」の並びで他に二例、ともに同時代の白居易の例で、ともに鳥がとまる場所を表現したもの。一例を挙げれば、「和答詩十首」其四「和大鶯鳥」0104に「飛來庭樹上、初但驚兒童」（飛び來たる 庭樹の上、初めは但だ 兒童を驚かす）の句がある。くちばしの大きい貪欲なカラ

スについて用いた例。

〔曲牆〕曲がったかき。地形にそつて湾曲しているというのではなく、まっすぐ作られたものが、荒れ果ててゆがんでしまったということであろう。

管見の及ぶ限り、用例が見当たらないことばで、『全唐詩』にもこれのみのようである。似たことばとして、「曲壁」という語が、晋の束皙の「貧家賦」（『藝文類聚』卷三五）に「唯曲壁之常在、時弛落而圧鎮」（唯だ曲壁の常に在りて、時に弛落して圧鎮す）と見え、題にいう「貧家」の曲がった壁を指して用いられているようだが、詩の用例は唐までの詩にも『全唐詩』にも見当たらない。

〔空屋〕人けのない建物。

この語も用例は少なく、『三国志』曹爽伝の注に引く『魏略』の丁謐の伝記に「太和中、常住鄴、借人空屋、居其中」（太和中、常に鄴に住み、人の空屋を借りて、其の中居る）というなどの例もあるが、唐までの詩には用例がない。

唐に入り、初唐には例がないが、盛唐以後、儲光羲の「行次田家澳梁作」（『全唐詩』卷一三七）に「野雀棲空屋、晨昏不復聞」（野雀 空屋に棲み、晨昏 復た聞かず）といい、劉商の「銅雀妓」（『全唐詩』卷三〇三）に「紅粉淚縱橫、調絃向空屋」（紅粉 涙縱橫し、絃を調べて 空屋に向かう）というなどの用例が見えるようになる。前者は田舎の空き家について用いた例で、そこに住み着いた雀を詠ずるのに用いており、後者は曹操の銅雀台を舞台とした閨怨の樂府における例で、かつて妓が仕えた曹操のいない建物を表現するのに用いている。

百名家本では「空室」に作る。「空室」は5「野老歌」（卷一）に「歲暮鋤犁倚空室、呼兒登山收橡實」（歲暮 鋤犁 空室に倚り、兒を呼び山に登りて 橡實を収めしむ）の句が見えた。その【語釈】参照。

〔多旋風〕つむじ風が多い。

徐注に指摘するように、旋風は鬼風とされておられ、亡霊が登場する際などに吹く不気味な風というイメージがあったが、そのイメージが定着したのが、どうやら張籍たち元和の詩人に至つてのことのようである。

「旋風」の語自体は、例えば『後漢書』独行列伝の王仲の条に、いなくなつた馬と風で吹き飛ばされた繡被を持っていた王仲に対し、その持ち主が述べたことばに、「被隨旋風与馬俱亡、卿何陰德而致此二物」（被は旋風に随いて馬と俱に亡きに、卿 何の陰德ありてか此の二物を致す）というなどの例

が見える。ここではものを吹き飛ばしてはいるが、不吉な風というイメージはまだないようだ。

唐までの詩には一例、曹摅の「答趙景猷詩十一章」第九章(『文館詞林』卷一五七)に「客過行雲、虛其旋風」(客 行雲を過ぎ、其の旋風を虚しくす)という。旅の様子を描いた部分で、旋風が吹いても気にとめずに旅を続けることを述べたものであるか。意味はよく分からないが、不気味な風というイメージはないようである。

唐に入って、李頎の「彈棋歌」(『全唐詩』卷一三三)に「回飄指速飛電、枱四取五旋風花」(回飄 指を転じて 飛電よりも速く、四を払い 五を取る 旋風の花)の句がある。この「旋風」は弾棋のゲームを詠じた他の詩人の詩にも見えており、弾棋のテクニクの一つをいうようである。また、岑参の「懷葉果閑操・姚曠・韓涉・李叔齊」(『岑参集校注』卷二)に「斜日半空庭、旋風走梨葉」(斜日 空庭に半ばし、旋風 梨葉を走らす)という。

これは梨の葉を巻き上げながら庭に吹くつむじ風を詠じたもの。また、陳注も引く高適の「画馬篇」(『全唐詩』卷二二三)に「荷君剪払与君用、一日千里如旋風」(君が剪払を荷^うけ 君が用に与^{あづか}る、一日千里なること 旋風の如からん)という例は、馬の足の速さをつむじ風に喩えた例。これら三例のいずれにも、不気味なイメージは見られない。

中唐元和期に入って不気味なイメージの用例が見えるようになる。先に「鴟鼻」の語釈にも引いた白居易の「凶宅」(前出)に「蒼苔黄葉地、日暮多旋風」(蒼苔 黄葉の地、日暮 旋風多し)というのは、先の引用部分の直後の二句で、不気味な空き家の描写に旋風が用いられている。「多旋風」の三字の並びはことと同じである。元稹の「生春」二十首其一三(『元稹集』卷一五)に「乱騎残爆竹、争唾小旋風」(乱れて騎る 残爆竹、争ひて唾す小旋風)というのは、子供の遊びを描いた作で、幽霊が出るといってつむじ風が起こると、つばを吐いて魔除けのまじないをする子供たちの姿が描かれている。また、朱泚の乱で荒廢した河南の地を描いたとされる孟郊の「傷春」(『孟郊詩集校注』卷三)に「千里無人旋風起、鶯啼燕語荒城裏」(千里 人無く 旋風起り、鶯啼 燕語 荒城の裏)という句があるが、これも、上記の元白の例や、この詩の中に「十年征戰城郭腥」(十年征戰 城郭 腥し)・「乱兵殺兒将女去」(乱兵 兒を殺し 女を將^ひて去る)といった悲惨な句があることを考慮すれば、単なる春のつむじ風によって、人間社会の荒廢と季節の運行を対比したというだけではなく、見渡す限り人の姿の見えない荒涼とした世界に、不気味な幽鬼の風が巻き起こる凄惨な風景と考えるべきであらう。

張籍の旋風の例はこれのみ。

廢宅描写八句の結び。先ほどの二句が人為によるものであったのに対し、再び自然による荒廢の描写。庭の木には邪惡な鴟鼻が子育てを始め、ゆがんだ垣根や人けのない建物の辺りでは、不吉なつむじ風がたびたび吹いている。いったん飢えた兵士という人間による荒廢が描かれた後、再び自然による荒廢が描かれているのは、この廢宅が、人間の住むようなところではなく、たということを表している。母を食うという、この上なく邪惡な怪物が巢^くく、幽霊が出る前触れという、おどろおどろしいつむじ風が吹き荒れるこの廢宅は、すでに異界となつてしまつており、人間が近づいてはならない場所となつたのである。

11・12 乱定幾人還本土、唯有官家重作主

〔乱定〕乱が平定される。戦乱が静まる。

何気ないことばのようだが、この二字でまとまる用例は極めて少なく、管見の及んだ限りでは、先立つ例は文字の異同のある一例のみ。杜甫の「歸雁」(『詳註』卷一三)に「東來千里客、乱定幾年歸」(東來 千里の客、乱定まりて 幾年にか歸る)の句がある。『詳註』に、この「定」の文字を「走」に作るテキストがあることが記されている。

『全唐詩』には他にも一例のみ、王建が張籍に贈った「留別張広文」(『王建詩集』卷九)に「謝恩身入鳳皇城、乱定相逢合眼明」(恩に謝して 身は入る 鳳皇の城、乱定まりて 合^あいに眼明らかならん)という句がある。諸注によれば、眼病の張籍に対して、乱が平定されたので目がよくなるだろうと述べたもので、この「乱定」は元和十二年(八一七)に淮西の呉元済の乱が平定されたことを指すという。

〔幾人還本土〕何人がもとの土地に帰ることができるだろう。反語で、ほとんど帰れる人はいないことをいう。

〔幾人〕は古く『儀礼』聘礼に「閔人間從者幾人」(閔人 從者の幾人なるかを問う)というなど、古くから多くの用例が見えることば。

唐までの詩においても、陶淵明の「詠二疏」(四部叢刊本卷四)に「借問衰周來、幾人得其趣」(借問す 衰周より 來、幾人か 其の趣を得たる)といい、庾信の「出自薊北門行」(『庾子山集注』卷五)に「燕山猶有石、須勒幾人名」(燕山 猶お石有るも、須らく幾人の名をか勒すべき)という。前者は疏広・疏受のような人物がほとんどいないこと、後者は燕山の石に名を刻まれる人物がほとんどいないことを表現している。

唐に入り膨大な用例がある中で、王翰の「涼州詞二首」其一（『全唐詩』卷一五六）に「醉臥沙場君莫笑、古來征戰幾人回」（酔うて沙場に臥すとも君笑うこと莫かれ、古來 征戰 幾人か回る）といい、盧綸の「長安春望」（『全唐詩』卷二七九）に「家在夢中何日到、春生江上幾人還」（家は夢中に在りて 何れの日にか到らん、春は江上に生じて 幾人か還る）という例は、ともに『唐詩選』に収められて人口に膾炙する。いずれも家に帰れる人がほとんどいないことを表現している例。

杜甫の詩中に一〇例の用例があるうち、「述懷」（『詳註』卷五）に「幾人全性命、尽室豈相偶」（幾人か 性命を全うせん、尽室 豈に相偶せん）という例は、安祿山の乱によって疎開先の鄜州に残した家族が害を受けていることを心配したもの。

張籍には「第幾人」の例を含めれば、他に六例。いずれも徒詩の例で、そのうち四例が「有幾人」の形になっている。一例を挙げれば、107「閑居」（卷二）に「尽説無多事、能閑有幾人」（尽く多事無しと説うも、能く閑なるは幾人か有る）の句がある。高貴な人々はみな忙しくないというが、本当に閑居している人はほとんどいないことをいう。

「本土」は陳注も引く『後漢書』光武帝紀下の建武二六年の条に「於是雲中・五原・朔方・北地・定襄・鴈門・上谷・代八郡民歸於本土」（是に於いて雲中・五原・朔方・北地・定襄・鴈門・上谷・代の八郡の民 本土に歸る）といい、『三國志』魏書「衛覬伝」に引く衛覬が荀彧に与えた手紙に、「人民流入荊州者十万余家、聞本土安寧、皆企望思歸」（人民の荊州に流入する者 十万余家、本土の安寧なるを聞き、皆企望して歸るを思ふ）というなど、歴史書には多くの用例があるが、詩における用例は極めて少ない。

唐までの詩に用例が見えず、『全唐詩』にも他にわずかに三例見えるのみ、先立つ例はなく、残る三例は、例えば同時代の劉禹錫の「酬令狐相公使宅別齋初栽桂樹見懷之作」（『箋証』外集卷三）に「根留本土依江潤、葉起寒稜映月開」（根は本土を留め 江に依りて潤い、葉は寒稜を起こし 月に映じて開く）というように、いずれも植物の植えかえを詠じた詩において、かつて生えていた場所の土をいうもので、こことは意味が異なる。

「本土」、蜀本は「本土」に作る。「本土」であれば、元の持ち主。

「本土」は、あまり用例がないが、歴史書には、例えば『宋書』武帝紀の永初元年の条に引く詔に「先因軍事所發奴僮、各還本土」（先に軍事に因りて發する所の奴僮は、各おの本土に還す）と、有事の際に徵發した奴隸を元の持ち主に返すことをいい、同じく『宋書』孝義伝の郭世道の条に、友人と遠方で商売をして、帰宅後に代金をもらいすぎたことに気付いた郭世道が「請其伴、求以此錢追還本土」（其の伴に請い、此の錢を以て追いて本土に還さ

んことを求む）と、殘金を元の持ち主に返そうとしたことをいうなどの例が散見する。いずれもこと同じく「還本土」という形であり、この「還」も元の持ち主に返すという意味で解することになるか。

詩における用例は極めて少なく、唐までの詩にみえず、『全唐詩』にも一例のみ。王建の「九仙公主旧莊」（『王建詩集』卷六）に「野牛行傍澆花井、本主分將灌藥畦」（野牛 行きて傍う 花井に澆ぐに、本主 分ちて將て 藥畦に灌ぐ）の句がある。これは九仙公主（睿宗の第九女である玉真公主のこととされる）のかつての莊園を訪れて往時を偲んだ懷古の作で、莊園の元の持ち主であるを「本土」と呼んだもの（王宗堂『王建詩集校注』は九仙公主よりさらに前の持ち主と解釈しているようだが、無理がある）。

以上、一応「本土」の例も挙げたが、ここは次の句（「主」で韻を踏む）と二句で一韻になっているのに、もしここが「本土」であれば、すぐ隣り合った句で同じ「主」字だけで押韻して一韻になっていることになる。これは非常に不自然であろうから、「本土」に作るテキストの方がよいと思われる。

「唯有官家重作主」ただお上が次の持ち主になるだけなのだ。没収されて官有地になるだけのことだ。

「官家」はお役所、お上。口語的表現。10「寄衣曲」（卷一）に「官家亦自寄衣去、貴從妾手着君身」（官家も亦た自ずから 衣を寄せ去るも、妾が手よりして 君が身に着くるを貴ぶ）の句が見えた。その【語釈】参照。また、15「牧童詞」・39「烏夜引」（ともに卷一）にも用いられていた。

なお、陳注は白居易「喜罷郡」2510に「自此光陰為己有、從前日月屬官家」（此れより 光陰 己が有と為る、從前 日月 官家に屬す）という例を引く。

「作主」の表現は、古く『春秋』僖公三十三年の『左伝』に「作主、非礼也」（主を作るは、礼に非ざるなり）と見えるほか、文公二年の『公羊伝』などにも見えているが、これは木主（位牌）を作るという意味。

その後も、あるじになるという意味の場合「作主人」（主人と作る）という表現が用いられることが多く、「作主」のみで表現した最も古い例は、顏延之の「宋郊祀歌」二首其一（『文選』卷二七）に「亘地称皇、暨天作主」（地に亘りて 皇と称し、天を暨くして主と作る）という例辺りのようである。この場合の主は君主のこと。

詩における用例も少なく、唐までの詩には、この顏延之の例と、齊の郊廟歌辞に全く同じ表現が見えるのと、計二例のみ。

唐に入り、「作主人」の例を除けば、蘇頌の「祭汾陰樂章」（『全唐詩』卷七三）に「誰其作主、皇考聖真」（誰か其れ主と作る、皇考は 聖真なり）

といい、朱湾の「尋隠者韋九山人於東溪草堂」に「四面雲山誰作主、數家煙火自為隣」(四面の雲山 誰か主と作る、數家の煙火 自ら隣と為す)というなどの例がある。前者は顔延之の例に似た、國家の祭祀における歌辞の例で、君主のことをいうようである。後者は一般のあるじの意味の例。

杜甫には用例がなく、張籍に「作主人」を除けばもう一例。212「送楊少尹赴蒲城」(卷四)に「自廢田園今作主、每逢耆老不呼名」(自ら田園を廢して今 主と作り、毎に耆老に逢いて 名を呼ばず)という。自分から田園のあるじをやめて宮仕えしていたが、このたび故郷に帰って再びそのあるじを務めることになった、と表現しているようである。

二句一韻で一まとまりとなる結び。反乱が平定された後も帰れる人はほとんどおらず、ただお上が没収して新しいあるじになるだけだと述べる。「乱定幾人還本土」の表現により、冒頭二句同様、このような廢宅が特定の一軒ではなくたくさんあることが明らかにされ、持ち主が帰らないためそれらもみな官有地にされてしまう悲劇を詠ずる。この結びには、官家の横暴とともに、李冬生注・李建崑注が指摘するように、家を捨てた人々の多くが戦乱のために流離しあるいは死亡してしまったことをも表しているよう。

徐注はこの二句を「乱の平定の後、いつたい何人がもとの土地に帰れるかは、政府の主導にかかっている」と解しているようだが、あるじがいなくなった廢宅をテーマとしたものであり、李樹政注・李冬生注の指摘するように、「主」はやはり廢宅の持ち主と解すべきであろう。すなわち「官家」が新たな持ち主となるのである。これについて、李樹政注は新しい持ち主を単に「官家」とするが、李冬生注は新しい貴頭の人たちとしている。確かに実際には、ひとたび官に没収された後、やがて論功行賞によって寵臣たちに下賜されたり、あるいは所轄官庁の上層部によって着服されたりするのであるが、この「官家」の表現はそこまで意識したものではなからう。確かにこの廢宅に暮らしていたはずの人の手には戻らず、一括して官有地とされてしまう悲劇を描いたものと思われる。

なお、李冬生注は、天宝末年に全国に九〇〇万戸以上の家があったのが、安史の乱勃発後の上元元年(七六〇)には約二〇〇万戸にまで減っていて、「時洛陽四面數百里州縣、皆為丘墟」(時に洛陽の四面の數百里の州縣、皆な丘墟と為る)という『資治通鑑』卷二二二・唐紀三十八の記述を引き、逃亡したもののや豪族に占有されてしまったものもあつたらうが、戦火の中で死亡したのも多かつたということを指摘する。

先に述べたように、安史の乱と限定する必要はないと思われるが、張籍が「乱定幾人還本土」と表現したのは、死を含めて、廢宅のかつての持ち主た

ちを待っていた過酷な運命を意識しているためであろう。

【補】

一 張籍「廢宅行」の構成

丸山氏前掲論文も指摘する通り、この詩は換韻により次のように分けられる。

- 1・2 廢宅の出現
- 3・6 廢宅の描写(前半)
- 7・10 廢宅の描写(後半)
- 11・12 結び

語釈の中でも触れたように、冒頭二句と結びの二句が廢宅一般を表現しているのに対して、中間八句は一軒の廢宅を描写したものとなっている(もちろんこれも想像の産物であろうが)。その廢宅の風景は、最初は穏やかさも感じさせる景であつたのが、次第に陰惨で荒涼としたものとなってゆき、最後はこの世のものならぬ世界になって終わっている。これは、時間の経過を表しており、廢宅が次第に荒廢していく様子を描いているのであろう。それを承けた結びの二句では、官家の横暴とともに、もとの持ち主の悲惨な運命を暗示して幕を閉じている。

なお、丸山氏前掲論文では、中間八句の構成を起承転結の展開であるとされ、また、この部分を一日のうちの時間経過を表現していると解しておられるようである。

二 野蚕・黄雀・飢兵・鷓鴣

諸注に触れられておらず、やや穿った読み方かとも思われるのでここでまとめることにしたが、中間八句の廢宅描写で用いられるこの四者には、共通点があるように思う。すなわち、「重作主」という点である。

野蚕は家蚕が食べるはずの桑の木に巣くひ、その葉をむさぼっていた(先に述べたように、丸山氏前掲論文は異民族の侵略の象徴である可能性を指摘しておられるが、ここでは他の三者との共通点という面からこの野蚕を見てみたい)。黄雀は、燕がいなくなった巢に入り込み、我が物顔で鳴き続けていた。飢兵は空き家になった人の家に入り込んで、好き勝手に掘り返して隠

された食糧を探し出していた。

そして鴟鳥。この鳥について、単に巢を作ったなどと表現するのではなく、わざわざ「養子」のことばが用いられているのには意味がある。母鳥は手塩にかけて育てた我が子に食い殺され、その子が巢のあるじとなるのである。

このように考えれば、これら四者は「重ねて主と作る」ものたちであり、すなわち後に出る「官家」の象徴でもあることになる。張籍は、官家というもの、この四者のように横暴で邪悪なものだということを表現しようとしたのではないだろうか。

三 廃宅というテーマ

最後に廃宅というテーマについて触れておこう。【題解】で触れたように「廃宅」の語は張籍以前の用例がほとんどないのだが、張籍がこの詩で主要なテーマに据え、同時期の元稹が詩の中で触れた後、晩唐以降、一気に多くの例が見られるようになる。しかも晩唐の時期には「廃宅」のが詩題にも多く用いられており、詩の重要なテーマとなってきたことがうかがえるのである。

異同のある一例を除いても、朱慶餘「廃宅花」（『全唐詩』卷五一五）・方干「廃宅」（同卷六五一）・方干「題故人廢宅二首」（同卷六五一）・吳融「廢宅」（同卷六八六）・杜荀鶴「經廢宅」（同卷六九一）・李中「經廢宅」（同卷七四八）・周潰「廢宅」（同卷七七二）など、多くの詩が残されている。

元稹の例は詩の一句で用いたのみであるから、現存した作品で見ると、張籍のこの詩がその先駆的な作品となっているようである。このように見ると、張籍のこの詩はあまり代表的な作品とは見なされていないが、その影響は意外に大きかったのではないかと思われる。

この廃宅というテーマの独自性を考えるとき重要なのは、誰のものとも分らない一軒の廃宅を詠じていることではないだろうか。

戦乱などにより荒廃した様子を描くことは、非常に古くから行われてきた。「禾黍」の【語釈】に引いた『毛詩』王風「黍離」の詩や「麦秀の歌」もそうであったし、戦乱による荒廃ということですが想起される杜甫の「春望」（『詳註』巻四）の「国破山河在、城春草木深」（国破れて、山河在り、城春にして、草木深し）もそうである。しかしこれらは荒廃した都を全体として詠じたものであり、一軒の家が対象となつていゝるものではなかった。すなわち、この詩で、最初はまだきれいだつた家が、時を追うにつれて荒廃していく様子が描かれるように、一軒の家の荒廃ぶりを細かく詠ずるものではない。自然の永遠性と人為のむなしさを対比して都全体の様子を描くような

場合が多く、細かい描写には適していなかったといえるかもしれない。

一方で、ある個人のかつての邸宅が詠じられる場合もあった。すぐに想起されるのは、陶淵明の「帰園田居」（四部叢刊本卷二）や「還旧居」（同卷三）等の一連の作で、自分のかつての住まいを詠じている例だが、自分の旧居以外にも、張説の「過庾信宅」（『全唐詩』卷八七）や王喬の「過故人旧宅」（同卷二〇三）など、枚挙にいとまがない。これらに詠じられているのは、自分のかつての住まいや、歴史上の人物の故居、今はなき友人の旧居などであり、そこを訪れて感慨を詠ずる作品である。これらは確かに一軒の家が対象となっているのだが、これらの場合、当然のことながら、どの家でもよいという訳ではなく、特定の家でなければならぬ。自分の家・友人の家・著名人の家が荒れ果てているからこそ起こる感慨である。言い換えれば、「旧居」「旧宅」の「居」「宅」の方に中心があるといえよう。

それに対し、この「廃宅行」は誰とも分からぬ人物の家であり、その荒廃の様子のみが純粹に描かれているといえるだろう。いわば「廃宅」の「廃」の方に中心があるのである。先に引いた晩唐詩人たちの作も、方干の「題故人廢宅二首」を除けば、誰のものとも分からない廃屋を描いていた。そして、そのようなものも詩の題材となりうることを示したという点において、この張籍の作品は重要なものではないだろうか。この詩は、例えば現代の日本で廢墟の写真的みを集めた写真集が出版され、廢墟の中に美を見出して鑑賞しているのとは異なり、決して美的なものとして廢宅を見ているわけではない。したが、廢宅を詩の題材として選び出したということに意味があると思われる。

また、中唐ではあまり広がりなかつたこの題材を、続く晩唐の詩人たちが好んで詩に詠じた根底には、しばしば李商隱の「楽遊原」（『全唐詩』卷五三九）「向晚意不適、驅車登古原。夕陽無限好、只是近黃昏」（晚に向かいて、意適わず、車を駆りて、古原に登る。夕陽、限り無く好し、只だ是れ、黃昏に近し）を引いて語られる、晩唐の時期特有の「滅びの美学」といった風潮が存在している可能性をもうかがわせる。この詩はその先駆的な意味を持っているかもしれない。

あまり取り上げられることのない「廢宅行」だが、文学史上で案外大きな役割を果たしている可能性もあり、注目すべき作品といえるだろう。（橘）

416 秋夜長

【題解】

秋の夜は長い。

『樂府詩集』卷七六の雜曲歌辭に属し、その解題は、魏・文帝の「雜詩二首」其一(『文選』卷二九)を、「秋夜長」の出拠とする。魏・文帝の「雜詩二首」其一是、秋の夜に独り眠れない男性の望郷の思いを詠み、その冒頭に「漫漫秋夜長、烈烈北風涼」(漫漫として 秋夜長く、烈烈として 北風涼し)とある。「秋夜長」はこの冒頭句の一部を摘取して、題としたものと考えられる。また魏・文帝の「雜詩二首」其一に見える白露・月光・天漢・草虫などの秋の景物は、張籍の「秋夜長」にも用いられている。

『樂府詩集』卷七六は、「秋夜長」の同題作品として、南齊の王融、初唐の王勃の「秋夜長」を収め、更に「秋夜長」の後に、「秋夜曲」として王維の作と、王維の二首を収める(但し王維の二首については、『全唐詩』はそれぞれ王涯と張仲素との作とする)。この他に、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』には、南齊の王融「秋夜長」以前の作品として、東晋・蘇彦「秋夜長」(『藝文類聚』卷二)、謝混「秋夜長」(同卷三)を収める。また『全唐詩』には、中唐の錢起「效古秋夜長」がある。

まず東晋の蘇彦、謝混の作品は、いずれも男性(詩人)の秋夜の憂愁を詠んでおり、魏文帝の「雜詩二首」と同じである。これに対して、南齊の王融は、秋夜の憂愁ではなく、秋夜の楽しみを詠み、それ以前とは内容を異にする。また唐に至ると、一転して秋夜を憂える女性(思婦)が描かれるようになり、初唐の王勃は、遠征の男性を思う女性(思婦)を詠む。中唐の錢起「效古秋夜長」、また三首の「秋夜曲」もいずれも女性の秋夜の憂愁を詠む。この「秋夜長」の同題樂府については、【補】で詳しく述べることにする。

また詩に於ける「秋夜長」の用例を確認すると、まず唐より前の詩に於ける「秋夜長」の用例は数例ある。劉宋の孝武帝劉駿「七夕詩二首」其一(『初學記』卷四)に「解帶遶迴軫、誰云秋夜長」(帯を解きて 遶かに軫を迴らす、誰か云う秋夜長しと)とあり、顧野王「艷歌行三首」其三(『古詩紀』卷一〇六)に「唯欣春日永、詎愁秋夜長」(唯だ春日の永きを欣ぶのみ、詎ぞ愁えん秋夜の長きを)とある。前者は牽牛と織女のことを詠み、二人の逢瀬は短く、二人にとっては秋夜は必ずしも長くはないのだと言い、秋夜の長いことを愁える魏文帝「雜詩二首」などの意見に対して異を唱える。後者は宴会の楽しみを表現して、春日の長きを楽しむだけで、秋の夜が長いことを愁えることは無いという。この他に、北魏の温子昇「擣衣詩」(『古詩紀』卷一〇九)に「長安城中秋夜長、佳人錦石擣流黄」(長安城中 秋夜長し、佳人錦石 流黄を擣つ)とあり、辺境の男性を思って砧をうつ長安の女性を描く。南朝系の詩に於ける「秋夜長」は、秋夜の女性を描く作品は見当たらないのに対して、これなどは、唐以後の「秋夜長」へと繋がっていく作品であ

る。

唐詩に於ける「秋夜長」の用例もあまり多くはなく、初唐の教例は、いずれも女性の憂愁を詠む。沈佺期「古歌」(『全唐詩』卷九五)に「璇閨窈窕秋夜長、繡戸徘徊明月光」(璇閨 窈窕として 秋夜長く、繡戸 徘徊す 明月光)とあり、同じく「古意呈補闕喬知之」(同卷九六)に「白狼河北音書斷、丹鳳城南秋夜長」(白狼河北 音書断え、丹鳳城南 秋夜長し)とある。前者は、君主の訪れを待つ宮女を、後者は遠征兵士のために砧をうつ女性を詠む。

盛唐に至って、韋応物「擬古詩十二首」其六(『韋応物集校注』卷六)に「月滿秋夜長、驚鳥号北林」(月満ちて 秋夜長し、驚鳥 北林に号ぶ)とあり、これは「古詩十九首」其七「明月皎夜光」を模擬したもので、旧友の薄情を思い、秋夜に嘆く男性の思いを詠む。

中唐には、張籍以外には数例の用例がある。特に白居易に三例もの用例があり、いずれも女性の秋夜の憂愁を詠む。白居易「新樂府・上陽白髮人」〇二に「秋夜長、夜長無寐天不明」(秋夜 長し、夜長くして寐ぬる無く 天は明らかならず)とあり、楊貴妃の爲に上陽宮に移された宮女の悲しみを詠む。ただ武元衡「八月十五酬從兄常望月有懷」(『全唐詩』卷三一六)に「坐愛円景滿、況茲秋夜長」(坐るに愛す 円景の満つるを、況んや茲の秋夜の長きを)とあり、これは從兄と満月を共にできない詩人の憂愁を描く。

このように「秋夜長」は秋夜の憂愁を述べるものであり、六朝末期にはその楽しみを言うものがあるが、それも既に定着した「秋夜長」のイメージを否定的に捉えて新味を出そうとしたものようである。また憂愁の人物は魏晋期は男性であったが、北朝の詩に女性の憂愁を詠む作品が見え、そして初唐期以降は女性の憂愁が描く作品が主流となる。ただし、韋応物や武元衡の例があるように、男性の憂愁を描くものが唐詩に全くないわけではない。張籍の「秋夜長」は、男性(詩人)の憂愁を描いており、唐代の同題樂府が女性の憂愁を描くとは異なっている。

徐注や李樹生注は、末二句の「鷓鴣」が、死ぬまで闘い続ける鳥であることから、人が互いに殺し合い続けることや、そのために農村が絶えず破壊されること、詩人の不眠の原因であると説明する。「鷓鴣」にどのような寓意を読みとるかが解釈の分かれるところであり、そのことは【語釈】で詳しく述べる。

【本文・書き下し文】

1 秋天如水夜未央 秋天は水の如く 夜 未だ央きず

- 2 天漢東西月色光
天漢は東西、月色は光く
3 愁人不寐畏枕席
愁人は寐ねずして、枕席を畏れ
4 暗蟲嘖嘖遶我傍
暗蟲は嘖嘖、我が傍を遶る
5 荒城爲村無更聲
荒城、村と爲り、更聲無く
6 起看北斗天未明
起ちて北斗を看るに、天未だ明かならず
7 白露滿田風裊裊
白露は田に滿ち、風、裊裊たり
8 千聲萬聲鶻鳥鳴
千聲萬聲、鶻鳥、鳴く

【押韻】

央—下平声—〇陽、光・傍—下平声—一唐（同用）
声—下平声—四清、明・鳴—下平声—二庚（同用）

【口語訳】

- 1 秋の空は水のように澄みわたり 夜はまだ終わらない
- 2 天の河は東西に横たわり 月は輝きを放つ
- 3 愁いを抱く人は眠ることができず 独り寝の冷たさを恐れ避け
- 4 暗がりにも鳴く秋の虫はサクサクと 我がそばをめぐる
- 5 荒れた町は村となって 時を告げる声もなく
- 6 起き上がって北斗を見れば まだ夜は明けない
- 7 白い露が田野に溢れて 風はじょうじょうと吹き
- 8 あちこちで たくさん鶻鳥が鳴いている

【語釈】

1・2 秋天如水夜未央、天漢東西月色光
「秋天如水」秋の夜空を水に喩え、その清澄さを表現する。
宋玉「九弁」〔文選〕卷三三「沈寥兮天高而氣清、寂寥兮收潦而水清」〔沈寥〕たり 天高くして氣清く、寂寥たり 收潦として水清しに秋の空の高く氣が清澄となり、秋の江水の静穏かつ清澄であることを言う。その王逸注には「秋天高朗、体清明也。言天高朗、照見無形。傷君昏乱、不聰明也」〔秋天高朗にして、体は清明なり。言うところは天は高朗にして、照らして形無きを見ず。君の昏乱して、聡明ならざるを傷むなり〕、また「溝無溢潦、百川静也。言川水夏濁而秋清、傷君無有清明之時也」〔溝に溢潦無く、百川静かなり。言うところは川の水は夏は濁りて秋は清し、君が清明の時有る無きを

傷むなり）とある。ここで、秋の「天」と秋の「水」とが並べ用いられている。

「秋天」は秋の空のこと。また秋の日、秋の季節を表すこともある。先の宋玉「九弁」にも言うように、秋の空はその高さで清らかさがその属性とされる。唐より前の例は少なく、『塩鉄論』相刺篇に「文学言治尚於唐虞、言義高於秋天。有華言矣、未見其実也」〔文学は治は唐虞より尚しと言ひ、義は秋天よりも高しと言ふ。華言あるも、未だ其の実を見ざるなり〕とあり、文学の意義の高さを「秋天」との比較によって表現する。

唐より前の詩の用例も数例。祖珽「秋日詩」〔初学記〕卷三に「秋天擬文学、秋水擅莊蒙」〔秋天は文学に擬せられ、秋水は莊蒙を擅にす〕とあり、これは「秋天」を文学に擬する例。また「秋天」を「秋水」とともに用いるのは、「九弁」に由来するが、「秋天」を水に喩える例は唐より前には見当たらないようである。

唐に入つて、詩の用例が多くなる。劉希夷「擣衣篇」〔全唐詩〕卷八二に「秋天瑟瑟夜漫漫、夜白風清玉露溥」〔秋天瑟瑟として夜漫漫たり、夜白くして風清く玉露溥たり〕、王維「送綦毋秘書棄官還江東」〔趙注本卷三〕に「秋天万里浄、日暮澄江空」〔秋天 万里浄く、日暮れて 澄江空し〕とある。前者は擣衣の女性の悲しみを描く詩の冒頭で秋の夜空の静寂とその長さを言ひ、後者は秋の空がどこまでも清らかであることを言う。

中唐に至つて、王建「江館对雨」〔王建詩集〕卷九に「鳥声愁雨似秋天、病客思家一向眠」〔鳥声愁雨 秋天に似たり、病客思家 一向の眠〕とあり、鳥声多くまたよく雨降る南方の天候を、愁い多き「秋天」にたとえる例が見える。

杜甫の用例は十例、秋夜の長いことを愁えるものとして、「客夜」〔詳注〕卷一一に「客睡何曾著、秋天不肯明」〔客睡 何曾ぞ著かん、秋天 明くるを肯んぜず〕とある。

張籍の用例はこの他に一例、148 「和左司元郎中秋居十首」其五〔卷二〕に「閑堂新掃洒、称是早秋天」〔閑堂 新たに掃洒し、称す是れ早秋の天〕とあり、これは秋の季節を指す。

「如水」について、陳注に引く『詩経』齊風「敝笱」に「齊子帰止、其従如水」〔齊子 帰ぐ、其の従は水の如し〕とあり、「齊子」に従う者の様子を「如水」と言う。毛伝は「水喻衆也」〔水は衆きを喩うるなり〕と多いことを形容するとし、鄭箋は「水之性可停可行」〔水の性は停むべく行くべし〕と、その行き止まる動作を水に喩えるところ。

唐より前の詩には数例の用例があり、「西洲曲」〔樂府詩集〕卷七二に「低頭弄蓮子、蓮子青如水」〔頭を低れて蓮子を弄し、蓮子 青きこと水の

如し」とあり、蓮の実の色を水に喩える例が見える。

唐に入って、盛唐までの詩の用例は少なく、劉長卿「雜詠八首・春鏡」(『全唐詩』卷一四八)に「宝鏡凌曙開、含虛淨如水」(宝鏡 凌曙に開き、含虚 淨きこと水の如し)とあり、鏡の透明さを水に喩える。

中唐になって用例が多くなり、「秋夜長」の同題作品である錢起「效古秋夜長」(同卷二二六)に「簷前碧雲靜如水、月吊棲鳥啼鳥起」(簷前の碧雲 靜かなること水の如し、月吊の棲鳥 啼きて鳥起こる)と、雲の静かなさまを水に喩える例がある。

秋の空を水に喩える例として、李益「詣紅樓院尋広宣不遇留題」(同卷二八三)に「柿葉翻紅霜景秋、碧天如水倚紅樓」(柿葉 紅を翻す 霜景の秋、碧天 水の如く 紅に倚る樓)、また白居易「酬集賢劉郎中对月見寄兼懷元浙東」(281)に「月在洛陽天、天高淨如水」(月は洛陽の天に在り、天高くして淨きこと水の如し)とある。前者は空の色を水に喩え、後者は秋の空の清澄さを「如水」と表現する。

張籍の用例はこの一例のみ。「如水」は秋の夜空の清澄さを表現するとともに、夜の静けさを言うのであろう。

「夜未央」夜がなかなか明けなことを言う。

陳注に引く『詩経』小雅「庭燎」に「夜如何其、夜未央」(夜は如何、夜未だ央きず)とあり、毛伝に「央且也」(央は且なり)とあり、鄭箋に「夜未央、猶言夜未渠央也」(夜未央は、猶お夜の未だ渠かに央きざるなり)とある。これはまだ夜は明けず、宴席がまだ続くことを言う。

また徐注及び李樹政注の引く魏文帝「燕歌行」(『文選』卷二七)に「明月皎皎照我牀、星漢西流夜未央」(明月皎皎として我が牀を照らし、星漢西に流るるも夜未だ央きず)とあり、こちらは空閨を守る女性が眠れずに秋夜の明けぬことを厭う例。

この他に唐より前の詩には数例の用例があり、張率「白紵歌九首」其五(『樂府詩集』卷五五)に「夜寒湛湛夜未央、華燈空爛月懸光」(夜寒くして湛湛夜未だ央きず、華燈 空しく爛き月は光を懸く)とあり、劉孝威「奉和逐涼詩」(『藝文類聚』卷五)に「鐘鳴夜未央、避暑起徬徨」(鐘鳴きて夜未だ央きず、暑を避けて起ちて徬徨す)とある。前者は宴席の夜がまだ明けぬことを、後者は暑い夜に涼を求めて外を歩く心地よさを言う。

唐に入っても、長い夜を厭う例は少なく、むしろ夜の楽しみが尽きないことをいう例が多い。例えば、崔日用「夜宴安樂公主宅」(『全唐詩』卷四六)は「主家盛時歡不極、才子能歌夜未央」(主家は盛時にして 歡は極まらず、才子は能く歌いて 夜未だ央きず)と宴席の楽しみが夜遅くまで続くことを

言う。長い夜を厭う例は、喬知之「李侍郎古意」(同卷八一)に「夜如何其夜未央、間花照月愁洞房」(夜は如何 夜未だ央きず、間花 月に照らされ 洞房に愁う)とあり、征人を思つて愁える女性を詠む詩に例が見えるのが、数少ない例である。

杜甫の用例はなく、張籍の用例もこの一例のみ。

「天漢東西」夜が深まり、天の川が夜空の東西に横たわるようになったことを言う。

陳注の引く魏文帝「雜詩二首」其一(『文選』卷二九)に「天漢迴西流、三五正從横」(天漢 廻りて西に流れ、三五 正に從横たり)とあり、夜が深まったことを天漢が西へと向きを変えたことで示す。張籍の句はこれを踏まえて夜の深まりを言うのであろう。

他に「天漢」で時間の経過を示すものとして、陸機「擬明月皎夜光」(同卷三〇)に「招搖西北指、天漢東南傾」(招搖 西北に指し、天漢 東南に傾く)とあり、李善注に引く「李陵詩」に「招搖西北馳、天漢東南流」(招搖 西北に馳せ、天漢 東南に流る)とあり、これは秋の深まりを「天漢」によって示す。また梁の庾丹「秋閨有望詩」(『玉臺新詠』卷五)に「耿耿横天漢、飄飄出岫雲」(耿耿と 天漢 横たわり、飄飄と 岫雲 出づ)とあり、沈約「雜曲三首・夜夜曲」(同卷五)に「河漢縦且横、北斗横復直」(河漢は縦に且つ横に、北斗は横に復た直)とある。前者は夜に男性の訪れを待つ女性の眼前の景として、後者は「河漢」と「北斗」を共に用いる例で、両者が夜空を移動することを言う。

唐に入っても詩の用例は多いが、天漢の伝承や地上の景物に天漢をなぞらえる例が多く、夜空の天漢の姿そのものを詠むものは少ない。儲光羲「題陸山人樓」(『全唐詩』卷一三六)に「山雲弘高棟、天漢入雲流」(山雲 高棟を払い、天漢 雲に入りて流る)、王涯「思君恩」(同卷二一六)に「鷄鳴天漢曉、鶯語禁林春」(鷄は鳴く 天漢の曉、鶯は語る 禁林の春)とある。前者は樓閣の高いことを天漢を用いて表現し、後者は夜明けに輝く天漢の姿を詠む。

杜甫の例は一例のみ。「苦雨奉寄隴西公兼呈王徵士」(『詳注』卷三)に「悄悄素澹路、迢迢天漢東」(悄悄たり素澹の路、迢迢たり天漢の東)とあり、これは渭水を天漢に見立てたもの。

張籍の例は一例のみだが、「星漢」で月とともに用いる例が、466「祭退之」(卷七)に「月中登高灘、星漢交垂芒」(月中 高灘に登り、星漢 交ごも垂芒す)とある。

〔月色〕月、又は月のようす、ここは月の光を指す。

「月色」は唐以前の詩にも用例は多く、秋夜に限らず春夜にも用いられている。やや顕著な特色としては、「音」（虫声・風声・秋声など）とともに用いられる例が多いことが挙げられる。劉孝綽「夜不得眠詩」〔『藝文類聚』卷三五〕に「風音觸樹起、月色度雲來」（風の音は樹に触れて起こり、月の色は雲を度りて来たると、時節の推移を感じさせる秋の風物として「風音」とともに見える）。

「月色〇」では、先の劉孝綽詩に和した劉孝先「和兄孝綽夜不得眠詩」（同卷三五）に「葉慘風声異、樓空月色寒」（葉慘として風声異なり、樓空しくして月色寒し）と、秋月の光の冷たさを言う例が見える。秋月の輝きを言うものは、王勃「臨高臺」〔『全唐詩』卷五五〕に「塵間狹路黯將暮、雲間月色明如素」（塵間の狹路 黯として將に暮れんとし、雲間の月色 明るきこと素の如し）とある。

盛唐期には「月色寒」のような悲涼な月を詠む例が多く、また辺境や戦場の月を詠む例も多いが、岑参「南池夜宿思王屋青蘿旧齋」〔『岑参集校注』卷一九八〕「天晴雲掃尽、雨洗月色新」（天晴れて 雲掃り尽き、雨洗いて 月色新たなり）は、雨上がりの月の新鮮な美しさを詠む。

杜甫の用例は二例、「南隣」〔『詳注』卷九〕に「白沙翠竹江邨暮、相送柴門月色新」（白沙翠竹 江邨の暮、柴門に相送れば 月色新たなり）とあり、暮れに出たばかりの月の光を言う。

「月色」の明るさに注目する例は中唐以後に用例が増えはじめる。巖維「答劉長卿蛇浦橋月下重送」〔『全唐詩』卷二六三〕に「月色今宵最明、庭間夜久天清」（月色 今宵最も明るく、庭間 夜久しくして天清し）と、友人の劉長卿と別れる前夜の月を描く。これは愁いのために眠れない思いを述べる詩の冒頭にある秋夜の景。また王建「早發金堤駅」〔『王建詩集』卷四〕に「虫声四野合、月色滿城白」（虫声 四野に合し、月色 城に満ちて白し）とあり、これも故郷を離れて従軍する苦しみを詠む詩の冒頭二句であり、秋の明月の光が町中に満ち溢れるさまを描く。

張籍の用例は三例、93「宿広徳寺寄従舅」（卷二）の「林西微月色、思与甯家同」（林西 微月の色、思は甯家と同じ）は新月の光、163「冬夕」（卷二）の「月色当窓入、郷心半夜生」（月色 窓に当たりて入り、郷心半夜に生ず）は、冬の月光の例。

冒頭二句は、清澄な秋の夜半の情景を描く。「夜未央」は長い夜を厭う例よりも、楽しみが尽きないことを言う用例が多いことからすれば、ここも秋の長い夜を厭うというよりは、清浄且つ静寂な秋の夜がまだ尽きないことを

言うのであろう。また魏文帝「雜詩二首」其一（前出）に「俯視清水波、仰看明月光。天漢迴西流、三五正縱横」（俯しては 清水の波を視、仰ぎては 明月の光を見る。天漢 廻りて西に流れ、三五 正に縦横たり）とあり、夜に眠れず、外を彷徨する人物が見る秋の景物として、「明月光」「天漢」がともに見え、張籍の冒頭はこれを踏まえるようである。福島久雄『孔子の見た星空 古典詩文の星を読む』（大修館書店、一九九七年）は、また張籍の冒頭の二句を引き、「秋の夜半前の銀河は、北極星と天頂の間あたりを大きく東西する。もし満月ならば月は中天付近にあり、銀河は淡くしか見えなことになる。そのためか、銀河と月が天空高くと歌う詩は少ない」（同書九七頁）と言う。ここで「天漢」は魏文帝「雜詩二首」のように時間の推移を示すが、ここではむしろ月の光と共に秋の夜空を彩る、その美しさが示されているようである。冒頭二句には、まだ秋夜の憂愁ははっきりと示されず、むしろ秋夜の美が強調されたうえで、そのような美しい夜に眠れない「愁人」が次に登場する。

3・4 愁人不寐畏枕席、暗虫嘖嘖遶我傍

「愁人不寐」愁いのために眠れないことをいう。「愁人」という語は古く『楚辞』九歌・大司命に「結桂枝兮延佇、羌愈思兮愁人。愁人兮奈何、願若今兮無虧」（桂枝を結びて延佇す、羌愈いよ思いて人を愁えしむ。人を愁えしむること奈何せん、願わくは今の若くして虧くこと無きを）とある。王逸注に「愈念楚国、愁且思也」（愈いよ楚国を念いて、愁い且つ思うなり）と言い、ここでの愁いは遠き故国楚への思いが募ることを言う。

陳注に引く『詩経』邶風「柏舟」に「耿耿不寐、如有隱憂」（耿耿として寐ねず、隱憂有るが如し）とあり、鄭箋は「仁人既不遇、憂在見侵害」（仁人既に遇わずして、憂は侵害せらるるに在り）と言い、不遇の仁者が小人に讒言されたことを憂えんとする。また李樹政注に引く「傷歌行」〔『文選』卷二七〕はこの「柏舟」の表現を踏まえて「憂人不能寐、耿耿夜何長」（憂人寐ぬる能わず、耿耿 夜の何ぞ長き）という。五臣注はこの「憂人」は離別した友を思う人物（男性）とする。

愁いのために夜眠れない人物を「愁人」とするのは、陳注に引く傅玄「雜詩」（同卷二九）に「志士惜日短、愁人知夜長」（志士 日の短きを惜しみ、愁人 夜の長きを知る）とあり、眠れぬ夜の長さを愁える人物を言う。

六朝詩の「愁人」の例は多く、男性と女性のどちらにも用いられる。陶淵明「雜詩十二首」其一（四部叢刊本卷四）に「愁人難為辭、遙遙春夜長」

(愁人 辞を為し難く、遙遠として春夜長し)とあり、沈約「学省愁臥」(『文選』卷三〇)に「愁人掩軒臥、高窓時動扉」(愁人軒に掩われて臥し、高窓時に扉を動かす)とある。両者はいずれも詩人自身を指し、前者は春の夜に、後者は秋に愁いに沈む人物を詠む。

唐に入って詩の用例は多く、初盛唐期は秋夜に不在の相手を思う女性に用いる例がやや多い。徐安貞「聞隣家理箏」(『全唐詩』卷一二四)に「北斗横天夜欲闌、愁人倚月思無端」(北斗は天に横わりて夜は闌ならんと欲し、愁人 月に倚りて思いは端なし)とあり、韋応物「聽鶯曲」(同卷一九五)に「誰家懶婦驚殘夢、何処愁人憶故園」(誰が家ぞ 懶婦 殘夢に驚かん、何くの処ぞ 愁人 故園を憶わん)とある。前者は女性の例だが、星(北斗)の動きによって夜の深まりを示すところが、張籍の発想に近い。後者は望郷の男性。

中唐期には行旅の人や望郷の人に用いる例が多くなり、むしろ女性の例が少ない。錢起「宿新里館」(『全唐詩』卷二二七)に「愁人待曉鷄、秋雨暗淒淒」(愁人 曉鷄を待ち、秋雨暗く淒淒たり)、劉禹錫「竹枝詞九首」其八(『箋証』卷二七)に「箇裏愁人腸自斷、由来不是此声悲」(箇裏に愁人 腸自ら断たれ、由来 是れ此の声の悲しきにあらず)とある。前者は現在の不遇を託つ人物、後者は三峽を旅する人物であり、いずれも行旅の男性を詠む。杜甫の用例は三例、「送路六侍御入朝」(『詳注』卷一二)に「劍南春色還無頼、触忤愁人到酒邊」(劍南の春色 還お無頼、触忤の愁人 酒邊に到る)とあり、「愁人」は友との別離を愁える詩人自身を指す。

「畏枕席」冷たい寝具で独り眠ることを恐れ避けることを言う。

「枕席」自体は古くから経書や史書に用例の見える語であり、寝具や眠る場所を指す。宋玉「高唐賦」(『文選』卷一九)に巫山の神女の言葉に「聞君遊高唐、願薦枕席」(君が高唐に遊ぶを聞き、枕席を薦めんことを願う)とあり、男女がともに夜を過す場所として用いられており、唐より前の詩にはこの用例が多く見られる。「古詩為焦仲卿妻作」(『玉臺新詠』卷一)に「幸復得此婦、結髮同枕席」(幸いに復た此の婦を得、結髮 枕席を同じくす)、曹植「種葛篇」(同卷二)に「歛愛在枕席、宿昔同衣食」(歛愛 枕席に在り、宿昔 衣食を同じくす)とある。また潘岳「悼亡詩三首」其二(『文選』卷二三)に「展轉明枕席、長簾竟牀空」(展転として枕席を明れば、長簾 牀の空しきに竟れり)とあり、これは亡き妻の「枕席」を見て、その不在を嘆くもの。

この他に、陳注に引く陶淵明「雜詩十二首」其二(四部叢刊本卷四)に「風來入房戸、夜中枕席冷」(風来たりて房戸に入り、夜中 枕席冷し)とあり、

孤独で眠れる夜に枕席が冷たく感じられることを言う。

唐詩の用例にも、寝具や眠る場所を示す例以外に、男女がともに夜を過すこと、又は不在の相手を思つて孤独の夜を嘆くことに用いる例が多く、崔顥「長門怨」(『全唐詩』卷一三〇)に「夜愁生枕席、春意罷簾櫳」(夜愁 枕席に生じ、春意 簾櫳に罷む)とあり、李白「去婦詞」(王琦注本卷六)に「相思若循環、枕席生流泉」(相思うこと 循環するが若く、枕席 流泉を生ず)とある。前者は孤独な夜を「枕席」に愁えることを、後者は相手を思つて「枕席」に涙を流すことを言う。

杜甫の用例は三例、周囲の清爽さを「枕席清」と表現するものが二例。「雨二首」(『詳注』卷一五)に「空山中宵陰、微冷先枕席」(空山 中宵に陰り、微冷は先ず枕席にす)とあり、雨の冷気が旅の夜具に敏感に感じられることを言う。

張籍の用例は二例、「臥疾」(卷七)に「春雨枕席冷、窓前新禽鳴」(春雨 枕席冷たく、窓前 新禽鳴く)とあり、病床の身には春の雨が冷たく感じられることを言う。

また王維の作とされる「秋夜曲二首」其一(趙注本卷一五)には「銀箏夜久殷勤弄、心怯空房不忍歸」(銀箏 夜久しくして 殷勤に弄し、心は空房を怯じて 帰るに忍びず)とあり、独り寂しく部屋に帰ることを厭う女性の思いを詠み、張籍の句に近い発想が見える。但し、『全唐詩』卷三四六はこれを中唐の王涯の作とする。王涯は貞元八年(七九二)の進士で張籍とほぼ同時期の人。

「暗虫噴噴遶我傍」秋も深まり、秋の虫が自分の近くまで来て鳴いていることを言う。

「暗虫」は暗がりに鳴く虫。陳注に引く常建「第三峰」(『全唐詩』卷一四四)に「山暝学棲鳥、月来随暗蜚」(山暝くして 棲鳥に学び、月来たりて暗蜚に随う)とある。「暗蜚」は「詩経」唐風「蟋蟀」に「蟋蟀在堂、歲聿其莫」(蟋蟀 堂に在り、歳聿に其れ莫れぬ)、その毛伝に「蟋蟀蜚也」(蟋蟀は蜚なり)とあるに基づく。蟋蟀は時の推移を示す秋の虫として古くから用いられており、宋玉「九弁」(『文選』卷三三)には「独申且而不寐兮、哀蟋蟀之宵征」(独り且を申えて寐ねられず、蟋蟀の宵に征くを哀しむ)とある。その王逸注に「見蜻蛉之夜行、自傷放棄、与昆虫為双也。或曰、宵征、謂七月在野、八月在宇、九月在戸、十月蟋蟀入我牀下」(蜻蛉の夜に行くを見、自ら放棄せられ、昆虫と双と為るを傷むなり。或いは曰く、宵征は、七月野に在り、八月 宇に在り、九月 戸に在り、十月蟋蟀 我が牀下に入ると)とあり、蟋蟀は季節の移り変わりとともに、次第に近づいてきて牀の下にま

に至ることを言う。

魏晉の詩にも「九弁」を踏まえる例が見え、阮籍「詠懷詩十七首」其七（同卷二三）に「開秋兆涼氣、蟋蟀鳴牀帷」（開秋 涼氣を兆し、蟋蟀 牀帷に鳴く）、潘岳「秋興賦」（同卷一三）に「熠燿祭於階闈兮、蟋蟀鳴乎軒屏」（熠燿 階闈に祭き、蟋蟀 軒屏に鳴く）とあり、いずれも蟋蟀が自分のそばで鳴くことを以て、時の推移を感じ、深い愁いや眠れぬ思いを述べる。

「暗虫」という語では、経書や史書に用例が見当たらず、六朝の詩文にも用例は見当たらない。唐に入って、王維の作とされる「秋夜曲二首」其二（趙注本卷一五）に「秋暹暗虫通夕響、征衣未寄莫飛霜」（秋暹りて 暗虫は通夕に響く、征衣 未だ寄せざるに霜を飛ばす莫かれ）とあり、秋の訪れを「暗虫」の声によって表す。但し、『全唐詩』卷三六七をこれを中唐の張仲素の作とする。その他には、中唐期以後に詩の用例があり、劉商「賦得月下聞蛩送別」（『全唐詩』卷三〇三）に「暗虫声遍草、明月夜無雲」（暗虫 声は草に遍る、明月 夜に雲無し）とあり、秋の訪れを「暗虫（蛩）」の声に感じ、惜別の情を述べる。また白居易「聞虫」0794には「闇虫唧唧夜懸懸、況是秋陰欲雨天。猶恐愁人暫得睡、声声移近臥牀前」（闇虫唧唧として夜懸懸たり、況んや是れ秋陰の天に雨ふらんと欲するをや。猶お恐る愁人の暫く睡りを得るも、声声移りて臥牀の前に近づくを）とあり、暗虫が「愁人」に近づいて、その声が一時の眠りを妨げることと心配することを言う。

張籍の用例はこの一例のみ。

「嘖嘖」は、ここでは暗虫の鳴く声。前の415「廢宅行」（巻七）に「黃雀唧唧入燕窠、嘖嘖啾啾白日晚」（黃雀 草を唧んで 燕窠に入り、嘖嘖啾啾として 白日晩る）とあり、その【語釈】を参照。「廢宅行」の例が鳥の鳴き声であるように、唐詩の用例は雀の声又は小さな鳥の声である。唐より前の詩に「嘖嘖」に用例はなく、虫の声を示す例は詩には他には見当たらないようである。

『全唐詩』・『樂府詩集』・四庫本は「唧唧」に作る。「唧唧」は、唐詩では虫の鳴き声でも用いられるが、女性の嘆く声や鳥の鳴き声としても用いられる場合も多い。女性の嘆く声は、施榮泰「王昭君」（『玉臺新詠』巻一〇）に「唧唧撫心歎、蛾眉誤殺人」（唧唧 心を撫して歎き、蛾眉 人を誤殺す）とあり、鳥の声は、王維「青雀歌」（趙注本卷六）に「猶勝黃雀爭上下、唧唧空倉復若何」（猶お黃雀の上下を争うに勝るも、唧唧として空倉復た若何せん）とあって、これは雀の声。

「唧唧」の虫の声の用例は、唐より前の詩には見当たらないようであり、唐詩でも中唐以降に見える。孟郊「秋懷十五首」其一（『孟郊詩集校注』卷四）に「孤骨夜難臥、吟虫相唧唧」（孤骨 夜に臥し難く、吟虫相唧唧たり）

とあり、元稹「酬鄭從事四年九月宴望海亭次用旧韻」（『元稹集』卷二六）に「我聞此曲深歎息、唧唧不異秋草虫」（我は此の曲を聞きて深く歎息し、唧唧 秋草の虫に異ならず）とある。前者は眠れぬ夜に虫の声が聞こえて老いの嘆きが増すことを言い、後者は曲を聴いて嘆息することが秋の虫の声と類することを言う。

杜甫の用例は一例。415「廢宅行」の【語釈】参照。張籍の用例はこの一例のみ。

「遶我傍」は蟋蟀が自分の近くにすることを言う。先に引用した『詩經』唐風「蟋蟀」にあるように、蟋蟀は秋が深まるごとに人の住居に近づくこととされており、これも秋が深まったことを示す。百名家本は「遶」を「繞」に作る。

陳注に引く「飲馬長城窟行」（『文選』卷二七）に「夢見在我傍、忽覺在佗鄉」（夢に見しは我が傍に在るも、忽として覺むれば佗郷に在り）とあり、遠く離れた相手が夢の中では自分のすぐそばにいたことを「在我傍」という。この表現は張籍の他の詩にも見え、33「車遥遥」（巻一）に「驚戸游兔在我傍、獨唱鄉歌對僮僕」（驚戸の游兔 我が傍に在り、獨り郷歌を唱いて僮僕に對す）とある。その【語釈】を参照。

また「遶我傍」の用例は、白居易「二年三月五日齋畢開素當食偶吟贈妻弘農郡君」523に「嬌駘三四孫、索哺遶我傍」（嬌駘たり 三四の孫、哺を索めて我が傍を遶る）とあり、孫たちが食べる物をねだつて自分のそばへ来るさまを言う。

この二句は、愁いの為に眠れぬ人物の状況を描く。夜は次第に深まってゆくが、「愁人」は冷たい獨り寝の夜具を避けて眠れずにいる。魏文帝「雜詩二首」其一（前出）に「草虫鳴何悲、孤雁獨南翔」（草虫 鳴くこと何ぞ悲しき、孤雁 獨り南に翔る）とあり、眠れぬ人物の憂愁を増すものとして、「草虫」と「孤雁」が見える。ここで「暗虫」が自分のそばで鳴くと言うことから、秋が深まりゆくこと、時が推移することを言うのであろう。

5・6 荒城為村無更声、起看北斗天未明

〔荒城為村〕荒れ果てた町が村となる。

「荒城」は荒廢した町。張籍の32「羈旅行」（巻一）に「荒城無人霜滿路、野火烧橋不得度」（荒城 人無く 霜 路に滿ち、野火 橋を焼きて 度を不得ず）とあり、時を経て荒れ果てて人影もない町を「荒城」と表現する。その【語釈】を参照。

唐以前の詩では、謝朓の用例が最も古く、他に庾信・陰鏗ら六朝末の詩人に用例が見える。庾信「擬詠懷詩二十七首」其一七(『庾子山集注』卷三)に「日晚荒城上、蒼茫餘落暉」(日は荒城の上に晚れ、蒼茫 落暉を餘す)とあり、陰鏗「登武昌岸望詩」(『藝文類聚』卷二八)に「荒城高切落、古柳細條疎」(荒城 高切 落ち、古柳 細條 疎なり)とある。前者は辺境の荒れ果てた町を言い、後者は武昌の旧城が荒れ果てて、高い城壁も壊れ落ちていくことを言う。

唐詩では、初盛唐期に数例の用例が見られ、李白「古風五十九首」其一四(王琦注本卷二)に「荒城空大漠、辺邑無遺堵」(荒城 大漠に空しく、辺邑に遺堵無し)とあり、高適「古大梁行」(『全唐詩』卷二二三)に「古城莽蒼饒荆榛、驅馬荒城愁殺人」(古城 莽蒼として荆榛饒く、馬を荒城に駆ければ人を愁殺す)とある。前者は後者は辺境の荒れ果てた町は沙漠に埋もれ、村には囲みも残されていないことを言い、後者は魏の旧都が時を経て荒れ果てていることを言う。

杜甫の用例二例のうち、「登兗州城樓」(『詳注』卷一)が曲阜を「荒城」とするのに対して、もう一例の「謁先主廟」(同卷一五)は、夔州を「荒城」として「絶域帰舟遠、荒城繫馬頻」(絶域 帰舟遠く、荒城 繫馬頻りなり)とある。

張籍の用例は三例。先の「羈旅行」の他に、66「襄国別友」(卷二)に「曉色荒城下、相看秋草時」(曉色 荒城の下、相看る 秋草の時)とあり、かつては趙の都市であった襄国を「荒城」と表現する。ここでも「荒城」は時間を経て荒れ果てた町のことを言う。

〔無更声〕時を告げる音も聞こえない。周囲の静けさを言う。李樹政は、町が荒れ果てて、拍子木を打って時を告げる音さえしないことと言う。

「更声」の唐より前の詩の用例は見当たらず、唐詩にも、張籍より前には杜甫に一例のみ。「曉望」(『詳注』卷二〇)に「白帝更声尽、陽臺曙色分」(白帝更声尽き、陽臺曙色分かる)とあり、夜の時を告げる声も消え、夜明けを迎えることを言う。

時を告げる人物を「更人」と言い、古くは梁の何遜「与沈助教同宿湓口夜別詩」(『何遜集校注』卷二)に「華燭已消半、更人数唱籌」(華燭 已に消ゆること半ば、更人 数しば籌を唱う)とあり、夜遅くなって、しばしば更人が時を告げることを聞くことを言う。また唐詩では、皎然「奉酬袁使君送陸瀟御迴道寺院」(『全唐詩』卷八一六)に「更人莫報夜、禪閣本無閑」(更人 夜を報ずる無く、禪閣 本より閑無し)とあり、これは禪院は町からも離れており、更人が時を告げることも無く、静かであることを言う。

〔起看北斗天未明〕起き上がって未だ明けきらぬ夜空に北斗星を見る。

北斗星、所謂北斗七星は古代から時刻や季節を示すものとして用いられており、『史記』天官書には「北斗七星：用昏建者杓。杓、自華以西南。夜半建者衡。衡、殷中州河・濟之間。平旦建者魁。魁、海岱以東北也」(北斗七星：昏を用いて建する者は杓なり。杓は、華より以西南なり。夜半に建する者は衡なり。衡は、中州河・濟の間に殷たる。平旦に建する者は魁なり。魁は、海岱より以東北なり)とある。

唐より前の詩では、「善哉行」の古辞(『宋書』樂志三)に「月没參横、北斗闌干」(月は没し參は横たわり、北斗は闌干たり)とあり、また傅玄「雜詩」(『文選』卷二九)に「良時無停景、北斗忽低昂」(良時 景を停むる無く、北斗 忽ち低昂す)とある。前者は北斗星が斜めに傾く(「闌干」)ことよって、後者は北斗星が天空を速やかに移動することよって、時の推移を表現する。また北斗星の動きと夜明けとの関係を示す例として、王筠「向曉聞情詩」(『藝文類聚』卷三二)に「北斗行欲没、東方稍已晞」(北斗 行ゆく没せんと欲し、東方 稍く已に晞く)とある。

唐に入って「北斗」の詩の用例は多く、陳注の引く杜審言「蓬萊三殿侍宴奉敕詠終南山扈制」(『全唐詩』卷六二)に「北斗挂城辺、南山倚殿前」(北斗 城の辺に挂かり、南山 殿前に倚る)とあり、北斗が天空低く在って城壁に引つ掛かっているようだと言う。同じような例は、李白「單父東樓秋夜送族弟沈之秦」(王琦注本卷一六)にも「坐來黃葉落四五、北斗已挂西城樓」(坐來に黄葉の落つること四五、北斗 已に西城の樓に挂かる)とあり、これは夜の時刻よりは、むしろ季節の推移に焦点がある。

夜の時刻を「北斗」で表現する例は、沈佺期「古歌」(『全唐詩』卷九五)に「北斗七星横夜半、清歌一曲断君腸」(北斗七星 夜半に横たわり、清歌一曲 君が腸を断つ)、儲光羲「田家雜興八首」其八(同卷一三七)に「清淺望河漢、低昂看北斗」(清淺 河漢を望み、低昂 北斗を見る)とある。前者は北斗が天に横たわること、夜がまだ半ばであることを表現する。後者は宴会の後に帰ろうと外に出てみたものの、天の川に牽牛と織女の会い難きことを思い、また上下する北斗星に時の推移を感じて、このまま朝まで飲みましようかと問いかけるもの。

杜甫の用例は十四例、「東屯月夜」(『詳注』卷二〇)に「日転東方白、風來北斗昏」(日転じて東方白し、風來たりて北斗昏し)、「夜歸」(同卷二一)「傍見北斗向江低、仰看明星当空大」(傍に見る 北斗の江に向かいて低るるを、仰ぎ見る 明星の空に当たりて大なるを)とある。前者は夜明けを迎えて北斗星の光が弱まったことを、後者は夜遅くに帰ってきて、低く傾いた

北斗星に時の推移を表現する例。

張籍の用例は二例、163「冬夕」(巻二)に「迴首嗟淹泊、城頭北斗横」(首を廻らして淹泊を嗟く、城頭 北斗横はる)とあり、時の推移を「北斗」で表現する。

「天未明」という表現は、張籍の375「楚妃怨」(巻六)にも「美人初起天未明、手払銀餅秋水冷」(美人初めて起きるに天未だ明らかならず、手は銀餅を払うに秋水冷し)と見え、やはり憂愁のために眠れない人物が夜が明けきれぬ前に起きることを言う。

唐より前の詩には用例が無いようであり、唐に入っても詩の用例は中唐以降に数例見えるのみ。白居易「涼夜有懷」0751に「燈尽夢初罷、月斜天未明」(燈尽き夢初めて罷み、月斜めなるも天未だ明らかならず)とあり、これは憂愁のために眠れずに夜明け前に起きる人物の例。

この二句は、荒れ果てた町には時を告げる声もなく、時間を測るために外に出て「北斗」を見上げることを言う。「荒城為村」は何か暗示するところがあるようであり、徐注は、政治闘争による戦闘の結果として城街の農村経済が一斉に破産し荒涼した様子を描き出すとする。用例を見る限りでは、特に「荒城」を戦乱による荒廃とまでしなくてもよいようであり、ここでは夜眠れぬ人物(詩人)がいる場所の荒漠とした状況を示しているのであろう。また「無更声」は都市としての機能を失っていることを言うと同時に、前半四句では室内で眠れずにいた「愁人」が(時を知るために)室外へと出て行く契機となっている。

7・8 白露満田風裊裊、千声万声鶉鳥鳴

〔白露満田〕白露が田野いっぱいになり、時節が推移することを言う。

「白露」は時節の推移を示す秋の景物であり、古くは『詩経』秦風「蒹葭」に「蒹葭蒼蒼、白露為霜」(蒹葭 蒼蒼たり、白露 霜と為る)とあり、『礼記』月令・孟秋之月に「涼風至、白露降」(涼風至り、白露降る)とあり、また宋玉「九弁」(『文選』卷三三)に「白露既下降百草兮、奄離披此梧楸」(白露 既に下りて百草に降れば、奄ちに此の梧楸を離披す)とある。

陳注に引く「古詩十九首」其七(同卷二九)に「白露沾野草、時節忽復易」(白露 野草を沾し、時節 忽として復た易わる)とあり、「白露」が野草を覆うことで時節の推移を表現する。また魏文帝「雜詩二首」其一(前出)にも「彷徨忽已久、白露沾我裳」(彷徨 忽として已に久しく、白露 我が裳を沾す)とある。

この他にも唐より前に「白露」の詩の用例は多数。夜に眠れずに愁える男性を描く作品では、王粲「七哀詩二首」其二(『文選』卷二三)に「迅風払裳袂、白露霑衣衿」(迅風 裳袂を払い、白露 衣衿を霑す)とあり、劉楨「贈五官中郎將四首」其三(同卷二三)に「白露塗前庭、応門重其閤」(白露は前庭を塗し、応門は重ねて其れ閤せり)とある。前者は異郷の地での憂愁を、後者は遠征に従軍する五官中郎將の身を案じる。

唐詩でも用例は多く、「秋夜長」の先行作品である王勃「秋夜長」(『全唐詩』卷五五)にも「月明白露澄清光、層城綺閣遥望」(月明るくして 白露 清光に澄み、層城 綺閣 遥かに相望む)とあり、こちらは閨怨の樂府の例。

また「白露」が外に満ちることを言う例としては、崔宗之「贈李十二白」(同卷二六一)に「涼風八九月、白露滿空庭」(涼風 八九月、白露 空庭に満つ)、王建「烏棲曲」(『王建詩集』卷一)に「夜深宮殿門不鎖、白露滿山葉墮」(夜深くして 宮殿 門は鎖ざされず、白露 山に満ちて葉墮つ)とある。いずれも秋の訪れを示す例ではあり、前者は意を得ぬままに時節が推移することを言うのに対して、後者は深まりゆく秋の趣深い景物として「白露」が山いっぱいになり、広がることを言う。

杜甫の用例も多数。時節の推移を「白露」を以て表現する例としては、「雨二首」其一(『詳注』卷一五)に「青山澹無姿、白露誰能數」(青山 澹として姿無く、白露 誰か能く数えん)とある。

張籍の用例はこの一例のみ。

「満田」という表現は唐より前の詩には見られないようであり、唐詩では、李端「早春雪夜寄盧綸兼呈秘書丞」(『全唐詩』卷二八五)に「看竹雲垂地、尋僧月満田」(竹を看んとして雲は地に垂れ、僧を尋ねんとして月は田に満つ)、楊巨源「月宮詞」(同卷三三三)に「宮中月明何所似、如積如流満田地」(宮中の月明 何の似る所ぞ、積むが如く流るるが如く田地に満つ)とある。両者はいずれも月の光が田地いっぱいになり、広がることを言うようであり、特に後者は月の光が液体のように田にあふれることを表現している。

これも月の光が田地を白く輝かせるように、「白露」が田地いっぱいになり、広がることを言うのである。

〔風裊裊〕秋風がゆるやかにそよぐことを言う。

「裊裊」は「裊裊」に同じで、事物が揺れるさま、竹や楊が風に揺らされるさまを表現する場合が多い。ここでは秋風が吹くことを形容する。唐より前の詩で、風を形容する例としては、鮑照「採菱歌七首」其四(『鮑參軍集注』卷四)に「裊裊風出浦、容容日向山」(裊裊 風 浦を出で、容容

日 山に向かう」とあり、王筠「楚妃吟」(『樂府詩集』卷二九)に「蝶飛蘭復熏、裊裊輕風入」(蝶飛びて 蘭復た熏り、裊裊 輕風入る)とある。両者はいずれもおだやかな春の風を形容する。

唐詩では、王昌齡「何九於客舍集」(『全唐詩』卷一四一)に「此意投贈君、滄波風裏裏」(此意 投じて君に贈らん、滄波 風 裏裏たり)、劉商「秋夜聽巖紳巴童唱竹枝歌」(同卷三〇三)に「曲終寒竹風裊裊、西方落日東方曉」(曲終わりて寒竹に風裊裊たり、西方の落日 東方の暁)とある。両者はいずれも秋の風。

杜甫の用例は三例。陳注の引く「猿」(『詳注』卷一五)に「裏裏啼虚壁、蕭蕭挂冷枝」(裏裏 虚壁に啼き、蕭蕭 冷枝に挂かる)とあり、猿の鳴く声を「裏裏」と表現する。

張籍の用例は一例のみ。

「裊裊」を『全唐詩』は「嫋嫋」に作る。「嫋嫋」も風がそよぐさま。古くは『楚辞』九歌・湘夫人に秋風が木を揺らす形容として、「嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下」(嫋嫋たり 秋風、洞庭波ちて木葉下る)とあり、王逸注に「嫋嫋、秋風揺木貌」(嫋嫋は、秋風 木を揺らすの貌)とある。

唐より前の詩にも数例あり、秋風を表現するものとしては、謝靈運「石門新宮所住四面高山迴溪石瀨脩竹茂林詩」(『文選』卷三〇)に「嫋嫋秋風過、萋萋春草繁」(嫋嫋 秋風過ぎ、萋萋 春草繁る)とあり、梁簡文帝「初秋詩」(『藝文類聚』卷三)に「秋風忽嫋嫋、向夕引涼歸」(秋風 忽として嫋嫋たり、向夕に涼を引ききて帰る)とある。

また白居易に風を形容する例が数例あり、「秋日与張賓客舒著作同遊龍門醉中狂歌凡百三十八字」2968に「秋天高高秋光清、秋風嫋嫋秋虫鳴」(秋天高高として秋光清く、秋風嫋嫋として秋虫鳴く)とあり、「池上」2603には「嫋嫋涼風動、淒淒寒露零」(嫋嫋 涼風動き、淒淒 寒露零つ)とある。前者は秋の風と秋の虫がともに、後者は秋の風と露とがともに用いられている例。

唐に入って、用例は多数。盧照隣「獄中学騷體」(『全唐詩』卷四一)に「風嫋嫋兮木紛紛、凋綠葉兮吹白雲」(風嫋嫋として木紛紛、緑葉を凋ませ白雲を吹く)とあり、姚系「古別離」(同卷二五三)に「涼風已嫋嫋、露重木蘭枝」(涼風已に嫋嫋として、露は木蘭の枝に重し)とある。前者は離騷の体に学び、秋夜の憂いを述べたもの、後者は高樓の思婦を詠む詩の冒頭であり、「風」と「露」で秋を表現する。

杜甫には三例あり、「戲作寄上漢中王二首」其一(『詳注』卷一二)に「秋風嫋嫋吹江漢、只在他鄉何処人」(秋風嫋嫋として江漢に吹く、只だ他郷に在りしは何処の人ぞ)とあり、これは旅愁と秋風が関わる例。また「奉和嚴

鄭公軍城早秋」(同卷一四)に「秋風嫋嫋動高旌、玉帳分弓射虜營」(秋風嫋嫋として高旌を動かし、玉帳 弓を分かちて 虜營を射る)とあり、旗を靡かせる秋風を「嫋嫋」と表現する。なお『全唐詩』は後者を「裏裏」に作る。

張籍には本詩の他に一例あり、25「吳宮怨」(卷一)に「茱萸滿宮紅実垂、秋風嫋嫋生繁枝」(茱萸 宮に満ち 紅実垂れ、秋風嫋嫋として繁枝に生ず)とある。これは樂府の用例であり、また吳王の寵愛を失った宮女の悲しみを述べたもの。その【語釈】を参照。

〔千声万声〕たくさんの鳥の鳴き声。

唐より前の詩賦には、千声と万声の例がそれぞれ一例ずつあり、郭璞「江賦」(『文選』卷一二)に「其羽族也、則有晨鵠天雞、鶉鷩敖鷗。陽鳥愛翔、于以玄月、千類万声、自相喧聒」(其の羽族や、則ち晨鵠・天雞、鶉鷩鷗有り。陽鳥愛翔、于くに玄月を以てし、千類万声、自ら相喧聒す)とあり、隋・楊惲「陽春歌」(『文苑英華』卷一九三)に「春鳥一轉有千声、春花一叢千種名」(春鳥一轉 千声有り、春花一叢 千種の名)とある。前者はさまざまな種類の鳥が鳴きさわぐことを、後者は春の鳥がひとたび鳴けば、多様な音色が起ることを言う。

唐に入って、詩の用例は中唐以後に「千声」「万声」また「千万声」の例が数例あり、特に白居易に二例の用例がある。「五絃彈」041に「鉄擊珊瑚一兩曲、冰瀉玉盤千万声」(鉄は珊瑚を撃つ 一兩曲、氷は玉盤に瀉ぐ 千万の声)とあり、同じく「聞夜砧」1287に「八月九日正長夜、千声万声無了時」(八月九日 正に長き夜、千声万声 了わる時無し)とある。前者は玉の皿に氷を注いだように、細かな音があふれることを、後者は砧の音が町の至る所から聞こえてくることを言う。

〔鷓鴣鳴〕鷓鴣は、勇猛で死ぬまでも闘い続ける鳥(「鷓鴣」と、夜明けを求めて鳴く鳥(「鷓旦」)の二つがある。ここでは夜明けを求めて鳴く鳥がふさわしいようだが、或いは勇猛で死ぬまでも闘い続ける鳥のイメージも重ね合わせるか。

「鷓鴣」を、徐注・李樹政注・李建崑注は、いずれも勇猛で死ぬまで闘い続けるという「鷓(雞)」のこととする。『山海經』中山經・輝諸山に「濟山之首、曰輝諸之山、其上多桑、其獸多閭麋、其鳥多鷓」(濟山の首、輝諸の山と曰い、其の上に桑多く、其の獸は閭麋多く、其の鳥は鷓多し)とあり、郭璞注に「似雉而大、青色有毛、勇健闘死、乃止」(雉に似て大、青色にして毛有り、勇健闘死して、乃ち止む)とある。

唐より前の「鷓鴣」の詩の用例は見当たらないが、『藝文類聚』卷九〇「鳥

部・鷓」に魏の曹植及び王粲の「鷓賦」を挙げており、その曹植「鷓賦」序文（同卷九〇）には「鷓之為禽、猛氣其闐、終無勝負、期必于死。遂賦之焉」（鷓の禽為るや、猛氣 其れ闐いて、終に勝負無くんば、死に必ずするを期す。遂に之を賦す）とあり、鷓の勇猛さに注目する。

唐に入っても詩の用例は、張籍の他には高適に一例あるのみ。高適「遇沖和先生」（『全唐詩』卷二二二）に「頭戴鷓鳥冠、手遙白鶴翎」（頭には鷓鳥の冠を戴き、手には白鶴の翎を遙らす）とある。「鷓鳥冠」は勇猛な「鷓」の羽を用いた冠で、漢代では武人の冠であったが、ここでは隠者のかぶる冠を言う。

杜甫には「鷓冠」の用例が二例あるが、いずれも隠者のかぶる冠を言う。杜甫には他に「湘江宴餞裴二端公赴道州」（『詳注』二二二）に「鷓鷓催明星、解袂從此旋」（鷓鷓 明星を催し、袂を解きて此より旋らん）と、「鷓鷓」（「鷓鷓」に作るテキストもある）という語がみえる。これは朝方まで別れを惜しみ、夜明けを迎えて別れの時が来たことを言い、「鷓鷓」は夜明けを告げる鳥のようである。朱注に拠れば「鷓鷓」は二種類の鳥で、「鷓」は鶴の一種、「鷓」は、『礼記』月令に見える「鷓旦」という鳥のこと。『礼記』月令・仲冬之月に「冰益壯、地始坼。鷓旦不鳴、虎始交」（氷は益ます壯んに、地始めて坼く。鷓旦は鳴かず、虎は始めて交わる）、鄭玄注に「鷓旦、求旦之鳥也」（鷓旦は、旦を求むる鳥なり）とある。この「鷓旦」は夜が明けるときを求めて鳴く鳥、いまの寒号虫（オオコウモリ）とされる。

「鷓旦」の詩の用例も、唐より前には見当たらず、唐詩では元稹「有酒十章」其六（『元稹集』卷二五）に「蟾蜍雖怒誰爾懼、鷓旦雖啼誰爾憐」（蟾蜍怒ると雖も誰か爾を懼れん、鷓旦 啼くと雖も誰か爾を憐まん）とあり、これは夜明けを求めて鳴く憐れな鳥のようである。

結びの二句は、愁いを抱く人物が見る（聞く）夜明け前の世界を描く。徐注は「鷓鳥」は死ぬまで戦いを止めない鳥であることから、人類が互いに殺し合うこと、農村の破壊が終わらないことが愁え眠れない原因であると言ひ、李樹政注もほぼ同じように解釈する。しかし、杜甫の用例にあるように「鷓」は夜明けを求めて鳴く鳥（「鷓旦」）を指すこともある。いずれの解釈も可能なようだが、「荒城為村」以外に戦乱による荒廃やその批判を示す要素が他になく、また杜甫や元稹の用例から考えて、ここで「鷓鳥」を夜明けを求め鳥（「鷓旦」）であり、早く夜明けが訪れることを望む「愁人」の思いが託されているのであろう。

【補】

一 張籍「秋夜長」の構成

四句ごとに内容をまとめれば、この詩は次のような構成である。

- 1～4 深まりゆく秋の夜に眠れない人物
- 5～8 荒れ果てた町の夜明け

前半の四句は、冒頭の二句で深まりゆく秋の美しい夜空を描き、3・4句では時の推移と孤独の憂愁に沈む人物を描く。後半の四句は、5・6句で荒れ果てた町の夜明け前の静寂を描き、結びの二句では時の推移を感じさせる夜明けの景と夜明けを求める鳥の声を描く。

二 張籍「秋夜長」の特色

①もどくたとの比較

【解題】でも述べたように、張籍「秋夜長」のもどくたは、魏文帝「雜詩二首」其一である。「雜詩二首」其一は、秋の夜に眠れない人物が戸外を彷徨し、その人物が目にし、耳にする秋夜の景物が描かれ、その望郷の思いを述べるといふ内容である。「雜詩二首」其一の人物が見聞きする秋の景物は「白露」「清水波」「明月光」「天漢」「三五」（星）「草虫」（虫）「孤雁」（鳥）であり、多くが張籍「秋夜長」と重なる。

ただ【語釈】でも指摘したように、幾つかの点において異なるところもある。まず張籍「秋夜長」の冒頭二句は、深まりゆく秋夜の清澄さや月光を描くことよって、それとは対比的な「愁人」の暗澹たる状態を描こうとしているところがある。このような冒頭の設定は、次の「古詩十九首」其七の前半部分にむしろ近いと言えよう。

- | | |
|--------------------|-------------|
| 「古詩十九首」其七（『文選』卷二九） | |
| 1 明月皎夜光 | 明月 皎として夜に光き |
| 2 促織鳴東壁 | 促織 東の壁に鳴く |
| 3 玉衡指孟冬 | 玉衡 孟冬を指し |
| 4 衆星何歴歷 | 衆星 何ぞ歴歴たる |
| 5 白露沾野草 | 白露 野草を沾し |

6 時節忽復易 時節は忽ち復た易れり
 7 秋蟬鳴樹間 秋蟬 樹間に鳴き
 8 玄鳥逝安適 玄鳥 逝きて安くにか適く
 ……………

「古詩十九首」其七は、冒頭二句に白く輝く月の光や明るくきらめく「衆星」を描き出す。ただし、それは時節を感じさせる促織の聲、時節を示す「玉衡」（北斗の斗柄）とともに用いられており、秋夜の美はあまり強調されておらず、張籍「秋夜長」が、「古詩十九首」其七を強く意識するというわけではないが、その発想や表現には、漢魏の古詩に通うところが多い。

他にも、「語釈」に示したように、第三句の「愁人」は古くは『楚辞』に見える語で、のちに傅玄「雜詩」に於いて、愁いのために眠れない人物として用いられたものであり、また「枕席」は、宋玉「高唐賦」に男女がともに過ぐす場として見え、のちに潘岳「悼亡詩三首」其二などに於いて、伴侶の不在を嘆くものとして用いられる語である。さらに「蟋蟀（暗虫）」は『詩経』や宋玉「九弁」に見え、「九弁」の王逸注に於いて、蟋蟀の接近が秋の深まりを示すと注され、魏晋の詩では蟋蟀の接近（時の推移）を嘆く不眠の人物が詠まれるようになる。

張籍「秋夜長」は、このように魏晋期の詩において醸成された夜の憂愁を引き起こす景物を用いながら、秋夜の憂愁を描いているようである。

② 同題樂府との比較

『樂府詩集』卷七六は、「秋夜長」の同題作品として、南齊の王融、初唐の王勃の「秋夜長」を収める。このうち、王融の作品を、『玉台新詠』卷一〇は「秋夜」と題し、また『古詩紀』卷五七は「奉和秋夜長」としており、本来樂府詩であったかは定かではない。その冒頭は「秋夜長」で始まり、その内容は秋夜の宴の楽しみを詠んだものである。【解題】でも述べたように、六朝末頃には夜の長さを憂愁を否定することで、夜の楽しみを強調しようとする傾向があり、これもその一つの例と考えられる。

この他に、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』には、東晋・蘇彦「秋夜長」（『藝文類聚』卷二）、謝混「秋夜長」（同卷三）が収められており、前者は、秋の景物が移り変わることに榮枯盛衰を感じ、その悲嘆を詠じつつ、厳しい時節に耐え抜ぬく「貞松」や「金菊」を末尾に詠む。後者は時節の推移が速やかであることを詠じたものであり、いずれも秋夜の思いを男性（詩人）の視点から詠むもので、魏文帝「雜詩二首」の系譜に連なるものようである。

唐に入って、王勃の「秋夜長」は遠征の男性を思う女性を詠み、秋夜の憂愁を歌うところは、魏文帝「雜詩二首」其一と同じだが、憂愁する人物が異なる。王勃「秋夜長」以外に、『全唐詩』には錢起「效古秋夜長」があるが、これも遠征の男性を思う閨中の少婦を詠じたもので、王勃「秋夜長」に類する。

この他に、『樂府詩集』卷七六には、王維の「秋夜曲二首」と王建の「秋夜曲」を収める。王維の「秋夜曲二首」は、其一は「空房」に独り戻ることを厭い、いつまでも箏を奏でている女性を詠む。どのような境遇の女性なのかは明示されていないが、「輕羅」「銀箏」などの語から貴人の訪れを待つ女性かと想像される。【語釈】で述べたように、「空房」に戻るのに耐えられないとするのは、張籍の「愁人」が「枕席」を「畏」れるのと類似する発想。一方、其二は遠征中の男性を思う女性を描く。前半二句は水時計の音によって夜の長いことを表し、雲の間から月の光が漏れてくる様を描き、後半二句は秋の深まりを「暗虫」の声によつて表し、「征衣」を送り届けるまでは寒さが厳しくならないようにと願うというものである。これも【語釈】で述べたように、秋の深まりを「暗虫」の声で表すという発想が、張籍と類似する。このように、王維「秋夜曲二首」は女性の憂愁を詠むものだが、その表現や発想は張籍「秋夜長」に類似するところがあるのだが、二首いずれも中唐人の作とされているところから、張籍「秋夜長」が王維「秋夜曲二首」を踏まえるのかどうかは分からない。

王建の「秋夜曲二首」も秋夜に愁える女性を詠んだものであり、其一は玉門関の向こうに遠征する夫を思う女性を、其二は宮中に仕えて帰ってこない男性を思う女性を詠む。王維「秋夜曲」と同じように立場の違う女性の、それぞれの秋夜の憂愁を描いた作品であり、その表現や語句も張籍「秋夜長」との明確なつながりは窺えない。

以上、「秋夜長」の同題作品は、東晋の二作品までは男性を主体としていたが、唐に入って不在の男性を思慕する女性を主体とする作品へと変わっている。このような流れのなかで、張籍「秋夜長」は、唐の同題作品とは異なり、もどろたの魏文帝「雜詩二首」其一へと回帰し、男性の秋夜の憂愁を描く。また前述の如く、その表現や発想は、漢魏晋の不眠の男性を描く詩で醸成されたものを積極的に取り込んでいようである。

そして、それら前代の男性の秋夜の憂愁を描く作品と、張籍の「秋夜長」が異なる点は、第五句の「荒城為村無更声」で、その舞台を荒れはてた農村に設定しているところであろう。かつて城街であった農村のものさびしさは、ただでさえ悲しい秋夜の思いを更に駆り立てる。またその場面設定により、

男性の置かれた状況が暗示され、読む者の想像を駆り立てる。更に「無更声」は人気のない農村の静けさを表現するとともに、詩の構成から言えば、男性の目を室外へと向けさせる契機ともなっている。このように第五句は、前半

四句から後半四句へと、詩の世界を展開させる働きを担っており、前半ではやや客観的に秋夜や愁人を外側から描いていたのに対して、後半は男性の視点からその農村の秋夜が捉えられているようである。
(佐藤)